CONTROL THROUGH TRAUMA VOL.25

EL ZINE

the [international] kvlt conspiracy



Göteborg Punk & Hardcore

ANTI CIMEX

Roine from PSYCHOTIC YOUTH
Johan from PROTESTERA
Sebastian Todor & Scene Report !!

LEBENDEN TOTEN
SLIGHT SLAPPERS
SOCIAL TERROR FABRICATION
CHIRO VS MORLEY
UNFADED
LASHING SPEED DEMONS
BLACK SABBATH

the [international] kvlt conspiracy EL ZINE CONTROL THROUGH TRAUMA VOL.25



CONTENTS VOL.25

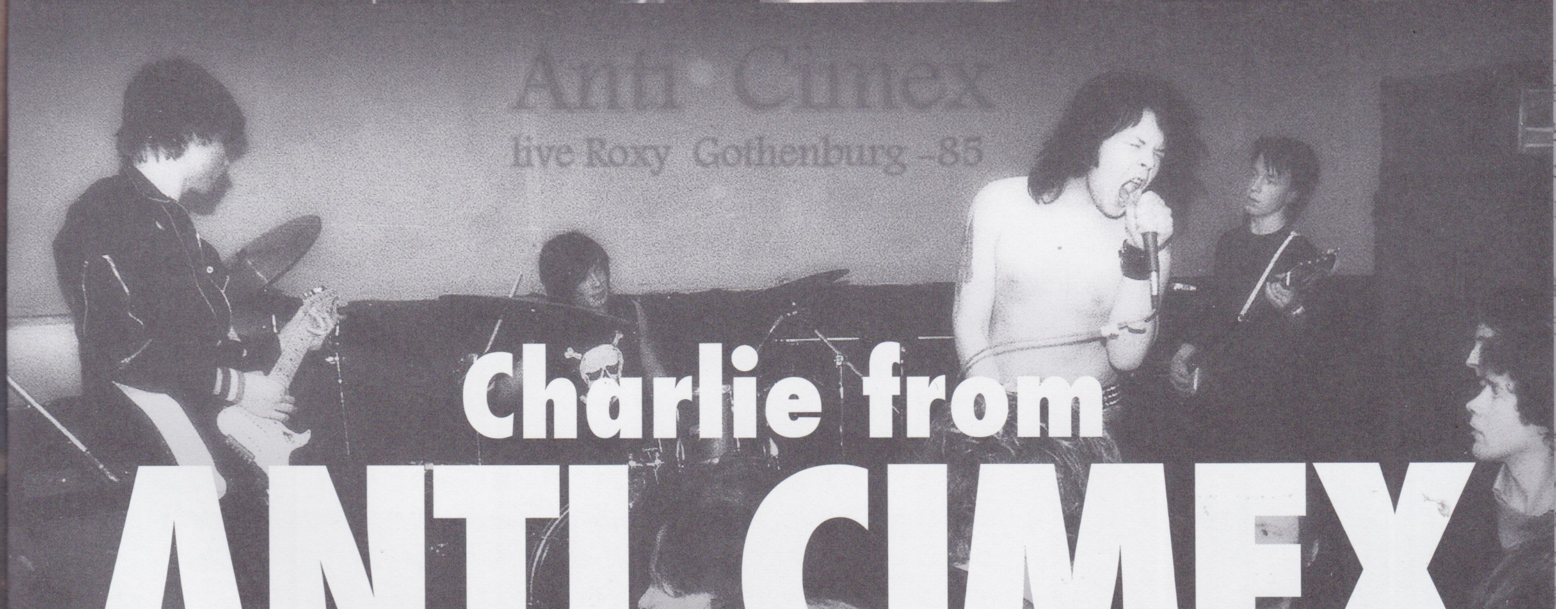
Cover Photo:ANTI CIMEX Photo by Todor





Enjoy Your GBG Sound

Göteborg Punk & Hardcore

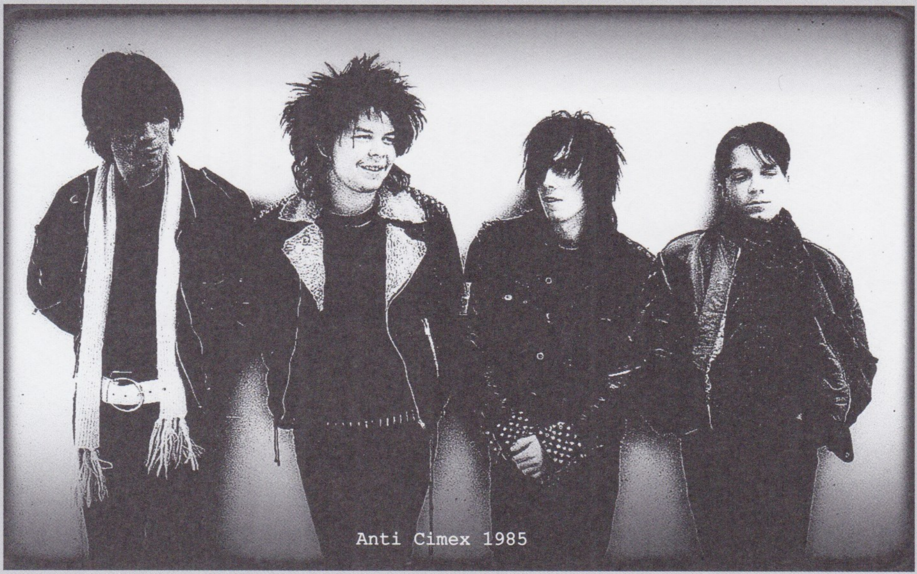


Charlie from ANTI CIMEX

スウェーデンのパワー・ポップ・バンド:PSYCHOTIC YOUTH。前号では、そのリーダーであるJörgenへのインタヴューをWaterslide Recordsのオニギリさんに行なってもらいました。…が、期せずして、PSYCHOTIC YOUTH現ベーシストのRoineは、スウェーデン・パンク/ハードコアの聖地ヨーテボリ(GBG)・シーンの生き字引だというではありませんか!
「Roineにも話しを聞いてみたら面白いんじゃない?」というアドヴァイスをオニギリさんから頂いたので、Roineへのインタヴューを敢行してみたところこれがメッポウ面白い!しかも、「ヨーテボリのパンクスを色々紹介できるよ」というアリガタイお言葉も!当初は彼への単独インタヴューのみを考えていましたが、これはもう全力でヨーテボリ特集をやるしかないでしょう!!
本特集のトップを飾るのは、厳密にいうとヨーテボリ“出身”ではないんだけど、ヨーテボリを“拠点”に活動していた、北欧ハードコア史上に燦々と輝く最重要バンド:ANTI CIMEX!!…のオリジナル・ドラマーであるCharlieへのインタヴューです!!!!!

Photo by Todor

Photo by Todor



Anti Cimex 1985

■まずは、どのようにしてスウェーデンのパンクやハードコアのシーンを知りましたか?何歳のことでしたか?

「俺がパンクになったのは79年か80年のことで、俺はハードコアのことをまだ知らなかったんだ。クラシックなパンク、SEX PISTOLSやCLASHを聴いていたんだよ。だけど、EXPLOITEDやCRASS、DISCHARGEといったイギリスのレコードがスウェーデンに入ってくるまで、それほど時間はかからなかったけどな。俺とパンクとの初めての出会いは、学校の旅行でロンドンに行った友達を介してだった。あいつはパンクのシングルを大量に買ってきて俺の自宅へ遊びに来た。最初はひどいサウンドだと思ったけれど、すぐにその考えは変わったね!」

■バンドを始める前には、どんなショーを見に行っていましたか?

「俺の地元ではショーなんて滅多になかったんだ。俺たちは最初のパンクスだったから、地元で開催されるショーは完全に把握していた。なにせ、全てのギグを自分たちで企画しなきゃならなかったからな。でも、俺たちはヨーテボリにはよく行っていたよ。パンク・ギグがしょっちゅう開催されていたからね。実際リハーサルをしていないときは、毎週末ヨーテボリに通っていたもんさ」



■ANTI CIMEXが結成される前、メンバーはBOHMAN BRINNERというバンドをやっていて、そこにあなたが加入して、バンド名がANTI CIMEXに変わった、ということで合っていますか?そもそもBOHMAN BRINNERはどんなバンドだったのでしょう?パンク・ロック?それともハードコア?

「BOHMAN BRINNERに加入したわけではないな。俺が加入した時点で、ANTI CIMEXという新しいバンドになっていた。ただ、メンバーのうち3人がBOHMAN BRINNERだったんだよ。BOHMAN BRINNERはハードコアと言うよりもパンクだった。まだ発展途上のものだったけどな」

■最初期のANTI CIMEXではASTA KASKのBonniが歌っていたって話しを聞いたことがあるのですが、本当ですか?

「いや、それは事実ではないな。彼はギターをしばらくの間、弾いていたんだ。彼をヴォーカルにしようという計画はあったんだけど、それは実現しなかったから、それでJonssonが代わりにヴォーカルをやることになったのさ。俺たちにしてみれば、ラッキーだったんじゃないのかな!」

■あなたたちがヨーテボリに引っ越して来たのはどうして?Roineは、"ANTI CIMEXのメンバーはマリエスタードや他の小さな町の出身なんだ"と教えてくれましたが。

「俺たちのうち2人はシェブデ、1人はマリエスタード、もう1人はエッグビーの出身で、いずれも50キロ圏内なんだ。だから俺たちはスカラボリ県の出身だと言っていたな。それが俺たち全員が住んでいた地域なのさ!前述したように、俺たちはショーを見るためにヨーテボリへしょっちゅう行ってたし、ヨーテボリ・パンクスとつるんでいた。だから引っ越して来たのは自然なことだったんだよ」

■どのような経緯で、DISCHARGEスタイルのハードコア・バンドをやることになったのですか?JonssonはSHITLICKERSのメンバーでしたし、彼のアイデアだったのでしょうか?スウェーデンで初めてDISCHARGEスタイルをやったバンドは、SHITLICKERSとANTI CIMEXになりますか?

「そうだな、決定を下したことなんて何もないよ。俺たちの音楽的な成長における、自然なステップに過ぎなかったんだ。DISCHARGEを聴くことがなかったとしても、恐らく俺たちは似たような音楽をプレイしていただろうね。とは言え、DISCHARGEが俺たちの主たる影響源だったことは、認めざるを得ないな。JonssonがSKITSLICKERSに加わったのは俺たちがANTI CIMEXを始めたずっと後のことだったし、あいつにとってはサイド・プロジェクトに過ぎなかった。SKITSLICKERSが俺たちに影響を与えたなんてことは全くないね。Jonssonが加入する以前は、SKITSLICKERSのサウンドはもっと普通のパンク・バンドみたいなものだった。だからきっと彼がD-BeatのアイデアをSKITSLICKERSにもたらしたんじゃないかな。でも…、あいつらは俺たちが「Raped Ass」をリリースする前に、自分たちのEPをリリースしやがったよ!クソッタレ!」

■ANTI CIMEXを結成する際、DISCHARGE以外にはどんなバンドから影響を受けていましたか?やはりDISORDERやCHAOS UKといったUKハードコア・バンドですか?

「意外なことは何もないよ。お前が挙げたバンドはもちろんのこと、あとはMOTÖRHEADにBLACK SABBATH、ALICE COOPER、ALAN VEGA、SUICIDE、SLADE、THROBBING GRISTLE、それにもっと色々とね。当時としてはありがちな影響源さ」

■どうして初代ヴォーカルだったNillenはANTI CIMEXを辞めたのですか?そして、どうして新しいヴォーカリストを入れずに、ベーシストだったJonssonが歌うことになったのでしょう?彼がヴォーカルをやりたがったのですか?新たに加入したベーシストのConradとは、元々友達だったのですか?

「Nillenが抜けたのは俺たち全員が同意したからさ。求めているサウンドに関して意見が異なっていたからな。そこでBonniの話しが再び上がってくる。Nillenのあとには彼がマイクを握ることになっていたんだ。しかし困ったことに、彼はASTA KASKのために俺たちの元から去っていった。でも俺たちはJonssonが歌うことになってより良くなったし、ASTA

KASKもBonniのおかげでより良くなったからちょうど良かったんじゃないのかな!Jonssonは歌いたがっていたし、俺たちも二の足を踏むことはなかった。Conradは…そうだな、他の街(ヨーテボリ)に暮らす友人だったんだよ。あいつは練習のためにシェブデまで出てくることも厭わなかったし、素晴らしいベーシストだったからな!間違いないだろ?」

■あなたがインタヴューに答えている昔のファンジンを読んだことがあるのですが、そこには"JockeとConradが曲を作り、Jonssonと俺が歌詞を書いている"とありました。曲と歌詞を別々に作っていたのですか?

「俺たちはありとあらゆる方法で曲を作っていた。曲作りに関して、決まった定式みたいなものはなかったんだよ。歌詞を持ってくる奴がいればそれを使うし、リフを持ってくる奴がいればそれを使う。それくらいシンプルさ。時々、歌詞とリフの両方を持ってくる奴もいたけど、それもうまくいったぜ。あとはジャムっているときにJonssonが何かを叫ぶ、なんてこともあったな。そしたら、ほら、新曲のできあがりさ!」

■84年か85年にはPatrik Granathがドラマーとして加入し、あなたはベーシストになりましたよね?どうしてパートを変えたのですか?

「その通り。俺たちはGranathのことを気に入っていたし、ベーシストも不在だったからさ。それで、Nillenが抜けたときと同じことを俺たちはやってみた。このときは、それほど良い具合にはならなかったから、それで結局は元に戻したんだよな」

■80年代によく共演していたバンドは?

「普段は友人のバンドとやっていたな。例えばDISARM、PRODUCT ASSAR、LOBOTOMIとか。ヨーテボリのバンドともたくさん共演したよ。DISARM(またただけど)にAB HJÄRNT VÄTT、それにABSURDとかね」

■AGONIと行なった"Chainsaw Tour '86"のことは覚えていますか?ツアーでの思い出は何かありますか?

「多少覚えているな。色んな面でとんでもないツアーだったぜ。右側通行で普段運転している俺たちにとって、イギリスの道路を運転するのは地獄だったな。金も全然持っていなかったし、稼げもしなかった。実際、俺は腹ペコだったよ。会場では、サポートのバンドが長時間演奏し過ぎたせいで、しばしば俺たちの演奏中に電源を落とされたこともあった。でも、良いこともあったよ。ギグに来てくれた人たちや、ビールを飲んでサッカーして、またビール飲んで。とにかくビール、ビール、ビールを飲みまくったな」

■そのツアーではDISCHARGEとも共演しましたよね。でも、当時のDISCHARGEは「Grave New World」をリリースしたばかりだったから、観客は彼らを見ずに会場から出て行ってしまった、なんて話しを聞いたことがあるのですが、本当ですか?あなたはDISCHARGEについてはどう思っていました?

「それは本当だ。だけど全員が出て行ったわけじゃない。多くの人たちが留まり、そして罵声を飛ばしていた。そしてANTI CIMEXを出せと叫んでいたな。俺はDISCHARGEが大好きだ。だけど、あの頃はバンドとして本当に良くなかった。でも、まぁ、彼らは自分たちの道を突き進んだのさ。そいつをリスペクトすべきだよ!」

■「Absolut Country Of Sweden」のタイトルとデザインは、スウェーデンのウォッカAbsolut Vodkaのオマージュですが、ANTI CIMEXとレーベルはそのウォッカの酒造メーカーとトラブルになったんですよね?その後にLPのタイトルとデザインが変更になっていますし。メーカーからは実際、どんな連絡があったのですか?

「あいつらの弁護士から、LPのリリースを止めなければ告訴するという脅しの手紙が届いたんだ。俺たちは話し合い、次回のプレスからはカヴァーを変更するということで折り合いをつけた。クソッタレ」

■「Absolut Country Of Sweden」には"No Metal, No Funk, No Death"と書かれたステッカーが貼られていましたが、あの作品はちょっとメタルの要素がありましたよね。新ギタリストのCliffの影響があったんじゃないかと思うのですが、実際は?

「Cliffはたしかにその要素をバンドにもたらしてくれたし、俺たちもそれを歓迎した。バンドとして成長したかったし、色んな音楽からの影響を受け入れることで、俺たちは成長することができたからさ。ただ、それをメタルとは言いたくなかったんだ。でも、そうだな、みんながそう言うことは理解しているよ」

■それと、CliffはどうしてANTI CIMEXに加入することになったのですか?昔から彼のことは知っていたのでしょうか?

「ずっと前からCliffのことは知っていたし、Jockeがバンドから抜けたときに、Cliffは唯一の選択肢だったんだ。残念ながら当初、彼は断ってきた、それで俺たちはバンドを停止させたのさ。彼が考え直すまで2年かかったぜ」

■ANTI CIMEXは2回ほど解散していますよね(87年と93年)。それぞれの理由を教えてもらえますか?

「87年に解散したのはJockeが抜けてしまい、その代わりとなるCliffからも断られてしまったからだ。93年の解散は、俺たちはもうミュージック・ビジネスに対して心底ウンザリしていたし、Jonssonのアルコール依存症もどんどん手に負えなくなってきたからさ」



Jonsson at FINLAND 1985 Photo by Todor



ANTI CIMEX 1983 Photo by Todor



■ANTI　CIMEXは世界中のハードコア・バンドに多大なる影響を与えましたが、どうしてあんなに素晴らしい楽曲を作ることができたのですか?

「ハハハ、俺たちは、俺たちが聴きたい音楽を作っただけ。俺たちがやったことはそれが全てさ」

■自分たちのレコードだと、どれが一番好きですか?

「そうだな、「Raped　Ass」とミニLP、「Scandinavian Jawbreaker」にはすごく満足しているよ。一枚だけを選ぶのは無理だね」

■Jonssonはアルコール依存症の問題を抱えていましたが、彼とは会ったりしているのでしょうか?ANTI CIMEXの再結成は?

「あいつは重度のアルコール依存症だったし、今も問題を抱えている。でも10年前と比べれば、現在はかなり良くなっていると言えるだろうよ。事実、数ヶ月間断酒していたこともあるんだ。まぁ、それは更生施設に入っていたときのことだけどな。肉体的なダメージこそ大分あるけれど、それでも今はずっとマシになっているんだ。俺はあいつと定期的に、ほぼ毎週のように話しているぜ!再結成について話したこともあるが、俺は再結成ってやつが嫌いなんだよ。もし俺たちが再結成するとしたら、新しいレコードを引っ提げてやるだろうな。過去にすがっていたくはないんだ!でも、再結成への道のりは遠く、そしてその可能性は僅かだけどな、ハハハ」

■ところで、「A Tribute To Anti Cimex」は聴いたことがありますか?DRILLER KILLERも参加していましたが、あの頃は、あなたはDRILLER KILLERのメンバーでしたか?

「持っているし、大好きな作品さ!あのとき、俺はメンバーじゃなかったよ。俺がDRILLER KILLERに在籍していたのはバンドが終わるまでの3～4年間だけだったし、レコードには一枚も参加していないんだ」

■あなたはPSYCHOTIC YOUTHのメンバーでもあったんですよね?いつの時代ですか?パワー・ポップも好きなんですか?

「俺がいたのは短期間だけさ。ギグも2回しかやってないからな。一つは俺の40歳の誕生日パーティで、もう一つはPSYCHOTIC YOUTHの20周年記念を祝うギグだった。俺はありとあらゆる音楽が好きだし、PSYCHOTIC YOUTHはお気に入りのバンドの一つだ。彼らと一緒にプレイできて最高に光栄だったぜ」

■あなたのバンド・キャリアについても聞きたいのですが、ANTI CIMEXやDRILLER KILLER、TROUBLEMAKERSなど、様々なバンドでプレイしてきましたよね?

「あぁ、リストを書いたぜ。

1980年 PILLER
俺の最初のバンドで、何も音源は残していない。10回ギグをやっただけさ。

1981年～1993年 ANTI CIMEX
まぁ、俺のメイン・バンドだな。

1994年～1999年 NOT ENOUGH HATE
ハードコア・バンドでリハーサルはたくさんしたが、ギグは少ししかやらなかった。

2006年? PSYCHOTIC YOUTH
パワー・ポップ・バンド。

1999年～2008年 TROUBLEMAKERS
ヨーテボリのロックンロール・パンクで、俺が最も激しくギグをやっていた時期だな。

2006年～2009年 DRILLER KILLER
Live and kicking!

2010年～2011年 THE NUNNERY
女性がフロントに立つパンク・ロック。

2011年 DEATH DEALERS
EXTREME NOISE TERRORとのプロジェクト。

2010年～2012年 THE GREAT GERMAN RE-RESEARCH
俺たちは混乱を目指していたが、混乱したのは俺たちだけだった。

2009年～? BLINDFISTED
ブラック・メタルのミュージシャン2人とノルウェーでやっているプロジェクト。

2012年～? KNIFE FOR AN EYE
GBHやZEKEスタイルのパンク・ロック。

2011年～? WOLFHOUR
ヨーテボリのハードコア。

2010年～? BRING THE DRONES
スタジオ・プロジェクトで、実験的なハードコアの類い。

恐らく、いくつか忘れているバンドもあるだろうな…」

■今のヨーテボリのハードコア・シーンについて、何か思うところは?

「今のハードコア・シーンとはあまり接点がないんだ。俺は歳をとりすぎたのさ、ハハハ」

■日本のハードコアで知っているバンドはいますか?

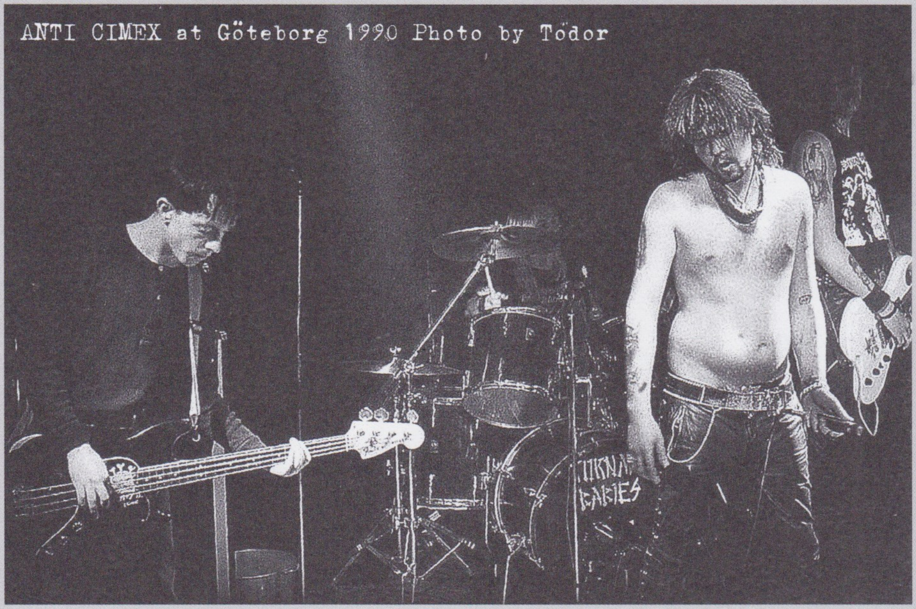
「あぁ、もちろん、たくさんいるぜ。D-CLONE、G.I.S.M.、DISCLOSE、それにもっとな。日本のバンドがハードコアをやるとすごく格好良いし、時として限界をブチ破るよな。俺は好きだぜ」

■ちなみに最近はどんな音楽を聴いていますか?

「TURBONEGROをよく聴いているよ。レコードもたくさん買っているんだけど、聴く時間がないんだよな。ノルウェーのSLIPSや日本のREALITY CRISIS、それに他のグレートな日本のバンドもな!」

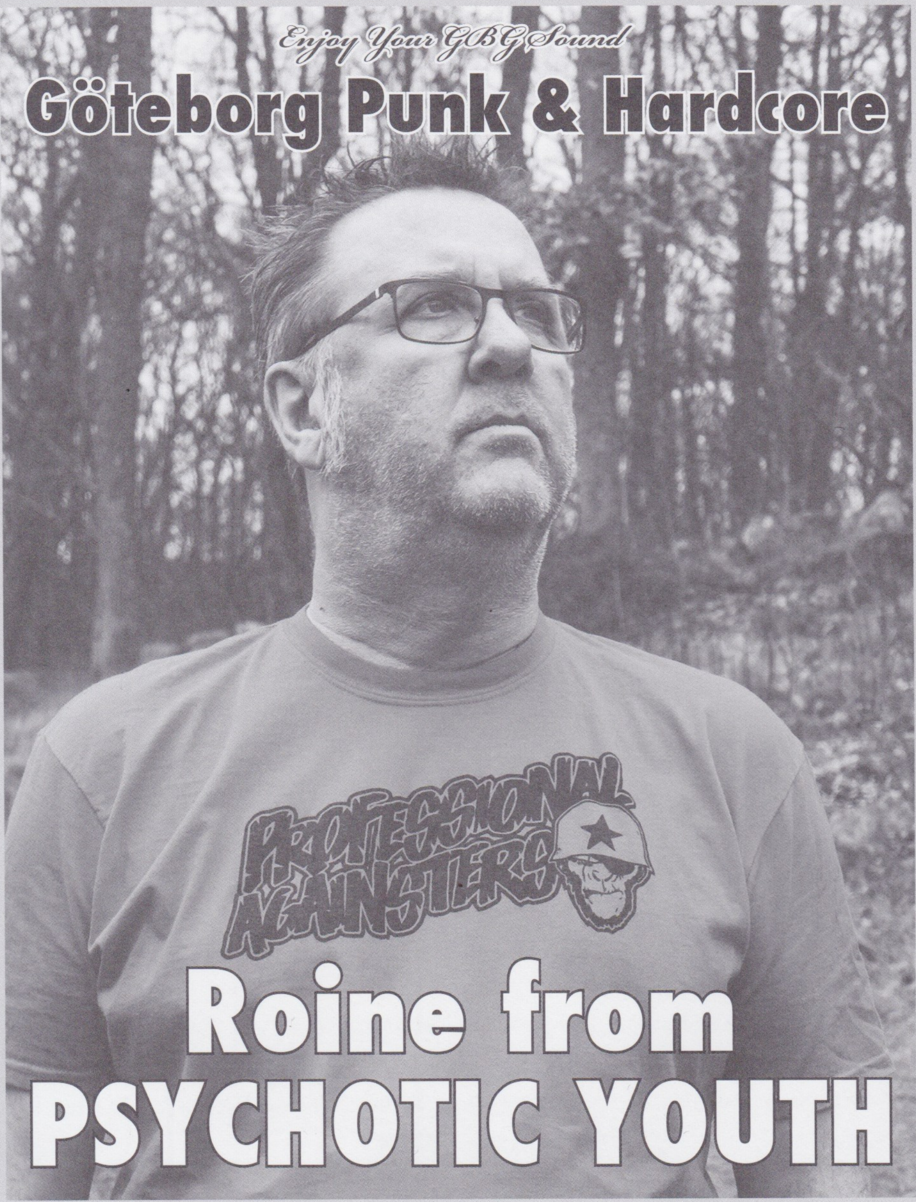
■インタヴューさせてくれてありがとうございました。読者にメッセージをお願いします。

「ありがとう!パンクでいろよ!音楽はラウドで、そして自由であるべきだ!」



Enjoy Your GBG Sound

Göteborg Punk & Hardcore



Roine from PSYCHOTIC YOUTH

Charlie(ANTI CIMEX)のインタヴューに続いては、PSYCHOTIC YOUTHのベーシストにしてカメラマンとしても活動しているRoine(80年代にはTHE ROINE'S KVARTETTというパンク・ロック・バンドもやっていた)のインタヴューをお届けします!

Charlieにしろ、このあとに続くTodorやJohanにしろ、全てはRoineからの紹介でして、…僕はもう彼に足を向けて眠れません(実はÄgg TapesオーナーのKentにもインタヴューしたのですが、Kentは現在ヨーテボリ郊外でカフェを経営し大変多忙とのことで、今号には間に合いませんでした。回答が到着次第、掲載したいと思います)。

PSYCHOTIC YOUTHのJörgenも前号のインタヴューで、「Roineこそがパンクについてはアインシュタインだよ」と語っていたように、当地のシーンを知り尽くしている人物こそが、このRoineなのであります。

ヨーテボリについて

■どのようにしてヨーテボリのシーンと関わるようになったのですか?また、それは何歳くらいのことでしたか?

「それはたしか1980年だったな。ヨーテボリ郊外のコルテドラにある青少年センターでその夜、ATTENTATやKNUGENS HÅF、それにもういくつかのバンドが演奏したんだ。名前を思い出せないバンドがいるんだけど、そのバンドのメンバーにはMats "Dojan" Hanssonがいたんだよね(彼はその後にBUMSEN MUSS MANN、そしてMUSTASCHのドラマーになったんだ)。それにConrad(のちのANTI CIMEXのベーシスト)もいたんだよ。当時、僕は16歳で(1964年生まれだよ)、以前からRAMONESや他のアメリカやイギリスのパンク・バンドを聴きまくっていたね」

■ヨーテボリで最初のパンク・バンドって何になるのでしょう?GÖTEBORG SOUND?最初のハードコア・バンドは?

「僕が思うに、そうだね、君の言う通りGÖTEBORG SOUND(僕が最高に気に入っているバンドの一つ)と、あとはBRUSETかな。BRUSETはのちに、もっとスカ/レゲエ寄りのバンドになるんだけどね。GÖTEBORG SOUNDは7インチをリリースした最初のバンドで、それは「Rik Man, Fattig Man」というタイトルだった。1978年のことさ。BRUSETやGÖTEBORG SOUNDのメンバーは、他のバンドよりも2～3歳ほど年上だったんだよ。そしてGÖTEBORG SOUNDとPERVERTSのメンバーらによってTROUBLEMAKERSは結成された。君も知っているだろうけど、TROUBLEMAKERSは2014年に日本ツアーをしたよね。結成から35年以上経っても未だに活動中さ!SKITSLICKERS(のちのSHITLICKERS)はヨーテボリで最初のハードコア・バンドだね。僕たちはああいったパンクのスタイルを"kängpunk"やD-Beatと呼んでいる。この手のバンドの多くはDISCHARGEから影響を受けているんだ」

■当時は、パンクスのための会場ってあったのでしょうか?バンドはショーをどこでやっていたのですか?

「あの頃のベストな会場はヨーテボリ市内にあったね。例えば、有名なSprängkullen(初期においてはプログレ・バンドがよく使っていた)であったり、ヨーテボリ/ゴルダのRockersとか。ヨーテボリ郊外の色んな青少年センターでも多くのギグが行なわれていたよ。ほとんどの会場ではアルコールが禁止されていたから、おかげで会場の外に酔っ払いが溢れていた。みんなビールや自家製のワインを飲んでいたな。そうしてから、みんな会場に足を踏み入れるんだ。当時、77年から82年のヨーテボリにおいて最も重要な出来事は、Garageliganが創設されたことさ。GÖTEBORG SOUNDやBRUSET、ATTENTAT、PERVERTSやその他のバンドによる団体で、彼らの多くはVA「GBG Punk 77-80」に収録されているよ。そして最も重要なイヴェントは夏の野外フェスティヴァル、Slottsskogsfestivalenだったね。ヨーテボリの最高のパンク・バンドと、スウェーデンの他の地域のバンドが出演した。パンク・バンドの第一波の後には、数多くのハードコア・バンドによる第二波が巻き起こった。当時のハードコア・バンドはスクワットや先述した会場で頻繁にギグを行なっていたよ」

■パンク・レーベルというのは沢山あったのでしょうか?

「いや、どのレコードもバンドによる自主リリースだったね。だからどのバンドも自分たちのレーベルを持っていたと言えるかな。数年後にはいくつかのGarageliganバンドによって

Non Stop Recordsが設立されることになるんだけどさ(そのレーベルが「GBG Punk 77-80」を出したんだよ)」

■どんなバンドのショーによく行っていましたか?今でも印象に残っているショーは?

「ベストなコンサートはSprängkullenで開催されたものだったな。EBBA GRÖNやATTENTAT、TROUBLEMAKERSにANTI CIMEX、そしてDISCHARGEのショーをそこでは見たよ。もちろん、他のバンドも見たけどね」

■SHITLICKERSのショーは見たことがありますか?ヴォーカルのLarsはヤバかったとよく聞きますが…。あと、ABSTRACTもヴァイオレンスだったとか。本当ですか?

「いや、僕はSHITLICKERSを見たことはないんだ。だけど、事実ではあるね。時々、暴力沙汰があったみたいだ。いつもじゃないけど、たまにね。噂では、Larsはオーディエンスに飛びかかってケンカを始めたって話しさ。ABSTRACTのRobert Hammondは妊娠している女の子を刺したって聞いたけど、僕がその場にいたわけじゃないから、あくまでも噂だよ」

■基本的に70年代や80年代のショーの雰囲気はどんなものでしたか?暴力的だったのか、フレンドリーだったのか。アルコールやドラッグ絡みの問題はありましたか?

「バンド間の雰囲気はすごくフレンドリーだったと思うよ。時々、観客同士のケンカはあったけどね。多くのパンク・ロッカーたちは互いを尊重していたんだ。もっと暴力的になるのはその後、多分80年代半ばになってからじゃないのかな。当時はみんな会場の外でアルコールをたらふく飲んでいたね。ときには会場で飲むことも、もちろんあったけどさ。パンク・ロッカーはみんな貧乏だったからアルコールを調達するのに苦労していたよ。自分たちでワインとかを作ったりね。80年代になってからドラッグが大きな問題になったんだ」

■「GBG Punk 77-80」や「GBG Hardcore Punk 81-85」といったコンピレーションのことを、実際にヨーテボリに住んでいる人はどう評価しているのですか?

「ヨーテボリのパンクにとって、その2作品はベストなものさ。僕は「GBG Punk Volym Två 1980-1984」も好きだよ。僕が好きなのはやっぱり、1978年から1984年の間にかけてリリースされたEPなんだ。その頃にリリースされた作品のほとんどを僕はコレクションしているよ」

■ところで、ANTI CIMEXのホームタウンはヨーテボリだったんですか?それともメンバーは別々の都市に住んでいたのですか?

「ANTI CIMEXのメンバーはマリエスタードや他の小さな町の出身なんだ。マリエスタードはヨーテボリから200キロ離れていて、80年代初期に彼らは引っ越して来たんだよ。マリエスタードではANTI CIMEXとASTA KASKは、同じリハーサル・スペースを共有していたのさ」

■ヨーテボリの70年代や80年代のバンドのいくつかは再結成を果たしていますが、オススメのバンドはいますか?

「TROUBLEMAKERSだね。今でもヨーテボリのベストなバンドの一つさ。あとはSLOBOBANS UNDERGÅNG。彼らが一年前にMusikens Husでやったショーは印象深いね。すごく良いバンドだよ。ATTENTATは何度も再結成をしているけど、今でも格好良いね」

■あなたはヨーテボリのパンク・シーンに80年代から現在までずっと関わり続けているんですか?いつの時代が一番好き?

「80年代には数え切れないくらいコンサートに通っていたよ。けど80年代の終わりから90年代半ばまでは、子供ができたこともあってパンク・ギグからは一時的に遠のいていた。その後はできるだけ多くのギグに足を運ぶようにしているよ。バンドの写真を撮ることも好きだったし、僕は写真家としても活動しているからね。やっぱり好きな時代は78年から82年だけど、新しいバンドも大好きさ」

■当時のパンク・シーンと今のパンク・シーンとでは、何か違いを感じますか?

「オーディエンスが年寄りになったね!今や暴力沙汰はほとんどないし、バンドの演奏はよりファストになっている。技術的にも、すごく熟練されているよね」

■新しいバンドについても聞かせてください。若くて格好良いバンドはいますか?

「TRUBBELとPROFESSIONAL AGAINSTERSが大好きだね。それとSMASH IT UPも。他にもたくさんいるけど、今すぐには名前が出てこないな。TRUBBELはGBGパンクの78-82年スタイルで実に良いね。彼らは4人のメンバーにプラスして、男性たちによるコーラス合唱隊を有しているんだ。EPを3枚リリースしていて、この春には新作も予定しているよ。ヨーテボリでも最良のライヴ・バンドの一つだね。大抵はハチャメチャで観客がステージにのぼることもあるんだよ。PROFESSIONAL AGAINSTERSは一年前くらいに結成されたバンドだけど、とても良いね。Spotify(※音楽のストリーミング配信サービス)で2枚のアルバムを発表している。彼らの曲は大体一分くらいなんだ」

■例えば、ストックホルムとヨーテボリのシーンってかなり違うものなのでしょうか?ヨーテボリ・シーンのどんなところに魅力を感じますか?

「僕はヨーテボリのパンクでも、ロックンロールなスタイルが好きなんだ。ヨーテボリはロックンロール寄りだと思うね。ストックホルムにも格好良いバンドはたくさんいるけどさ。EBBA GRÖNやGRISEN SKRIKER、KSMB、INCEST BROTHERS、FUCK FRANKIE、BABOON SHOW、BITCH BOYSとかね」

■ヨーテボリに関する質問ではないのですが、スウェーデンのバンドって活動資金を政府から受給できるって話しを聞いたことがあるのです。本当ですか?

「それは政府による文化基金のことだろうね。文化的な活動をしている全ての人たち、画家や演劇、芸術家、バンド、ミュージシャン向けの基金なんだ。例えば、バンドならばレコードのリリース資金を調達できたりするんだけど、まず最初にいくつかの要件を満たす必要がある。その手の基金からお金を受け取っているパンク・バンドは多くないと思うよ。現在、ミュージシャンやアーティストはそれを生業にして生活することに大問題を抱えている。政府が文化的活動のための基金に関して、大幅な削減を行なったせいでね」

Roineのバンドについて

■あなたがやっていたバンド、THE ROINE'S KVARTETTの結成について聞かせてもらえますか?どんなバンドと共演していましたか?



「結成したのは1983年で、僕たちは初期のヨーテボリ・パンクやCLASH、EBBA GRÖN、BUMSEN MUSS MANN、そしてTOY DOLLSからとてもインスパイアされていた。僕たちはただバンドをやりたかっただけなんだ。以前から何度も、酒を飲んでいるときに話しは出ていたしさ。僕がギターで、Mikael "Rullis" Ahlqvistがベース(2人ともFLUGORNAというバンドをやっていた)、Mikael "Pottan" Drotzがオルガン(ATRAPPというバンドのメンバー)、そしてMikael "Gustaf" Gustafssonがドラム。1984年にバンドは解散したけど、その半年後には再開したね。そのときのドラムがTommy Olssonなんだけど、彼は現在のPSYCHOTIC YOUTHのドラムでもあるんだ。THE ROINE'S KVARTETTではATTENT


THE ROINE'S KVARTETT

AT、BUMSEN MUSS MANN、BRUSET、SLOBOBANS UNDERGÅNG、それに名の知られていない多くのバンドとも共演したよ。その多くがヨーテボリのバンドだったけどね」

■最終的な解散とその理由は何だったのですか?

「1985年の終わりに解散したよ。もうエナジーが残っていなかったし、多少アルコールの問題もあったように思うね(笑)。RullisとPottanはGUNNARS KUKのメンバーとなり、PottanはBUMSEN MUSS MANNに加入した。僕とTommyはJYNXというバンドを、僕の兄弟でもあるThomas Lundström、そして友人のMats Bergstrandと一緒に始めたよ」

■そのバンドやTHE ROINE'S KVARTETT、PSYCHOTIC YOUTH以外だとどんなバンドでプレイしてきましたか?

「僕がやってきたバンドをいくつか挙げてみよう。SVEN LILA(GBGメロディック・パンク・スタイル)、JYNX(GBGパンク・スタイル)、THE BUMBLE BEES(THE VENTURESみたいな60'sインスト)、LOOKING BACK(60'sロック)、TRE ESS(パーティ・バンド)、RED WEST & HOT RHYTHM(ロカビリー)」

写真について

■カメラに興味を持ち始めたのはいつのことですか?

「2002年だったかな。プロ仕様のカメラを初めて購入してね。コンサートを見に行くのも、思い出として残るようにそれを撮影するのも好きだったからさ」

■初めて撮影したバンドは?

「HELLACOPTERSとBACKYARD BABIES、約15年前のことさ」

■技術的なことは独学で学んだのですか?

「ほとんど独学だね。色々試してみては挫折して、そして改善しては再度トライ。でもまた挫折して、といった感じさ…。あとは写真仲間からも多くを学んだよ。お互いに助け合ったな。僕にとっての師匠みたいな友達もいて、Christer "Chris Condor"というんだけど、彼は車の写真を撮る上でのアイデアやテクニックについてすごく力を貸してくれたのさ」

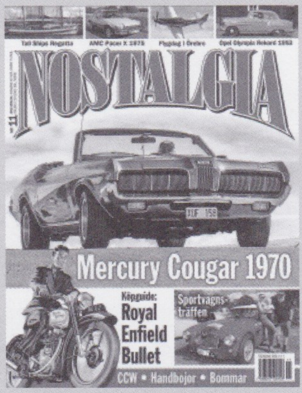
■ショーで撮影するときに、一番大切にしていることは何でしょう?

「写真からストーリーが伝わってくるようにはしているかな。あとは表情が伝わるようにもしている。ステージ・ライトがちゃんとしている会場で撮影するのは楽しいよ」

■本当、色んなバンドの写真を撮っていますよね。BATMOBILEにDISCHARGE、THE DAMNED、THE BRISTLES、MOTÖRHEAD、それに少年ナイフなどなど。基本的にバンドや企画者から依頼があって撮影しているのですか?それとも自主的に?

「コンサートのうちの90パーセントは自主的に撮っているよ。バンドを撮影するのは楽しいからできる限り多くのコンサートに足を運ぶようにしているんだ。リクエストを受けることもあるけど、大抵はバンドからの依頼かな。僕はスウェーデンの雑誌「Nostalgia」でフリーランスのカメラマンとしても働いてて(パート・タイムだけどね)、その雑誌は古い車やボート、飛行機、バイク、そしてそういったもののコレクターたちを掲載しているんだ」

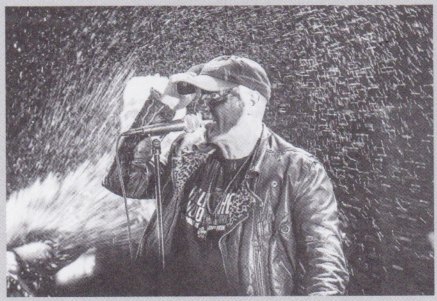

「Nostalgia」に掲載されたRoineの写真



「Nostalgia」2016年11月号の表紙

■あなたが撮影したパンク・バンドの写真の中で、ベストなものは何ですか?

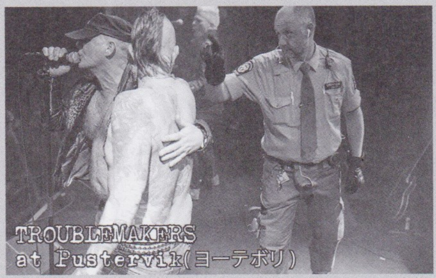
「そいつは難しいな!でも、以下にお気に入りの写真を挙げてみよう」


TROUBLEMAKERS at Pustervik(ヨーテボリ)


TRUBBEL at Röda Sten(ヨーテボリ)


DISCHARGE
at Dogtown Streetpunk Festival
(オスロ/ノルウェー)


MIKE SANCHEZ
at Musikens Hus(ヨーテボリ)


TROUBLEMAKERS
at Pustervik(ヨーテボリ)

■あなたの生業は何なのですか?あと、バンドに限らず色んなものを撮影していますが、一番好きな対象は?

「Saabという会社での仕事が生業だよ。カメラマンはパート・タイムで、PSYCHOTIC YOUTHでベースを弾くのもパート・タイム、色々やっているってわけさ!!!バンドは大好きな撮影対象だけどモーター・スポーツもすごく好きなんだ。ただ、レースを見に行くときはカメラを自宅に置いていくこともあるね。僕の夢は鈴鹿にF1レースを見に行くことなんだよ」

■パンク・シーンに好きなカメラマンはいますか?

「うん、もちろんさ。Martin Johansson(ヨーテボリ郊外出身の、有名な80年代のパンク・バンドRÅTTORNAの元ベーシスト)はスウェーデン中のパンク・バンドの素晴らしい写真を撮影しているね。あとはSebastian Todor(80年代と90年代のヨーテボリ・パンク・シーンを記録した人物だよ)、70年代にRAMONESの重要な写真を撮っていたRoberta Bayley、それに日本のOhnishi Rieko。彼女はPSYCHOTIC YOUTHが日本ツアーをし

たときに最高の写真を撮ってくれたね」

■今後の予定を聞かせてください。

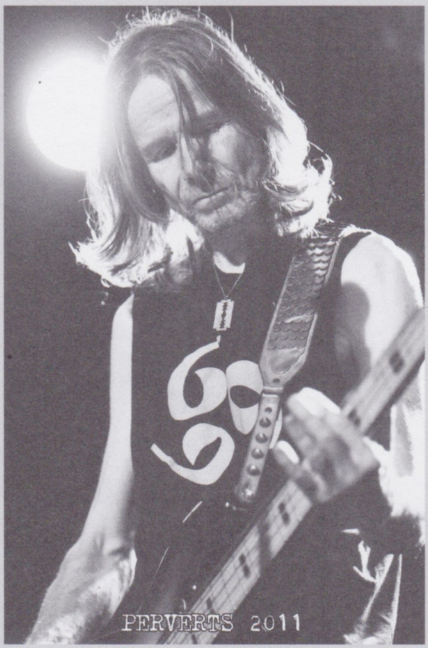
「とにかく楽しむことだね!カメラマンとしての予定は、ビジネスとして成長させて、できれば将来的にはSaabで働かなくて済むようにしたいね。あと、春にはClose Up Båtenに参加するつもりさ。これはスウェーデンとフィンランドの間を行き来する、ボートの上で開催される2日間のパンク・パーティなんだ。ASTA KASKやTRUBBEL、TROUBLEMAKERS、MIMIKRY、それにCHARTA 77といったバンドなどが出演するよ。ミュージシャンとしては、新しいPSYCHOTIC YOUTHのレコード「The Voice Of Summer」がリリースされたばかりだね(2017年1月)。できる限りギグを多くやって、3月にはドイツ・ツアーも行なった。4月にはスペインのギグにも行くよ。レコードを広めるためにスウェーデンの色んな会場でもたくさんのギグをするつもりさ。ノルウェーに行く予定もあって、できればTHE YUM YUMSと共演したいな。そして、年内にまた日本ツアーをできればと願っている。心底願っているよ!昨年の日本ツアーはすごく楽しかった。WaterslideのKazu、Target EarthのMasao、そしてPelotan、どうもありがとう」

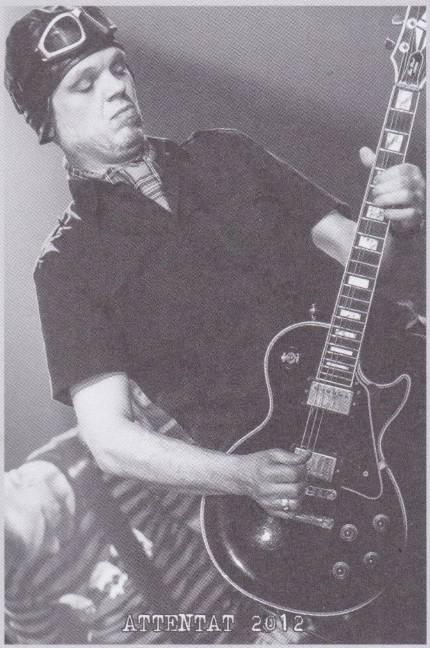
■インタヴューさせてくれてありがとうございました。日本の読者にメッセージをお願いします。

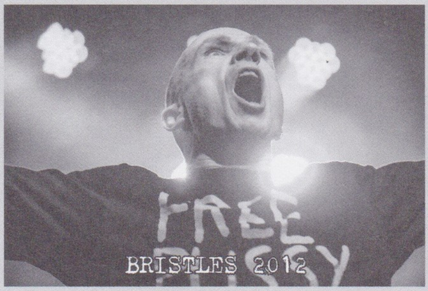
「2016年の日本ツアーはファンタスティックだった。格好良い日本のバンドをたくさん見て、ナイスな人たちとたくさん出会えた。今年、みんなと日本の会場のどこかで会えたらいいな!Cheers!」

Roine's Photo Works


ASTA KASK 2013

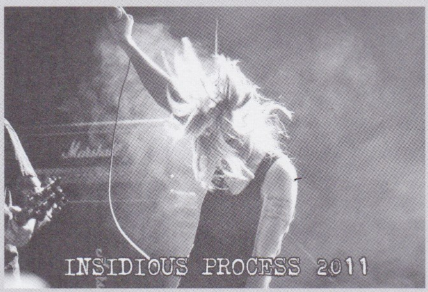

PERVERTS 2011


ATTENTAT 2012


BRISTLES 2012


P-NISSARNA 2010


RASTA KNAST 2011

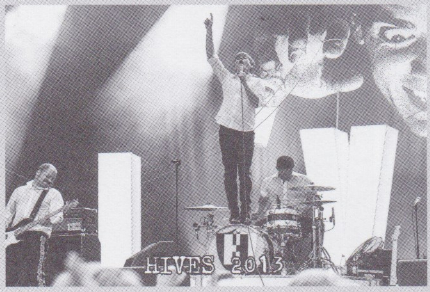

INSIDIOUS PROCESS 2011

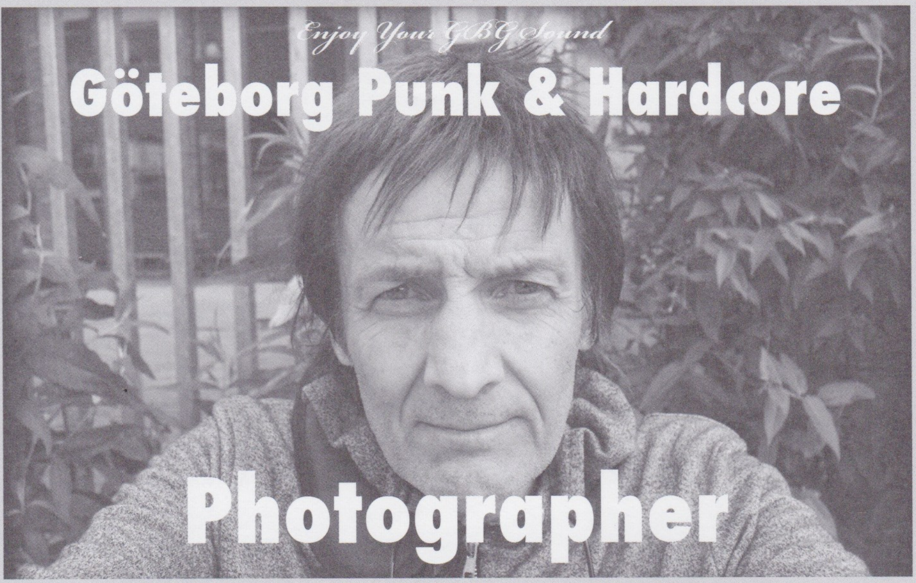

STIFF LITTLE FINGERS 2013


999 2014


DAVE VANIAN / DAMNED 2014


MARKY RAMONE 2016


HIVES 2013



Sebastian Todor

ダイ・ハードなEL ZINE読者さまなら、このSebastian Todorという名を、何年か前の弊誌でも見かけた覚えがあるのではないでしょうか?そう、それは2013年発行のvol.14、Distortion Recordsオーナー:Matsへのインタヴューでのこと。そのインタヴューでMatsは、スウェディッシュ・ハードコアの写真集にとりかかっていると語っていました。

——「Sebastian Todorという一人の写真家と84年に出会ったことが始まりさ。彼はいつも写真を撮りまくっていてね、10000枚以上かな、俺も色んなアーティストの作品で彼の写真を使わせてもらっていたんだ。俺たちは一緒に旅行に行ったりしたし、彼はANTI CIMEXとDISARMのフィンランド・ツアーにも同行したりしていたね…。だからこの本は彼と彼の写真に対する俺からの賛辞なんだ。基本的に83年から93年までに関するドキュメントと、素晴らしい写真からなる300ページを超える本になるだろう」——

…このインタヴュー後に、再びDistortion Recordsは活動を停止してしまいましたが(泣)、80年代からヨーテボリのバンドを撮り続けているTodor(とってもインテリジェンス)に、当時のシーン事情から、例の写真集は一体どうなったのかも含め、色々と尋ねてみました。

■まずは日本の読者に自己紹介をお願いします。

「私がカメラを扱うようになったのは、1980年代初頭のことさ。過激な政治運動であったり、労働階級の人たちであったり、はたまた学校での撮影やスポーツ、そしてそれらとはまた異なるタイプのドキュメントであったりと、様々なものをテーマにしていたね。私はアート・スクールに通っていたのだけれど、すぐに私の情熱は写真撮影へと向けられることになった。モノクロ写真の時代で、私たちは暗室を使用して作業することが許されていた。これは非常に有益な経験となったよ。1990年代はずっと他の職業についていたが、写真撮影は2007年頃に再開した。暗室でのありとあらゆる作業から私を解放してくれたデジタル化の可能性にはとても感謝している。以降、私はテクノやヘレクトロ(アグロテック)、ゴス、パンクといった様々なハードコアなカルチャーに傾倒しているんだ。昨年にはビデオの制作も始めてね。昔からの夢が実現したよ」

■いつ、どのようにして、パンクに興味を持つようになったのですか?キッカケとなったバンドは?

「10代前半の頃から、音楽は私の人生にとって重要なものだった。私は常に他とは異なった、よりハードな音楽スタイルを好んでいたよ。なぜなら、もどかしくて空虚なイージー・リスニングよりも、そういった音楽スタイルを聴いた方が自分の気分も良くなるからね。そして1976年にパンクが始まったわけだが、私の暗い心がパンクに惹きつけられたのはごく自然な、自明なことだった。実を言えば、当初は主にメロディックなバンド、SHAM 69やCLASH、STRANGLERS、EDDIE & THE HOT RODS、そしてUNDERTONESといったバンドを聴いていたんだ。スウェーデンのバンドで言えばSTOCKHOLMS NEGRERにSOTLIMPA、GBG PUNXやPUKEだね。だけど80年代になると徐々に変化していった。写真を撮ることによって、私は新しいハードコアのスタイルを発見したんだよ。Crass RecordsのバンドにANTI CIMEX、DISARM、DRILLER KILLER、WOLFPACK、VERBAL ABUSE、OFFENDERS、それにもっと色々とね。写真撮影を再開した10年前からは、多くのクラスト・パンク・バンドと出会って、私はそれまで以上にハードコアを楽しんでいるよ。真面目に言うと、現在は音楽にとって有史以来、最高の時代なのではないだろうか。妥協することなく、純粋に音楽性を追い求められるからね。素晴らしい芸術とはつまり、完全に独立していること、それが私の持論さ」

■では、どうしてカメラに惹かれたのでしょう?初めて撮影したバンドは?

「アートの勉強と音楽を聴くことへの情熱が自然な流れで組み合わさって、写真撮影へと発展していったんだ。バンドを撮影することは、1970年代にも散発的にはあった。スウェーデンのATTENTATやCOSMIC OVERDOSEであったりね。しかし、パンク的な写真を撮るようになったのはTATUERADE SNUTKUKAR(TATTOOED COP COCKS)やDISARM、DNA、ASTA KASKといったバンドからだった。そうしてすぐに、ANTI CIMEXも撮るようになったのさ」

■80年代にはどんなショーに、よく足を運びましたか?

「ヨーテボリにある、ほとんどのパンク・クラブに行ったよ。バンドをやっている若いパンク友達が、自分たちのショーを見に来て欲しいと言ってくれたからね。ゴスやブラック・メタルといった例外を除けば、ここのトラディショナルなロック・バンドはあまりにも凡庸だった。あくまでも私の意見だけどね」

■SHITLICKERSのショーに行ったことはありますか?

「残念ながらSHITLICKERSは私がショーを見逃した、数少ないバンドのうちの一つでね。私がパンクの記録を始める、その一年前に解散してしまっていたんだ」

■写真の技術はどこで学んだのですか?

「アート・スクールでは、夕方の時間帯に写真の授業があったからそれを受講していたんだ。幸運にも、若い大学生のカメラマンが先生としてやって来てくれていたね。構図や照明などの知識に関しては、通っていたアート・スクールで教わったよ。それと、あらゆる芸術において最も大切なこととは、自分だけのスタイルを見つけ出し、そして創造するということさ。私はそれをパンクの写真を撮影することによって見出したんだ。パンクはオーディエンスとバンドが一緒になってプレイする。そんなところに私は深い感銘を受けたんだ。その影響もあって、私は(オーディエンスとバンドを同時に撮影しやすい)広角レンズだけを使うようになっ



←TATUERADE SNUTKUKAR 1984

↓AVSKUM 2014





Punk Illegal at Sweden 2015



AVSKUM 2015

たのさ。私としては至近距離からシンガーだけを撮るのではなく、どの写真においても、全体を捉えているような構図になるよう意識しているよ」

■ショーの写真を撮る上で、一番大切にしていることは何ですか?

「一枚の写真を通して、ノイズとエナジー、そして雰囲気を生々しく視覚的に伝えることだね。もちろん至難の業だが、強烈なインスピレーションを得ることもできる。そして時に、バンドよりもパンクのリスナーたちを撮影することの方が、私にとっては重要だったりするね」

■これまでに撮影したパンク・バンドの写真の中で、最高のショットは何になりますか?

「実際、私は良き観測者ではないんだ。でも、往々にして私が気に入っている写真とは、バンドとオーディエンスが一体となっている写真の中から見つかるだろう。まるで一つの生命体のように両者が接近している写真さ。いくつかの写真を例として送るよ」

■基本的に80年代のヨーテボリのハードコア・シーンはどんな雰囲気でしたか?暴力的?それとも友好的?アルコールやドラッグ絡みの問題はありましたか?

「80年代当時は、若い世代、その多くが15歳前後のティーンエイジャーが、新しくてよりハードなパンクのビートをここにもたらした。だから誰もが興奮と刺激で燃え上がっていたのさ。私はそのポジティヴな雰囲気にとてもインスパイアされ、エナジーを得ていたんだ。そしてギグの後には毎回、暗室での長い作業が待ち構えていたってわけさ。ちょくちょくスキンズとのケンカは巻き起こっていたが、時々パンクスはヤラレていたよ。悲しいことにアルコールと、そしてアンフェタミンのようなドラッグがパンクのフェスではお馴染みの存在になるようになってしまった。その結果、何人もの若者が、残りの人生をアルコールとドラッグに依存してしまうことになったんだ」

■今までにバンドをやったことはありますか?

「いや、いかなる楽器も演奏したことがないね。その代わりに、私にはありとあらゆる種類の音楽を受け入れ、そして分析する、"音楽的に開かれた耳"という風変わりな才能があるんだ。例えば、ハードコアの曲を聴くと、私は数秒後には曲の"中に"入っているのさ。音楽とは、私の耳にとって"難解"なものではないんだよ。信じてくれ。私には20年にも及ぶ長いDJのキャリアがあり、多くの人々と出会ったが、この耳を持っている人間は少数派だね。ほとんどの人々は、以前から知っている聴きなれた音楽を求めている。怖いからこそ、新しい音楽に対して怒るんだよ、ハハハ」

■80年代からずっとヨーテボリのハードコア・シーンを見続けてきたのですか?どの時代が一番好きですか?

「1993年から2006年の間を除けば、私は継続してずっとハードコア・シーンをフォローしてきた。いつの時代が最も好きか答えるのは容易だよ。間違いなくこの10年間さ。メタルや激しいグロウル、そしてゴシック・ダークネスからインスパイアされたクラストというやつが、私に幸福をもたらしてくれているんだ。現在、私はパンクの中でもタフなスタイルであるハードコアやヘレクトロ、ゴス、サイケデリック・テクノだけを聴いている。他の音楽は、それら以上には私を楽しませてくれないんだよ」

■80年代のハードコア・シーンと現在のシーンとでは、どんな違いを感じますか?

「インターネットのある生活のおかげで、世界各地とのコンタクトが確立されている。世界中のバンドが数多くスウェーデンを訪れ、そしてスウェーデンのバンドも世界を旅してまわっている。80年代初頭よりもはるかに多くの、そして恒久的なクラブやフェスが存在している。当時は恒久的なパンク・シーンなんてどこにもなかった。パンクスは自分たちでギグを企画しなければならなかったし、ときにそれは違法行為だったんだよ」

■2013年にDistortion RecordsのMatsにインタヴューしたときに、彼はスウェーデンのハードコア写真集に取り組んでいると言っていたんです(※ここで冒頭のリード文にもある、Matsのvol.14での発言をTodorに見せる)。あなたは「Gothenburg Hardcore & Punk 1983-93」という本を出版しましたが、この本は誰が版元なんですか?

Matsが出したんですか?それとも他の出版社、または自分で出したのでしょうか?

「Bodenmalm(※Matsのこと)の口から、そんな慈愛に満ちた言葉が出ていたなんてね。彼が私の作品をそんな風に評価してくれていたなんて知らなかったよ。私たちが出会ったときのことなんて、話したこともなかったからね。だけど、そうだね、Bodenmalmは私にインスピレーションを与えてくれたし、この写真集のプロジェクトを後押ししてくれた。2011年だったかな、私は彼のおかげでようやく重い腰を上げると作業に取り組み始めたんだ。しかし残念ながら、彼との約束はその5年後に反故となってしまった。彼は、自身の中古レコード・ショップの仕事があまりにも忙しくなってしまったんだよ。彼は世界各地との繋がりを持っていたから、本を流通する際にはとても役立っただろうけどね。私もまた、ビジネスマンとしてはあまりにも怠惰だったのさ。結局のところ様々な条件が重なり、私は本の編集における、その全過程を学ぶことになったんだ。その本の全てのレイアウト、テキスト、そして印刷所への連絡も、私は自分で行なったんだよ。私の唯一の販路は、これまで私のFacebookアカウントを通してだけだった。しかし、PayPalを介せば購入するのは容易さ。もっと情報が必要だったら、todor@live.seまでメールをしてもらいたい」

■では、その写真集の内容についてもう少し聞かせてください。

「モノクロで写真を掲載していて、販売価格を下げるために文庫本みたいなクオリティでね。すぐにでも、高品質な光沢紙に印刷した新しいエディションを出版したいとは思っているんだ。この本には私の故郷であるヨーテボリを中心に、1980年代におけるハードコア・パンク・カルチャーの誕生と発展を収めている。ヨーテボリだけではなく、デンマークやフィンランドの都市もね。バンドにギグ、スクワット、それに旅とパーティの写真だよ」

■80年代当時の、Matsとのエピソードは何かありませんか?彼とは最近も会ったりしているのですか?

「彼と出会ったのは、たしか彼が14歳か15歳の頃だったはず。スウェーデンで最初にして、そして最も熱心なハードコアのファンだったよ。時々、彼は地元のネッシェーから300キロも離れたここヨーテボリを訪ねてきていた。本当に好奇心旺盛で、熱心な若者だったな。アイデアに充ち溢れていて時折、私にカメラを持ってきてくれと頼んできてね、そして近かろうが遠かろうがお構いなしに、一緒にギグへと足を運んだものさ。TATUERADE SNUTKUKARやANTI CIMEX、他の何よりもD-Beatバンドがドンドン増えていくことが私の喜びとなった。そしてそんなバンドと出会うようになって、私は文化的に毒されていったのだよ」

■ところで、パンク・シーンに好きな写真家はいますか?

「いや、パンク・シーンの写真家については全然詳しくないんだ。印象的なスタイルの写真を目にしたことはあるが、特定の人の名前というのは覚えていないな。もちろん、優秀な写真家は世界中に数多く存在しているが、私は写真集よりも哲学に関する書籍をよく読んでいるからね」

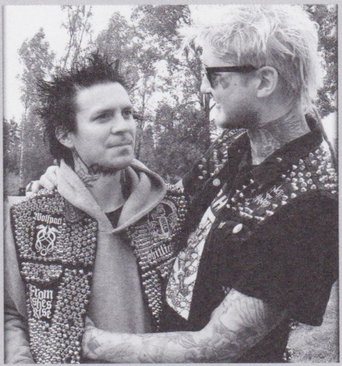
■今後の予定は何かありますか?

「私は精神と思考に関する哲学的な書籍を執筆したいんだ。それらがどのように機能し、どのように発達するかについてのね。私たちは一体何を知っているのか、そして存在に関する私たちの知識を増やすことはどの程度、可能なのだろうか。あとは、2冊目となる私の新しいハードコアの写真集も出せたらと願っているよ」

■インタヴューさせてくれてありがとうございました。日本の読者にメッセージをお願いします。

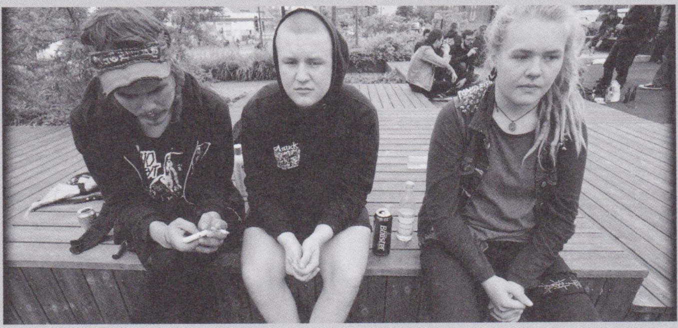
「日本のパンクスで、ハードコアの歴史に興味を抱いている人たちが、私の本を目にしてくれたら嬉しいね。いつの日か、日本を訪れ君たちのパンクのステージを見てみたいよ」



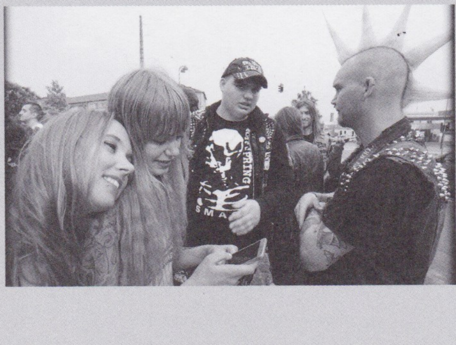


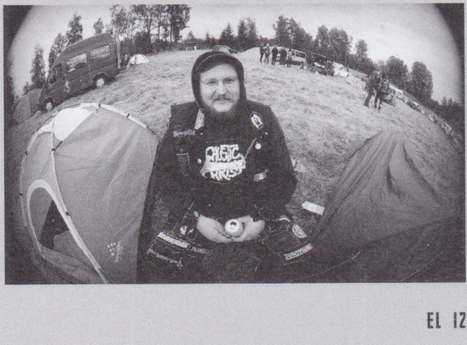
Photos of K-Town & Hygget Fes at Sweden

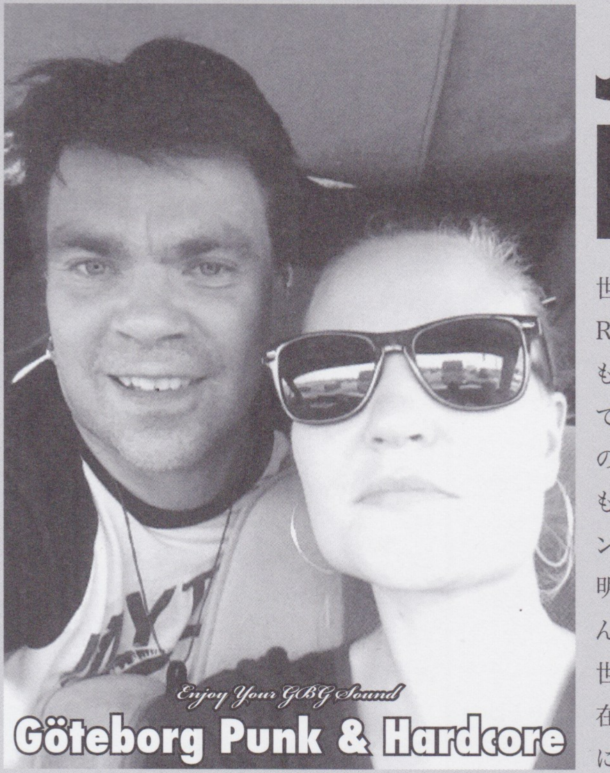












Johan from PROTESTERA

世界は狭い――。

Roineから、「Johanは現在のヨーテボリ・シーンに精通していて、レポート記事も書いているんだ(※次頁に掲載)。彼にもインタヴューしてみたら?バンドもやっているハズだけど、なんてバンドだったかな?」とのメールを頂きまして、「80年代の話しばかりというのもアレだし、今のことも知りたいから、そのJohanって人にもインタヴューしてみよう!」となったのですが、えーと、このJohanはアナーコ・パンク・バンド:PROTESTERAのメンバーだということがインタヴューの途中で判明しまして、僕、10年以上前にDOLLで彼にインタヴューしていたという、……なんたる奇遇。

世界って本当に狭いよなぁと、改めて実感したのでありました。そんなわけで、現在はFlyktsodaというファンジンの発行もしているJohanへのインタヴューと、彼による"現在"のヨーテボリ・シーン・レポートを続けてお楽しみください!

パンクとは、君や君の友人たちと共になすべき叛逆なのさ!

■まずは、どのようにしてパンクに興味を持つようになったの?キッカケとなったバンドは?

「僕が9歳のときに年上のいとこが、EBBA GRÖNの最初の2枚のアルバムを収録したカセット・テープをくれたんだ。僕は完全にのめり込んだね、"どうすればこんなに格好良くなれるんだろう!?"ってさ。聴くのを止めることができなかったよ。今でも僕は、このバンドこそがスウェーデンで一番格好良いと思っているしね。10代の前半にはもっとDIYなパンクを発見した。ASTA KASKにKRUNCH、ANTI CIMEX、初期のDRIにMINOR THREATとかね。そしてこういったバンドのおかげで、友人たちと一緒に自分でも何かできるんじゃないかと考えるようになったんだ」

■君のやってきたバンドについても聞かせて。初めて結成したバンドや、今、関わっているバンドなんかも。

「初めてのバンドはASTA KASKからものすごく影響を受けていたよ。NILZ DACKEというバンドだったけど、何も音源は残していないんだ。でもこのバンドを通じて、僕はアンダーグラウンドなコミュニティと関わり始めるようになったのさ。僕の地元、ヴェステロースでショーを企画したりね。僕たちはとても若かったし、当時はみんなバンドを始めたり止めたりを繰り返していた。僕もヴェステロースに住んでいた10代から20代前半にかけては、たしか3～5バンドくらいに関わっていたよ。それにファンジンのコレクティヴにも参加していたね。僕は23歳のときにヨーテボリへ引っ越して、その数年後の1999年にPROTESTERAを結成した。そう、今でも活動しているバンドだよ。これはアナーコ・パンク・バンドであると同時に、政治的な活動とも密接に関係しているバンドだと僕たちはみなしている。ラインナップは何度か変わっているけど、この10年間は4人のメンバーで固定されているね。3枚のアルバムをリリースしていて(4thアルバムも年内にリリースするよ)、あとはEPを2枚、スプリット10インチを1枚、スプリットEPを2枚、いくつかのベネフィット・レコードにも参加している。覚えきれないくらいヨーロッパをツアーしていて、今でもツアーは大好きなんだ。だからまだまだツアーは続けるよ、約束する」

■「01.05.1886」アルバムやGOTCHAとのスプリット以降、あまりPROTESTERAの情報が入ってこなかったんだけど、活動を休止していたわけじゃないよね?最近、MASSMILICJAとのスプリットをリリースしていたから、"まだやっているんだ!"と嬉しく思ったんだけど。



「うん、「01.05.1886」アルバムをリリースした後も、毎年のようにツアーに出ていたよ。そ











れまでに訪れたことのない国々、例えばポーランドやクロアチアなんかにも行ったね。新曲にも常に取り組んでいたけど、かなりペース・ダウンはしていた。メンバーのうち何人かに子供ができたり、バンドのかたわら他のことに注力していたりでね。でもMASSMILICJAみたいな格好良いバンドとスプリットを出せてすごく嬉しいよ。それに6年ぶりとなる、新しいレコードを出せたこともね」

■さっき話しに出た4thアルバムだけど、もうレコーディングは済んでいるのかな?アルバムにテーマはある?

「全曲、レコーディング済みだよ。今はブックレットのレイアウトを終えたところさ。楽曲やサウンドにはものすごく満足している。アルバムにテーマはないけど、歌詞はより短く、より"詩的"に、そしてよりポジティヴであろうとしているよ。社会の急激な変化に抗うための、強さと力をみんなや僕たち自身に分け与えたいんだ」

■PROTESTERAは強固な政治的メッセージを持っているよね。スウェーデンの国内政治やイスラム、移民問題、ドナルド・トランプについてはどう思っている?

「ハハハ、一つの質問にたくさん詰め込み過ぎだよ!スウェーデンの政治は、世界の他の国々を追随している。どんどん右翼化が進んでいるし、議会にはファシストが潜んでいる…。これは偶然ではないし、世界中で同時に起こっていることだよ(トランプ、エルドアン、イスラム国などは全てファシストさ)。資本家は利益の増加のみを欲し、社会的な抵抗運動なんてなければ良いと考えている。だからこそ右翼政治家たちの影響力がどんどん増してきているんだ。そして左翼に対する抑圧はより残虐性を増していっている。スウェーデン社会民主労働党は昨年、スウェーデンに難民がやって来るのを防ぐために国境を閉鎖したんだ…。このことを僕は決して許すことができない。奴らのやっていることはレイシスト、ファシスト的な汚いやり口さ。メーデーに出る権利なんてもう奴らにはないよ!でも、自分たちのことを犠牲者だなんて思っちゃだめだよ、僕たちはこの反社会的な社会に抵抗し、勝利しなければならないからさ!時間がかかろうとも、団結して勝利するんだ!」

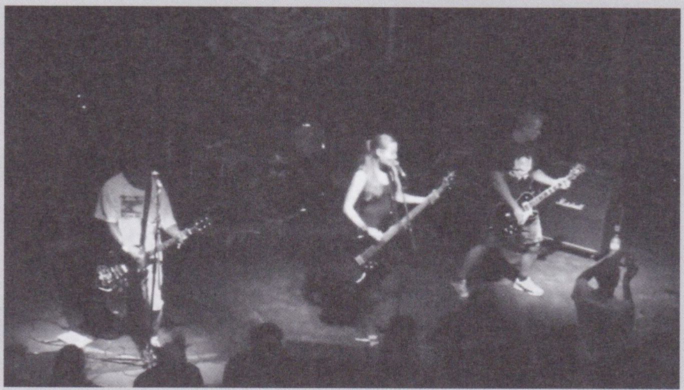
■君が発行しているFlyktsodaファンジンについても聞かせて。どんな記事を主に取り扱っているの?

「最初の号を出したのは2014年のことだったけど、90年代にファンジン・コレクティヴを止めてからも、再びファンジンを作ろうというアイデア自体はずっとあったんだ。ジンを作るというクリエイティヴなプロセスがすごく恋しくてね。それで実際、2005年からインタヴューをとり始めたんだけど、個人的な状況に変化があったりして、どうしてもファンジンのために時間を割くことができなくなったんだ。でも、それから再び状況が変わって、箱にしまっていた何ページかを見つけてね、それで再開することにした。2014年以降、僕はファンジンを13号まで出していて、スプリット7インチも一枚リリースしたよ。扱っている記事は政治的なことや、僕が好きなバンドのことはもちろん、もっと注目されるべきだと僕が感じたバンドについてかな。僕はシーンをサポートするためにこのファンジンを出しているんだけど、みんながバンドを始めたり、ショーを企画したり、ファンジンを作ったりする、その刺激になれたらいいなと思っているんだ。あとは、紙のファンジンが恋しくてFlyktsodaを始めたっていうのもある。インターネット上のレヴューやインタヴューでは、紙のファンジンを読むのと同じ気分にはなれないからさ」

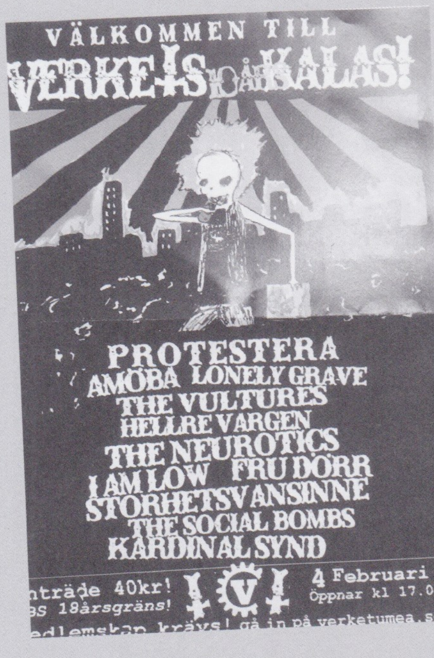
■70年代や80年代のヨーテボリのバンドがいくつか再結成しているけど、オススメのバンドはいる?







「僕はヨーテボリ生まれじゃないから、そういったバンドにノスタルジーを感じることもないんだ。どんなバンドが再結成しているかさえ把握していないからね…。GLOやRUKORNA、それに初期のTROUBLEMAKERSとATTENTATは好きだよ。彼らが再び演奏をしたいのならば、それは彼ら次第さ。他に言うべき言葉も見つからないな。もっと新しいバンド、興味深いバンドがどんどん出てきているからね」



■ヨーテボリのシーンがどうなのか分からないけど、世代によってパンク・シーンが分断されていることってない？ベテランのバンドは若いバンドと共演せず、若いバンドはベテランのバンドに興味を持たない。ヨーテボリはどうなのかな？

「今、僕は初めてドイツのパンク・シーンのことを大好きになっているんだ。ドイツではすごく若い人たちも、歳をとった人たちも同じショーにやって来て混ざり合っている。これは重要なことだと思うよ。僕たちは全員、お互いから学ぶべきことが数多くあるし、学ぶことによって同じ過ちを繰り返さずに済むからね」

■では、最近のヨーテボリのバンドでオススメを教えて。

「OK…、こいつは答えがいのある質問だね！なにせ、今は本当に格好良いバンドがたくさんいるからさ…。僕のお気に入りのバンドはDEGENERATIONENだね(Bandcamp上でのみ曲を発表しているんだ)。彼らにはオリジナリティがあるし、正しいハートも持っているよ。VICIOUS IRENEは何年も前から活動しているけど今でも強力だね。昨年、最高のスプリット・アルバムをリリースしたんだ。あとはMYTERI(メロディック・ネオ・クラスト)、ANATOMI-71、SVÄRTA、CONTORTURE、STRUL(このバンドはクレイジーでファスト、そしてエナジーに充ちたナイスなアルバムをリリースしたばかりだね)、PROVOCERA、SHAKING HEADS、それにもっともっといるよ…」

■ヨーテボリの現在のレーベルやファンジン、レコード・ショップ、政治的なコレクティヴについても知りたいな。

「ファンジンはいくつかあるんだけど、Levande Begravdというファンジンはレーベルもやっていて、ショーの企画もしているんだ。魅力的で正真正銘DIYな人が運営しているよ。新しいレーベルとしてはDark Elk Recordsがあって、初リリースとしてSOCIETY'S DECLINEの7インチをリリースしたばかりさ。もちろんKen Rockは健在だし、今でも素晴らしいリリースをしているね。レコード・ショップはMusic Lovers、Dirty Records、それとAndra Långgatans Skivhandelがある。政治的なコレクティヴとしては書店/カフェのSyndikalistiskt Forumにコンサートを企画するグループの128(A)クルーもいるね。数年前から自発的な運動は続いているんだけど、それに反発するように、ファシストたちがその醜い姿をのぞかせるようになってきた。けど、時間が経つにつれこの抵抗運動がより強固となり、みんなが自立性を確立してくれればと願っているよ」

■ヨーテボリ・パンクの一番の魅力はどんなところ？

「ヨーテボリは"PC(ポリティカル・コレクトネス)・シーン"になったと言えるだろうし、それは素晴らしいことだよ！みんなよりオープンになったし、ゲイだろうとストレートだろうと、女の子でも男の子でも、性的マイノリティでも、若くても歳をとっていようとも構わずに歓迎しているよ。口汚い振る舞いに対しては寛容じゃなくなっているけどね」

■ところで、ウメオのパンク・シーンって何年か前は盛り上がっていたけど、ウメオについてはどう思っている？

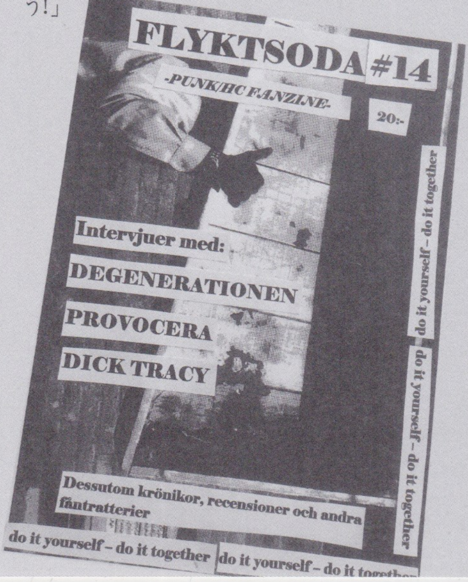
「ウメオは大好きだよ！僕たちは最近、PROTESTERAで演奏してね、素晴らしい時間を過ごせたんだ！シーンのみんなもすごく歓迎してくれたし、あそこには格好良いバンドがずっといるよね。ウメオのTROTSが今度出すアルバムをこっそり聴かせてもらったんだけど、あの作品は2017年のベスト・アルバムの一枚になるだろうな！」

■今後の予定を聞かせて。

「ファンジンを続けて、少なくとも毎年2〜3号は出していきたいね(昨年、僕は6号出したからさ…)。僕はシーン・レポートやコラムをもっと載せたいから、何かシェアしたい記事があれば連絡してもらいたいな！今は、今度リリースされるPROTESTERAのアルバムの表紙やブックレットに取り掛かっている。できれば今年中に新曲も新たにいくつか完成させて、それを年内か来年にはレコードにしたいね。秋にはMYTERIとの短いヨーロッパ・ツアーも計画しているんだ」

■最後に、日本の読者にメッセージをお願い。

「興味を持ってくれてありがとう！パンクとは、君や君の友人たちと共になすべき叛逆なのさ！パンクと共に、より良い世界を目指していこう！」



Enjoy Your GBG Sound **Göteborg Punk & Hardcore** TEXT:Johan ENGLISH TRANSLATION:Roine

Today's Punk Scene in Göteborg



VICIOUS IRENE

やぁ、みんな。ここヨーテボリからレポートを届けるよ。

20世紀から21世紀へと変わったばかりの頃、ヨーテボリは一種の空白期間にあった。散発的なギグが企画されるだけで、ギグを常に開催できるような決まった会場もなかったんだ。そのためバンドを見たり聴いたりするのも、そしてバンドが存在するだけでもあの頃は大変だったんだよ。組織化されたグループなら借りられて、使用できる会場ならいくつかあったけど、活動的な人たちは全然いなかった。そういった人たちは、たまにギグをやるだけだったんだ。そんな状況を僕は経験していた。でも、幸運なことに、今のヨーテボリには多種多様なパンク・シーンがあって盛り上がっている。ほとんどのものが揃っているよ。

ちょうどこの記事を書いている現在、スカンジナビアのパンク・シーンは大打撃の危機に曝されているところなんだ。ヨーテボリで最も重要な会場の一つである128(A)が、周辺地域の高級住宅化により、敷地内からの立ち退きを迫られているんだ。128(A)は長年に渡りスカンジナビアにおいて、最も重要で且つDIYな会場だった。ここでは主にパンクとハードコアのギグが企画され、演奏する場所以上の役割りを果たしていたんだ。

その一方でヨーテボリにはこの10年間、知識豊富なオーガナイザーたちによって盛り上げられていたパンク・シーンがあったんだ。オーガナイザーたちはお互いにリスペクトし合っていたし、お互いの企画も尊重していた。だから同じ日にギグが重ならないように避けていたね。

128(A)以外だと、ハードコアの仲間たちが設立したFillerというチーム(※原文だとclubと表記されていましたが、clubだと会場としてのクラブと混同してしまうので、ここでは便宜上チームと訳しています)があって、都市の色んな場所でギグを企画しているね。僕が彼らの企画に出たときも、すごく感じが良かったな。Truckstop Alaskaというチームはもうちょっと幅広いコンセプトで活動している。パンクからスラッジ、純然たるハード・ロックからデス・メタルまでって感じさ。

Klubb Punkteradというチームも色んなレストランや会場を使ってパンクのギグを企画しているね。彼らも他のオーガナイザー同様、その音楽範囲は幅広いんだけど、彼らはみんなそのルーツにパンクがあるんだ。あとはTTHCというグループがいて、それはフェミニストやクィア、トランス・コア・パンク・バンドを中心としたギグをすごく献身的に企画しているよ。

若い世代や酒を飲まないオーディエンスのために、ヒジンゲン島(ヨーテボリにある島)にはSkriketというガレージがあるんだ。とても過小評価されているけどナイスな場所でね、オール・エイジのギグを企画しているし、酔っ払いを避けたいような人たちにとっても安全で、誰もが来られるところだよ。

それとKoloniというチームは、みんなが想像できないくらいオブスキュアなバンドのギグを企画しているんだ!Koloniの人たちは情熱を注いで企画しているし、すごく一生懸命だね。出演するバンドのことは知らなくても彼らを訪ねる価値はあるよ!彼らは何でも知っているからね。都市から離れたところにある色んな施設を、彼らの企画では使っているんだけど、インターネットを使えば簡単に見つけられるはずさ。

Levande Begravdはチーム兼オーガナイザーで、このレポートには欠かせない存在。でも僕が知る限り、この名前を使っているのはたった一人の人で、その人がギグを企



INSIDIOUS PROCESS

画しているみたいなんだ。

献身的な活動をせずに、その代わりに利益ばかり追求するような商業的な会場については言及しないけど、そういった会場ってどれも不当なまでに持ち上げられているんだよな。でも、僕はヨーテボリのライヴ・シーンはもっと盛り上がっていくと思う。みんなが夢中になれるシーンなのさ。

バンドに関しても、これまで以上に良いバンドがたくさんいると思う。経験豊富なバンドも多くいて、ファストでロウ、そしてハーモニーなヴォーカルと言えば、まずはVICIOUS IRENEを挙げたいね。そしてD-BeatのCONTORTUREやINSIDIOUS PROCESS、


CONTORTURE

SWORDWIELDERというバンドもいる。

他にはハードコア・アンサンブルのREGIMEN、パーティ・マスターのSTRUL、そしてANATOMI-71もいるけど、彼らは滅多にギ


REGIMEN


ANATOMI-71

グをやらないんだ。僕がやっているアナーコ・パンク・バンド、PROTESTERAは結成から20周年を迎えたよ。激しい感情に駆られたければ、SVÄRTAのライヴを見るべきさ。それにネオ・クラストのMYTERIもね。これらのバンドのライヴに行けば、素晴らしい体験が


MYTERI

できることを保証するよ。

あと、ハイパー・ファスト・スクリーミング・オーケストラのGAMLA PENGARというバ


GAMLA PENGAR

ンドがいるんだけど、僕たちと彼らはリハーサル・スペースをシェアしているんだ。もっとポスト・パンク寄りならSVART MAGIというバンドがいて、ダークな音源をいくつかリリースしているよ。黒いアイシャドーに彩られ、蠟燭が立てられたライヴも楽しんでもらいたいね。同じようなジャンルなら、華々しいSISTA DANSENにも言及したいな。彼らは高い志を持った、比較的若いバンドさ。

僕や多くの人たちが心配しているのは、ヨーテボリのパンク/ハードコア・シーンにおける新しいバンドの成長についてだね。僕と同世代くらいのバンドがどうしても多いんだけど、その状況もついに変わりつつあるんだ!

昨年の冬に、僕はANATOMI-71のコンサートを見るため128(A)へ足を運んだ。彼らの出番はトリの予定だったんだけど、その日は雪が降ってて気温が低かったにも関わらず、会場は大入りだったね。そのときさ、僕は一瞬でとあるバンドに夢中になった。そのバンドこそが、DEGENERATIONEN!若いバンドだけど、我が道を進み言いたいことを言う、そしてそうすることを恐れないバンドさ!怒り狂ったような演奏、RAPED TEENAGERSを初めて聴いたとき以来の衝撃で、これまで聴いたことのない曲の構成とアイデアだったんだ(何ものにも似ていない独自性に溢れていたんだよ)。

その後、僕は何度か彼らを見ているけど、ドンドン良くなっているね。怒り狂っているだけじゃなくて、まるでニシンみたいにタイトなのさ(この記事はヨーテボリで書かれているからね、魚のジョークも入れておかないと)。もちろん、他にも新しいバンドは登場しているよ。DÅLIGT RYKTE、SHAKING HEADS、PROVOCERA、そして民謡パンクのODENGATAN 1Bだね。

ストレート・エッジ・シーンにも本当に格好良いバンドがいくつかいるんだけど、今でも活動しているのか確証がないんだ。SPIKNYKTERという強烈なバンドがいるんだけど、彼らが関連した新バンドにWASTEというのがいる。獰猛な演奏でもうすぐデビュー7インチをリリースするよ。ネットにはデモがアップされているから、検索する価値はあるぜ。

確かに新しいバンドはたくさんいるんだけど、全てをチェックする時間は流石になくて、ここでは書き切れていないんだ。

でも、繰り返して言いたいことは、できる限り多くのバンドがステージに立って演奏をするべきだってことさ。そうすることによって、人がバンドを始めたり、ギグを企画したり、ファンジンを作るキッカケになるかもしれないからね。僕たちが友達と一緒になってできることに、限界はないんだよ!

SOLANAS CUNTSやGROTESKHAといったバンドは悲しいことに解散してしまったけど、幸いにも解散してしまうバンドよりも新たに出てくるバンドの方が多いんだ。

輝かしい未来は僕らのものさ!


DEGENERATIONEN

Enjoy Your GBG Sound **Göteborg Punk & Hardcore**

Top 10 GBG Punk Discs

ヨーテボリ特集のシメとして、登場してもらったCharlie、Roine、Todor、Johanの4人それぞれに、ヨーテボリ・パンク/ハードコアのレコード、そのトップ10を挙げてもらいました(バンドの曲名やバンド名を挙げている人もいるのですが…汗)。
当地のレコードを楽しむ際の参考にして頂ければ幸いです。Enjoy Your GBG Sound!!

Charlie from ANTI CIMEX



「難しいが挙げてみたぜ」

Skitslickers/GBG 1982
Göteborg Sound/Snesågad Skethusgavel
Disarm/Regerings Stödda Mord
Perverts/Ronka
Union Carbide Productions/In The Air Tonight
Absurd/Blodig Stad
Cortex/Spinal Injuries
Attentat/Operahuset
Troublemakers/Staden Göteborg
Liket Lever/Levande Begravd

Roine from PSYCHOTIC YOUTH



「順不同だよ。もっともっと他にもあるけどね!!!」

Troublemakers/Staden Göteborg
Göteborg Sound/Pappas Pojkar
Trubbel/Sibirien
Bumsen Muss Mann/Adramelech
Slobobans Undergång/I Varje Tid
Perverts/Ronka
Attentat/Hej Gamle Man
Liket Lever/Levande Begravd
Anti Cimex/Braincell Battle
Rukorna/Folkmelodi
次点:Professional Againsters/Lack O Beer

Johan from PROTESTERA



「ほとんどを新しいレコードにしてみたよ。ANTI CIMEXはヨーテボリの出身ではないから、外してある」

Split/Vicious Irene+Vehemence
Anatomi-71/Distansen Tilltar
Degenerationen/Samtiden
Strul/Lennart Och Asen
Contorture/Ahna
Svärta/Remember
Troublemakers/När Ska Ni Fatta
Insidious Process/Mirrors Of The Dead
Attentat/1st
Skitsystem/Grå Värld/Svarta Tankar

Sebastian Todor

「(トップ10を挙げろだなんて)この悪魔め、ハハハ。
書いてみたいところだが、特定のアルバムを挙げる体力がもうないんだ(インタヴューに答えるため長時間、座りっぱなしだったしね)。だからバンド名だけ挙げてみよう」

1980年代のバンド:
Anti Cimex
Tatuerade Snutkukar
Shitlickers
現代のバンド:
Skitsystem
Not Enough Hate
Sälkesauna
Suicide Bombers
Vicious Irene
Myteri
Micael Intergalacton


Anti Cimex,1985

Photo by Todor



パンクとは何ものにも束縛されることなく

破壊と創造を可能にする

LEBENDEN TOTEN

重要なアンダーグラウンド

カルチャーだと信じている

Master of Noise Core Punk from PDX!
そう、みんな大好きポートランドのLEBENDEN TOTENが長い沈黙を破り、遂に『Mind Parasites』LPをリリースするぜ!!
近年にもコンピへの参加やカセット・テープのリリースなどはありましたが、ヒッサビサとなる単独ヴィニールが投下されるとあっては、インタヴューしないわけにはいきません!
今回は新作LPの詳細はもちろんのこと、最近のPDXシーンからお気に入りのホラー映画まで、多岐に渡る質問をぶつけてみました。答えてくれたのは、常に締め切りを厳守するジェントルマン、ギターのFrankと……………………………………………………………
そう!ヴォーカルのChanelです!!(チョットしか発言していないですが、全国のシャネラーの皆さん、狂喜せよ!!)

■2008年のジャパン・ツアーとアルバム『Near Dark』のあとって、あまりLEBENDEN TOTENの情報が入ってこなかったように思うんだけど、2008年以降はどんな活動を?他のバンドもやっていたのかな?

Frank「そいつはかなり前の話しだな!長い話しになるぜ!日本を去ったあと、僕たちはオーストラリアとニュージーランドを数週間ツアーしたんだ。ツアーをセッティングしてくれたり、協力してくれたみんなは、信じられないくらい最高だった。日本もいつだってグレートだったね。僕たちはATROCIOUS MADNESSの頃からずっと、日本のパンク・シーンとは親しい関係にあるしさ。帰国してからは、KeithがHELLSHOCKとTHE ESTRANGEDで忙しくなっちゃったけど、それでも僕たちは新曲を作り始めた。でもその後に、僕たちは練習スペースを何度か変えなければならなくなったんだ。ショーをしたり練習スタジオとして利用していたBlack Waterのスペースを一旦閉じることになってね、KeithがBlack Waterを運営しているから、そのこともあって活動に遅れが生じてしまったんだよ。あとは、"East Coast Exclusion Zone"という短期間の東海岸ツアーをしたんだけど、その後に『Near Dark』や"Cataleptic Noise Contamination"ツアーでベースを弾いていたPaigeがバンドを辞めて、森林地区で暮らすことになってしまった。これはつまり、新しいベーシストに、古い曲から新曲までを一から教えないといけないってことさ。新たに加入したMiraは全てをあっという間に覚えてくれたんだけど、今度はKeithが他のバンドですごく長いツアーに出ることになった。そのため僕たちは再び停滞せざるを得なかったってわけなんだ。新しいアルバムには取り組んでいたけど、それをちゃんとレコーディングする時間がなくてね、それでデモ・ヴァージョンを作ったんだよ。そいつがのちに、『Stagnation Fragmentation』カセット・テープになったのさ。それともう一曲、"At The Window"という曲もレコーディングしたんだけど、こいつはすごく変わった曲でね、サンプリングやノイズ・エフェクトなんかを使用しているんだ。この曲はWyrd Warというレーベルのコンピレーション『Whispers Through The Black Veil』に収録されているよ。ハロウィンをテーマにしたとてもクールなコンピでMIDNIGHTやVAMPIRE、ROB COFFINSHAKER、THRONESなどが参加しているんだ。だからLEBENDEN TOTENは止まっていたわけじゃなくて、条件が揃うまでに、長い時間がかかってしまったって感じかな。そうして僕たちは遂にLPをキチンとレコーディングすることができた。そし

てミキシング作業も始まったんだけど、今度はエンジニアが失踪しちゃって、録音した音源もなくなってしまったんだ。しばらくこの状態が続いたんだけど、最終ミックスのコピーが見つかってようやく出せることになったんだよ。新しいLPのタイトルは『Mind Parasites』、そして片面12インチの『Static』も数ヶ月以内にリリースできるはずさ。6月にはヨーロッパ・ツアーも予定しているし、遂に再び活動が軌道に乗ってきたから興奮しているんだ」

Chanel「もうそんなに時間が経っているなんて信じられない!"East Coast Exclusion Zone"ツアーは2011年だったから、私たちがツアーに出てからもう大分経つのね」

■『Stagnation Fragmentation』カセット・テープがリリースされたのは2015年だったけど、この音源がLPになるわけではないんだよね?そもそも、どうしてこのテープをリリースしたの?

Frank「『Stagnation Fragmentation』になったレコーディング・セッションをリリースするつもりはなかったんだ。元々は曲を覚えるための、自分たちのための単なるデモに過ぎなかった。Keithが他のバンドのツアーに出ていたから、僕たちは6ヶ月間も練習することができなかったんだ、そのために作られたんだよ。残念なことに、再びスタジオに入り曲を再度レコーディングするのにはすごく時間がかかるし、エンジニアと一緒に行方不明になった音源が見つかるまでにも、かなりの時間が経過してしまった。それで僕は何かしらリリースすべきだと考えたんだ。"At The Window"を発表したことを除けば、僕たちはもう8年間も何もリリースしていなかったからね。まだ僕たちは活動しているんだぜっていう何かを示したかったのさ。このテープはラフなヴァージョンの曲をレコーディングしただけのものだし、ヴィニールとして出すことはないよ。テープに収録されている7曲は、全てLPのために再録したし、異なったアレンジも施している。『Stagnation Fragmentation』には、この作品限定の刺繍ワッペンをつけてリリースしたね、200本限定でさ」

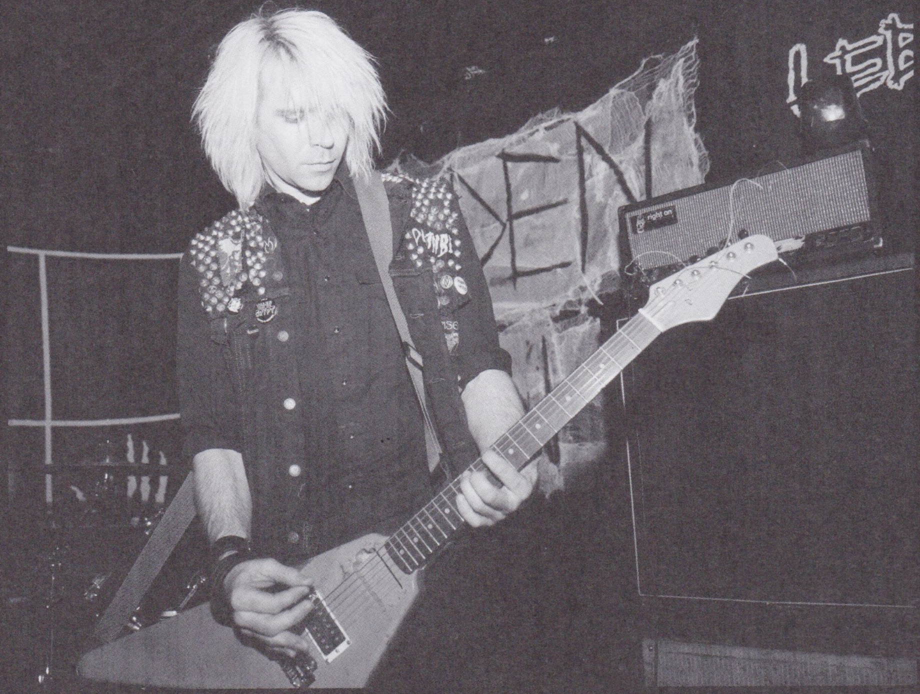
Chanel「『Stagnation Fragmentation』デモに収録されている曲の半分くらいは、前ベーシストのPaigeが元々は書いた曲なのよ」

■それでは、新しいLPについても詳しく聞かせて。日本限定ヴァージョンはOverthrow Recordsがリリースすると聞いたけど、アメリカではどこからリリースされるの?

Frank「そう、Overthrowが日本限定ヴァージョンの『Mind Parasites』をリリースするんだ。カラー盤で、"At The Window"を収録したソノシートも付属する!すごくクールだろ、何年も経ってしまったけど、またOverthrowから出せて嬉しいよ。アメリカ盤は自分たちのレーベルからリリースするつもりさ。これは『Death Culture Deprivation』や『Dead Noise』7インチと同じだね。日本ではOverthrowが扱って、他の国々には僕たちが届けるんだ。7曲を収録していて、全てAudible Alchemyで録音したよ。『Near Dark』LPや『Contamination!!!』7インチをレコーディングしたスタジオさ。エンジニア/プロデューサーはSteve Lobdellといって、このスタジオのオーナーでもあり、FAUSTやLORDS OF FALCONRY、SUFI MIND GAMEでプレイしたり、あとはたくさんのソロ音源も発表している人なんだ。彼は『Contamination!!!』7インチに収録されている曲、別ヴァージョンの"Near Dark"でギターやエフェクトを追加してくれたり、新しいLPでも同様に、色んなエフェクトで僕たちを手助けしてくれたんだよ。あと、今作にはポートランドのヘヴィ・ロック・バンド、DANAVAのGreg Meleneyにゲスト参加してもらっているんだ!僕たちは、この薄汚れた変わり者のブラザーたちとは何年も前から友達でね、数えきれないくらい共演もしているんだ。僕たちには長尺のサイケデリック・ノイズな曲があるんだけど、そこでGregにHAWKWINDやURIAH HEEP、RAINBOWみたいなスタイルで、シンセサイザーを弾いてもらえないかお願いしたのさ。彼は喜んで弾いてくれたよ。彼のシンセサイザー・パートのために、録音した"Mind Parasites"という曲を聴かせようとしたんだけど、彼は聴く必要はないと言ったんだ。彼はどうすべきか分かっていたのさ、ハハハ!そしてそれは事実だったね!彼はスタジオにやって来ると、サイケデリックで渦を巻いているようなトラックを僕たちに授けて去って行ったよ。このLPのレコーディングをしてから一年以上が経ったのちに、僕たちはギターとヴォーカルを追加するためRed Lantern Studioへ行き、そして最終的なミックスを行なった。長い時間がかかったけど、ようやく完成したよ!」

■新作では何か新たな試みというのはしたのかな?どんなサウンドを頭に描いていた?

Frank「もちろんさ!新たな試みとは言わないのかもしれないけど、ちょっと違う何かをやりたかったんだ。僕のギター・サウンドとChanelのヴォーカル・スタイルがあれば、いつでもそれがLEBENDEN TOTENのサウンドだと僕は思っている。そして、僕たちがLEBENDEN TOTENでやりたいことはいつだってノイズ・コア・パンクなんだよ。収録されている曲に取り組んでいたとき、僕は多分、もっとダークな音を求めていた。KAAOSや『Horror Epics』の頃のEXPLOITEDみたいなね。でも、僕たちが常に影響を受けてきたバンドはCHAOS UKにCONFUSE、DISORDER、それにGLOOMだからね!『Recommendation of Perdition』は現代ノイズ・コアが生み出した完璧な一枚だよ。僕たちの新作に関しては、CHAOS UKの『No Security』とCONFUSE『Nuclear Addict』ソノシートが常に僕の念頭にはあったんだ。それとHAWKWINDからの影響も今作には大きかったな。渦を巻くノイズと空間を意識したのさ。でもそれは、LEBENDEN TOTENの持つホラーな側面、ダークな低音によってうまく調和されているんだ。そして自明と思えるような物事の背後には一体何が隠されているのか、僕たちの現実は既成概念によってどう操作されているの





か、そんなことを常に追求しているし、そういったことからの影響もあるんだよ。新しいLPとは別に、片面12インチも出すって話しをしたけど、それはIron Lung Recordsからなんだ。自分たちでリリースしない場合は、Wicked WitchかOverthrowからしかリリースしてこなかったけれど、JensenやIRON LUNGとはATROCIOUS MADNESSの頃からずっと友達だったからね。彼がリリースしたいとオファーしてきてくれたときに、僕たちは片面のレコードにして、裏側にはChanelによるエッチングを施したいと申し出たんだ。それが『Static』12インチとしてリリースされるのさ。LIMP WRISTのScottによるノイズ・エフェクトとエレクトロニック・プログラミングが加わった"Static 1"と"Static 2"が収録されているよ。ScottはATROCIOUS MADNESSがヨーロッパ・ツアーをしたときにもドラムを叩いてくれていたから、彼と再びやれて良かったな」

Chanel「そうね、私が歌詞を書いたりアートワークを作っているときには、常に未知のものや現実にとってかわるような物事を考えているわ。一般に見過ごされたり隠されていることに注意を払ったり、意識の変化に気を配ることが大切だと思うの。ときに、嘘の中に真実を見つけたり、フィクションの中に事実を見つけるのって容易なことなのよ」

■Frankのレーベル、Whisper In Darkness Recordsはまだ活動しているの?しばらくリリースがないようだけど。

Frank「最後にリリースしたのは一年前かな。ASSASSINATEの2nd 7インチで、Distort Realityとの共同リリースだったんだ。これは未発表音源で、何年も前にWhisper In Darknessから出す予定だったんだけど、ASSASSINATEが解散してしまって完成させることができなかったのさ。悲しいことに、僕たちの友人でASSASSINATEのベーシストにして、DEATHCHARGEのベーシスト(のちにギターを弾くことになる)でもあったJoeが昨年亡くなってしまったんだ。それで僕はこの7インチを追悼として完成させようと動き出したんだけど、同時にDistort RealityのSkellも同じことをしようとしていたんだ。一緒にこの作品を出せたのは、素晴らしいことだと思う。その前のリリースと言うとZYANOSEの『Insane Noise Raid』LPだったから長いこと間が空いてしまったけど、今年はPMS 84や、昔のUKバンドBLOOD ROBOTSなんかのリリースを予定しているよ」

■最近のポートランド・パンク・シーンはどうなのかな?昨年末にはPOISON IDEAが再び解散してしまったと聞いたけど…。あと、kriegshögのMasakiが「DOG SOLDIERの最近のEPが格好良い」って言っていたんだけど、その作品は聴いたことある?

Frank「オー、そうだね、新しいDOG SOLDIERのEPは最高だね!彼らの最高傑作じゃないかな。POISON IDEAは再び解散してしまったけど、きっと彼らは戻ってくるよ。彼らはいつもカムバックしているからね、ハハハ!それにしても昨年のPOISON IDEAはグレートだったな!彼らはMY LIFE WITH THE THRILL KILL KULTのオープニング・アクトを務めたんだけど、それは特にもうメチャクチャすごかった!ポートランドは今も本当にクレイジーだし、みんなシーンに関わったりバンドをやったりと盛り上がっているぜ。PMS 84にFRANKY、DECOMP、UNIX、ACID WASH、MACHO BOYS、VIOLENT PARTY、GAASPといったバンドは、ポートランド周辺で活動している新しめのバンドだね。もっともっと多くのバンドがいることは分かっているけど、追いつかないんだよ、ハハハ!幸運にも、僕たちにはKeithが関わっているBlack Waterという素晴らしい会場があるし、僕が働いているThe Lovecraftというバーでもショーを企画しているよ。それにハウス・ショーも時々だけど、今でもあるしね。おかげで活動的なシーンが形成しやすくなっているんだ。他にもアンダーグラウンドなメタルやゴス、エレクトロニック・シーンとパンク・シーンは繋がっているから、僕たちは他の会場でもプレイすることができるってわけさ」

Chanel「羅列するにはあまりにも多くのバンドがいるし、私が名前を挙げようとしたバンドはFrankが言及しちゃった。けどここのシーンは賑わっているし活発よ!」

■OverthrowのMorleyから、FrankはLIGHT HOUSEというエレクトロニック・プロジェクトをやっていたと聞いたんだけど、このプロジェクトについて聞かせて。エレクトロニック・ミュージックは昔から好きだったの?

Frank「LIGHT HOUSEは僕が一年間だけ





嘘の中に真実を見つけたり
フィクションの中に事実を見つけるのって容易なことなのよ

参加していたバンドだよ。僕が参加する何年も前から活動していたんだけどね。彼らは既に7インチと12インチをリリースしていたんだけど、僕にベースを弾いてもらえないかと依頼があったのさ。儚げなヴォーカル・ラインに、ギターとベース、そしてノイズが層をなしているようなエレクトロニック・ダーク・ウェーブでね、普段と違うことをやるのは楽しかったよ。当時のポートランドではエレクトロニック・シーンが盛り上がっていて、LITANIC MASKやLIGHT HOUSE、VICE DEVICE、SWITCHES、ORTRATASCE、CONCRETE FLOORといったバンドがいたんだ。僕はゴシック/ホラー・バー兼クラブのThe Lovecraftで働いているから、そこでバンドとDJで構成されたPerforceというショーを企画したりもしたよ。元々、僕はメタルヘッズとして小さな町で育ったんだけど、地元のレコード・ストアに入荷する以外の、世界各地に無数に存在するメタルのレコードに触れられる機会というのは限られていたんだ。だから僕はゴスやインダストリアル・バンドにも興味を持つようになってね、MINISTRYやSKINNY PUPPY、MY LIFE WITH THE THRILL KILL KULT、SISTERS OF MERCYといったバンドさ…。そのダークでエレクトロニックなサウンドは、『ブレードランナー』や『マックス・ヘッドルーム』、『ニューヨーク1997』などといった映画にもあった美意識を反映していたように、僕には感じられたんだ。そして僕は未だに、その手の音楽やシーンにすごく関心を寄せているからね。僕はLIGHT HOUSEでは、4曲入りの12インチをレコーディングしたんだけど、シンガーはその音源を持ったままロサンゼルスに引っ越してしまったんだ。そして今も尚、シンガーは何もしていないんだよ」

■ATROCIOUS MADNESSの頃から換算すると、もう20年くらい活動しているよね。パンクに対するアイデアに変化はある？

Frank「20年も経ったなんてすごいね!奇妙な感じだよ…。けど、アイデアに変化はないね、僕は今でも、パンクとは何ものにも束縛されることなく、破壊と創造を可能にする、重要なアンダーグラウンド・カルチャーだと信じているんだ。ATROCIOUS MADNESSを始めたときに、僕はパンクというスタイルとバンドから影響を受け、インスピレーションを得た。そして、それらは未だに僕を駆り立てているのさ、政治的にも、アートの面でもね。誰も新たなDISCHARGEやCRASS、CONFUSE、DISORDERなどにはなれないよ…。でも、そういったバンドの音楽やアイデア、美学というのは、今日僕たちが立っている場所のルーツとなっているし、自分たちにインスピレーションを与えてくれる何かに、こだわりを持つことは良いことだと思うんだ。僕は以前と同じように、世界中のパンクを追いかけることはできない。インターネットによって、人間同士の関わり方が変わってしまったし、これまで僕がバンドについて知っていた、やり方というのもその多くが失われてしまった。僕はいかなるソーシャル・メディアもインターネットのホームページも使っていない。だから何かに人気が出たところで、僕はそれを把握すらしていないんだよ」

Chanel「20年も経ったなんて信じられない。でも、私の考えは何も変わっていないわ」

■最近はどんなバンドを聴いているの？

Frank「何年もずっと同じものを聴いているよ、ハハハ!この頃、ターンテーブルにずっと乗っている新しいバンドやアーティストというと、サウンド・トラックやニュー・エイジ・ミュージックの類いかな。John CarpenterやJean Micheal Jarre、Umberto、Xander Harrisとかね…。あとは新しいIRON MAIDENのレコードにSISTERS OF MERCYのライヴ・ブートレグもずっと聴いているな。パンクに関してはもちろん、日本のクラストやノイズの新作レコードを聴くようにしているよ。FRAMTIDにACROSTIX、REALITY CRISIS、POIKKEUS、ZYANOSE、LIFEといったバンドのね。でも、僕が探したり聴いているレコードの多くはやっぱり古い作品かな。未だに探しているパンクやメタル、ゴス、イタロ・ディスコの

レコードは山ほどあるからね!」

■今でもホラー映画には夢中なのかな?最近のお気に入りの映画は?

Frank「もちろんさ、僕は70年代から80年代のホラー映画のグッズやポスター、広告などをコレクションしているからね…。僕たちの『Near Dark』は、現代の吸血鬼映画の中でも最高峰の同名映画(※『ニア・ダーク/月夜の出来事』1987年アメリカ)からタイトルを拝借したんだ。とても悲しいことに、『ニア・ダーク/月夜の出来事』に出演していたBill Paxtonが最近亡くなってしまったね。僕とChanelはホラーとSF映画を見て育ったようなものだし、実際、僕は映画館で育ったのさ、イカすだろ、ハハハ!だから僕はいつも暗闇の中で映画を見ていたんだ。まだ若かった頃には、自転車に乗ってありとあらゆる映画館やビデオ・ショップをまわって、古いポスターを分けてもらえないか訊いていたよ。そういったポスターのいくつかは、今でもまだ持っているぜ。ホラーやSFはときに、多くのエンターテインメント市場には存在しない、人生におけるトラウマに対処する術を授けてくれたり、破滅的なアイデアをもたらしてくれるよね。また、こういったジャンルは金儲けが目的ではなく、単純に好きだから制作されている、という面もある。ホラーやSF映画の背景には、アウトサイダーのためのアウトサイダー・アートである、という意思があると思うんだよ。だからこそ、僕はハマっているんだ。表面下や僕たちが気づいていないところに、同調的ではない不変のテーマが隠されているのさ。『悪魔のいけにえ』や『ハロウィン』といった映画は、ホラーから城や沼地を取り去ったよね。そして上っ面だけの秩序ある世界や、自分自身の中に存在する、ドス黒い現実を直視するよう観客に強制した。戦争や社会の腐敗、不正のメタファーであったり、時代の変化をそこから見出すこともできるだろうさ。LEBENDEN TOTENのサウンドやイメージは、いくつかの面において、映画からインスパイアされていると言えるしね。『ファンタズム』や『ニア・ダーク/月夜の出来事』、『エルム街の悪夢』、『パラダイム』、『ナイト・オブ・ザ・リビングデッド』、『ドーン・オブ・ザ・デッド』、『デイ・オブ・ザ・デッド』、『バタリアン』といった映画さ、ハハハハ。SFだったら『Z.P.G./赤ちゃんよ永遠に』、『ゼイリブ』、『1984』、『2300年未来への旅』とか、もっと色々あるけどさ」

Chanel「私は5歳だったときに初めてホラー映画を見たの。『ハウス』という映画だったわ。そのときから夢中になったのよ」

■アメリカのパンクスとメールをしていると、よくTrump大統領が話題に上るんだけど、みんな心の底から彼のことを嫌っているよね。君たちはTrumpについてどう思っているのかな?

Frank「Obama政権下で生活していた多くの人たちは、これからどんなひどいことが起こり得るのかを、何も考えていなかったんじゃないかな。Reagan、そして2人のBush大統領のときも暗黒期だったけど、今のパンクスはあの当時の実生活がどんなものだったか、引き合いに出せないからね。ObamaとClintonもひどいものだったけど、少なくともここアメリカでは、世界がより良くなれるのではないかという楽観論がまだあったんだ。しかし、Trumpはやっかいだ。なぜなら、"ナゼ?"と尋ねなければならないからさ。ナゼ、彼が大統領なのか?というね。Hillary Clintonに票を投じた人たちの方が多かったし、左翼やリベラル系の候補者への票も多かった。でもTrumpが勝った。なぜなら各州に、誰に投票するかのポイントが与えられているからさ。こいつは馬鹿げているぜ。しかし今でも、レイシストだったり排外的思想を持った人物を求めている人たちは多くいるよ。そう、貧困層から搾取して巨万の富を得た億万長者に騙されている人たちさ。結局はレイシズムとセクシズムに帰着するんだとも思う。単純な話しなのかもね。でも僕はClintonのことも好きじゃないし、信じていない。彼女の背景には恐ろしい歴史が横たわっているからね。では再び"ナゼ"と尋ねてみよう。Trumpは、舞台裏に控えているオペレーターたちのおかげで意図的に権力を手にした。一体、何が目的なのか?彼はニュースを独占している。何せ、彼は完全なるクソでクズ野郎だからさ。彼が大統領であることが、どれほど馬鹿げたことなのか説明するのは難しい。全ては見え透いた嘘と誇張、そしてあいつのエゴを支えるためのものなんだ。そうさ、僕たちは彼を憎んでいる。彼は本当にろくでもないし、これはアメリカと世界にとって最悪の状況であり、今後はこの厄災に巻き込まれるだけさ。もう一つ危惧していることは、信じられないほどに酷いことを彼がやっているものだから、何か少しでもマシなことを彼から提示されたら、安心して受け容れてしまうんじゃないかってことさ。まさにトラウマによるコントロールだよ。事態はドンドン悪化していくだろうね」

Chanel「Trumpのせいで、私は歴史の中でも本当に最悪なチャプターを見ている気分よ」

■今後の予定は?久々となる日本ツアーはどうなのかな??

Frank「ようやくLPを完成させることができて嬉しいよ!それに『Static』12インチと『At The Window』ソノシートを同時に出せることにも興奮している。あと今年は、ヨーロッパ・ツアーを6〜7月に予定しているんだ!僕たちにとって初めてとなるヨーロッパ・ツアーだし、東海岸以来の、久々のツアーでもあるね。来年には日本に戻りたいと願っているよ!これまでの20年間でもやってきたように、日本を訪れ、ツアーして、友人たちと会うのが大好きだからさ!」

Chanel「私も、新しいレコードを出せること、そしてLEBENDEN TOTENとして初めてのヨーロッパ・ツアーに行くことに、ものすごく興奮している。日本ツアーもできたら最高よね!」

■最後に、日本のみんなにメッセージをお願い。

Frank「日本のパンク・シーンは僕たちのことをずっとサポートしてくれているよね、どうもありがとう!そしてATROCIOUS MADNESSとLEBENDEN TOTENに刺激を与えてくれたバンドや人々、ツアーに協力してくれたみんなにもありがとうを言いたい。日本のパンク・シーンはいつだって特別なものなんだ。長年に渡る、日本のクラストやハードコア・パンクに対するこだわりは、世界に類を見ないものだからね。すぐにでもみんなと会いたいよ!」

Chanel「インタヴューありがとう!そしてインスピレーションを与え、サポートしてくれている日本のパンクスもありがとうね。私たちの友人たちと、私たちを鼓舞してくれる素晴らしきバンド全てにも感謝したいな。Kanpai!」



Non Musically Lifestyle

非音楽的日常風景の報告メモ　連載428回

「デヴィッド・ボウイはハードコア？　デヴィッド・ボウイ大回顧展にて」

2月某日

落語を見に行く。

マスコミでも度々取り上げられている若手イケメン落語家の噺は確かに巧かったのだが、その後に登場した名人と呼ばれている人のそれは、技術的な巧さを一切感じさせることなく観客を魅了していた。

巧さを感じさせない巧さ。これはパンク音楽にとっても大切な要素であると、落語を通して再確認したのであった。

2月某日

天王洲にて開催されているデヴィッド・ボウイ大回顧展「DAVID BOWIE is」へ。

私はデヴィッド・ボウイについて詳しくはないのだが、ふと、「彼とハードコア音楽には一切繋がりがなかったのだろうか?」という疑問が去来し、そのヒントを探るべく足を運んだのであった。

平日の夕方にも関わらず会場は多くの人でごった返し、改めて彼の人気の高さを痛感させられるのと同時に、どれだけ展示を見て周っても、ハードコア音楽の「ハ」の字も見当たらない事実に私は愕然としたのであった(イギー・ポップとの関係については取り上げられていた)。

展示自体は、彼の服飾関係にそれほど関心のない私にとっては少々退屈なものであったが、部屋を丸ごと覆うようにモニターが設置され、ライヴ映像が大音量で流されていたコーナーは、まるで生前のデヴィッド・ボウイのライヴを体験しているかの臨場感に溢れており存分に楽しめたのであった。

2月某日

近所のスーパーの特売品の鶏肉をゲットすべく、開店15分前から並ぶ。主婦の群集を掻き分け鶏肉と、更に先着100パック限定の格安卵も入手した私は意気揚々と帰宅する。

そして買ってきた鶏肉を用い、朝から独りから揚げ祭りを開催するのであった。

3月某日

K氏のインタヴュー。

終了後、徒歩10分で帰宅。なんてラクチンなのだろう。バンドマンは全員、福生市内もしくは青梅線沿線に引っ越してくれば良いのに——。そんな愚にもつかない夢想をする私を、まだまだ精力的だった、若かりし頃の私がせせら笑うのであった。

3月某日

プロ野球のオープン戦へ。

血気盛んな10〜20代の頃は、「スポーツとは万人の敵である」の旗のもと、ありとあらゆるスポーツを拒絶・憎悪してきた私だが、今では体調管理(高血圧予防)のため、ジョギングやキャッチボールをして汗を流すまでに落ちぶれてしまった。



デヴィッド・ボウイ大回顧展「DAVID BOWIE is」

野球は面白い。

大の大人たちが、しかも一見するとヤ○ザのようにガラの悪い大人たちが、白球を追い求めるその様は、なかなかに興味深いのだ。

ちなみに私の好きなプロ野球選手は南海ホークスの門田であることを、ここに告白させて頂きたい。

3月某日

VÅNNA INGET、ANDY THE BAND、QUESTION、LIFE、UNARMを見るべく、東高円寺・二万電圧へ。

vol.12でインタヴューさせて頂いたSaira嬢とはじめまして。日本で見たバンドの感想など、少しお話しさせて頂く。ライヴはどのバンドも素晴らしかったが、やはりDETESTATIONを長年愛聴してきた身としては、Saira嬢の強烈なシャウトを生で体感できたことが何よりも嬉しかったのであった。

ライヴ後は電車の乗り合わせが悪く、2時間弱かかり深夜に帰宅。これがあるから私はついつい出不精になってしまうのだ——。否、それはただの言い訳にしか過ぎない。どこか枯れていく己が心地良いだけなのだ。

3月某日

持病の椎間板ヘルニアが悪化し、一日中床に臥せる。

尚、「病弱アピールは伝統である」と、分かる人にだけ分かる余計な一言をつけ加えておこう。

3月某日

C嬢とM氏の対談のため新宿へ。

終了後、居酒屋へ移動し3人で飲んでいると、隣り合わせた酔っ払いのグループに話しかけられる。当初はその素性を公務員と語っていたが、実は全員警察官だという。

「若い頃はKENZI & THE TRIPSやSTAR CLUBが好きだった。みんなが安心して暮らせるように、私たちも頑張っているんです!」

「私は機動隊にもいたんですけどね、元々は福島の出身だから、デモしている連中と気持ちは一緒なんですよ!」等々、熱っぽく語るポリス兄貴に、「職務質問するときは、相手のどこを見て声をかけているのでしょうか?」と質問すると、「そいつは警察官それぞれの勘です!」と無益な回答を得たのであった。

ただし、お酒と焼きトンを奢ってくれたので、私の警察官全体に対する好感度は3ポイントほどアップしたのは紛うことなき事実である。

断言させて頂きたい。私はとてもチョロいのである。

4月某日

今号の最終校正中、LEBENDEN TOTENのインタヴュー・ページのあとに、ポッカリ1ページ分の空きがあることに気がつく。

今更、新規の記事を用意する時間的余裕はない。

「とうとう日記を書くときが来たか—」。

私は意を決し、厳かにペンを執るのであった。



クボタ from SLIGHT SLAPPERS

日本が世界に誇るパワーヴァイオレンス・バンド、SLIGHT SLAPPERS!!4月9日に行われた、INFESTを招いての自主企画:East West Fast Blast Fes #14も大盛況に終わったかと思いますが(この記事を執筆しているのが3月下旬)、実はスラスラのヴォーカル/クボタさんと弊誌発行人のワタクシは、東京三多摩地区に位置する福生市というところに住んでいるご近所さん同士なのです。

以前より、「スラスラとか、最近盛り上がっていると噂のパワーヴァイオレンス、あとは福生の町についてお話ししたいなぁ」と思ってはいたのですが、お互い歩いて10分程度の距離に住んでいるにも関わらず、この6年間一度も会ったことがないという逆奇蹟…(クボタさんはカッパンクで僕のことを見かけていたようですが)。

そんなわけで、放っておくといつまで経っても会えないので(笑)、福生駅改札前で待ち合わせをしてこの度ようやくインタヴューをさせてもらいました。テーマは前述したように、スラスラとパワーヴァイオレンス、そして福生の三本柱。ローカル・トークも大変に炸裂していますので、グルメ・ガイド本のように、EL ZINEを片手に福生という町を訪れてみるのも一興なのではないでしょうか〜。

PHOTO:Kaori Murai [3月9日 鳥貴族福生店]

■さすがに結成からの話しだとあまりにも長いので、どこから聞こうかなぁ、と…。もう今年で23年目とかですよね?

「うん、22年か23年かな、すごいなぁ」

■目下の最新アルバムというと「Moonlight」ですか?

「そうですね」

■2012年のリリースだから5年前。

「そんなになるんだ」

■ユニオン(Diwphalanx Records)からのリリースだったので、ちょっと驚いたのですが。

「広中さん(Diwphalanx Records)のことは前から知っていたので、トントン拍子で出して頂いて」

■10年くらい前にDOLLで、SENSELESS APOCALYPSEのマナブさんとクボタさんの対談を司会が行川さんでやってもらったじゃないですか。あれが面白かったから掲載号を探したんですけど、見つからなくて(笑)。

「あのときに山路くんと初めて会ったんだよね」

■そうでしたよね。それで、代わりにファスト・コアのディスク・レヴューを掲載した号(96年10月号/No.110)が見つかったんですよ。そのリード文を行川さんが書いてて。"○○コアという呼称によくある凝り固まったスタイルはあまりなく、形式化から離れているところがファスト・コアの魅力なのだ"とあって、その言葉が「Moonlight」をまさに表しているな〜と。

「ありがとうございます(笑)。たしかにね」

■形式がないじゃないですか。

「"パワーヴァイオレンスはコレ!"っていうのはないからね。MAN IS THE BASTARDとかも全然違うし。俺の中ではCROSSED OUTが正統派なのかなと思っているけど。(DOLLを見ながら)俺はSLAVE STATEが一番好きなんだよね、トリプル・ヴォーカルなんてありえる?最初スラスラもツイン・ヴォーカルでやろうとしていてANTI AUTHORIZEのヴォーカルのヨネちゃんとツイン・ヴォーカルで、ギターが当時ANTI AUTHORIZEのギターだったシンちゃん(元324、現DISGUNDER)でスタジオ入ったんだけど、ドラムが初心者だったから一回スタジオ入ったら辞めるって言われて、それでギターでヒロシ君が入ったんだよね。結局、パワーヴァイオレンスってアメリカの西の方の人しか名乗っていなかったから、そこら辺を、西以外の人たちはどう思っていたのか聞きたいね。同時期のDROPDEADとかRUPTUREとか、ああいう人たちは、自分たちではパワーヴァイオレンスとは言っていなかったから、どう思っていたのかな、と。死ん

じゃっているから分からないけど(※RUPTUREのヴォーカル、Gus Chamberは2001年に他界している)。SLAVE STATEにしてもNYだし、HELLNATIONはケンタッキーだしね、ASSHOLEPARADEとかPALATKAはエモヴァイオレンスと言い出していたり」

■パワーヴァイオレンス、"まずはこれを聴いておきましょう"みたいな作品はありますか?

「やっぱりSLAVE STATE全部じゃないですかね、特にRUPTUREとのスプリット。あとは挙げだしたらキリないけど、CROSSED OUT全般、SUPPRESSIONとGRIEFのスプリットのSUPPRESSION、CAPITALIST CASUALTIESの「Raised Ignorant」、SPAZZ全部、ASSHOLEPARADEとPALATKAのスプリット、NO COMMENTの「Downsided」、RUPTUREの「Righteousfuck」、DESPISE YOUとCROMのスプリット、SHORT HATE TEMPERとPOTATO JUSTICEのスプリット、OPSTAND、ASSHOLEPARADEとANSOJUANのスプリット、PRETENTIOUS ASSHOLESとDANGER MOUSEのスプリット、THE END OF CENTURY PARTY、まだまだ色々あるけど……。パワーヴァイオレンスのバンドをやる時、本当はSLAVE STATEみたいな重苦しいバンドがやりたかった。他のメンバーにいろいろ聴かせたらNO COMMENTとか好きになって。俺も好きだけど、そっちの路線と言うか、ポップな感じになって。俺は重苦しくて速いのがやりたかったんだけど、分かってもらえず今日に至る(笑)。あと、今はパワーヴァイオレンスが来てるって言われているけど、よく分からなくて。WEEKEND NACHOSとかCOKE BUSTとかACxDCがそうなのかな?一緒にライヴをやったけど、その辺はよく分からなくて」

■周りが色々とカテゴライズするだけで、やっている本人の意識はどうなんですかね。スラスラはパワーヴァイオレンスって意識は?

「パワーヴァイオレンスって意識はしてますけどね、パワーヴァイオレンスのバンドがやりたくてやりだしたんだし。違うと言われたらそれまでだけど」

■違うと言ったら、"じゃあ何になる?"って話しですよね。

「うん、でもアメリカのパワーヴァイオレンスのバンドとは全然違うものになっていると思うけど、アメリカのバンドも個々でまた違うし。Slap A Hamが盛り上がっていた頃、RUPTUREとか、CAPITALIST CASUALTIESの2nd EPとかSLAVE STATEとLACK OF INTERESTのスプリットを出していた頃が一番好きだな。あの時代が。話しは変わるけど、例えばファッション的な話しだとパワーヴァイオレンスにはこれってものが全くないでしょ。Fiesta Grande(※Slap A Ham主催のフェス)に行ったときも、DETESTATIONのヴォーカル、今度カッパンクにQUESTIONで来るSairaが一番前で見てくれていたんだけど、鋲ジャンとか着ててね。もうお客さんの方が派手なの。ステージにあがる人たちはみんなことごとく普通の格好なのに。それがスゲー格好良いなって。それが魅力ですかね(笑)。ASSHOLEPARADEのTravisなんかサンバイザー被ってライヴやってて、日本帰ってきたらすぐイサが真似してた、羨ましかったなぁ、サンバイザー(泣)。Travisが日本に来たときはサンバイザー被れなくなっていたけどね(笑)。意外に多いよね、ChrisしかりMikeとHaroldoしかり、SPAZZのDanもアメリカで久しぶりに会ったらきてたよ(笑)、これがパワーヴァイオレンスか(泣)」

■(笑)。(派手な格好をして)日常をひっくり返すのがパンクなのを、(普通の格好でやることによって)更にもう一度ひっくり返しているというか。

「そうそう、そんな感じ!普通の人がステージにあがって、烈しい音楽をやるのが格好良い」

■クボタさんのステージも、…クレイジーですよね?

「毛根見られたくないから、動いている(笑)」

■見られたくないんですか(笑)?

「マジマジと見られたくないから、どうにか動いて見せないようにしている(笑)。ライヴは聴かせるよりも、見せるのを優先しているから。対バンとかは凝り固まってパワーヴァイオレンスだけでやるのもいいけど、ジャンルこだわらずにやりたいね。誘われないけど(泣)」

■昔はABC Partisan Gigとか出てましたよね。

「そうだね、面白かったねぇ」

■音源に話しを戻すと、「Moonlight」の次がYACØPSÆとのスプリットで。

「あぁ、あれはBlurred Recordsから「Vinyl Collection 1995-2001」ていうのを出したんだけど、レーベルに"(スプリット用の)レコーディングができない"という話しをしたら、そこ(「Vinyl Collection 1995-2001」)から曲をチョイスして勝手に出してもらった感じで、全くノー・タッチ。作品だけが送られてきて」

■チェコ(Dead Heroes Records)のレーベルからのリリースだったので、どんな流れだったのかなと。

「連絡がきて、あの作品にはインタヴューがついているんだけど、最初はインタヴューさせてくれと。そこから始まって、音源も…となったんだけど、"音源は今ちょっとできない"と話したら、そうなって」

■2015年にはHARD-ONSとのスプリットを出しましたけど、これは2014年のHARD-ONSの来日時に対バンして…というのが縁で?

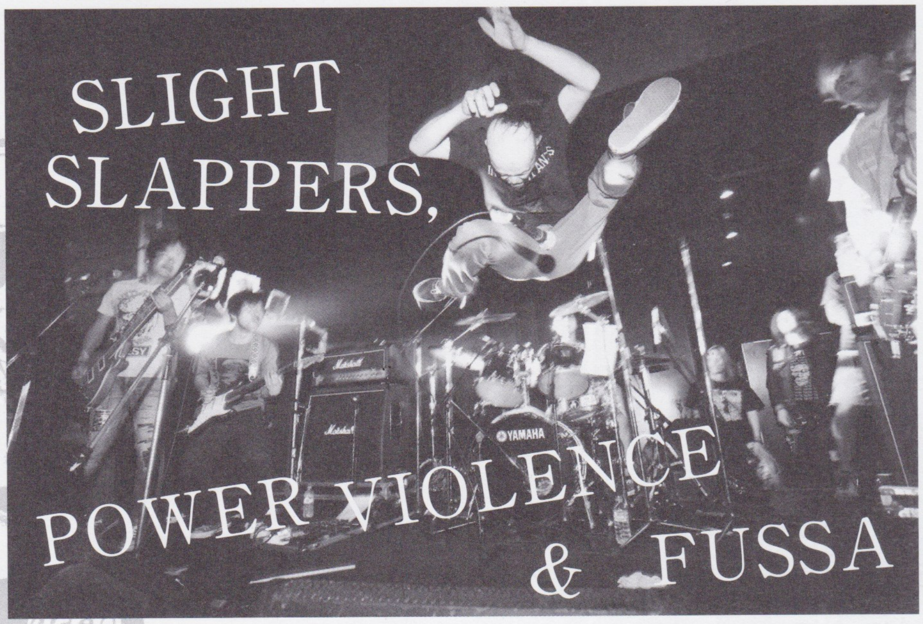
「対バンさせてもらって、その後に(スプリットを出さないかと)メールをもらって。HARD-ONSで思い出したんだけど、2回目に来た時のドラムの人がパワーヴァイオレンスとか好きらしく、RUPTUREのドラムはHEISTとかNAILED DOWNもやってたって言ってたけど本当かな?オーストラリアはああいうタイプのドラマーはあまりいないって言ってた。調べてないからなんとも言えないけど、あのドラムは気持ちいいよね」

■ここ最近のリリースは以上ですか?

「そうですね、新メンバーになってからの録音がHARD-ONSとの音源で」

■近々、新作の予定は?

「SOCIAL PORKSとのスプリット7インチを出そうかなと、スプリットは断わっていたんですけど、SOCIAL PORKSを見たとき、何か一



緒にやりたいなぁって思いましてね、2人合わせて102歳であの音ですからねー(笑)、ハゲまされますよ(と言っておもむろに被っていた帽子を脱ぐ)」

■(目線をあわせないようにしながら)リリースはもうすぐ?

「いや、6月くらいにレコーディングしだして夏くらいに出せれば。Less Than TVから」

■自主企画なんですが、2014年9月にEast West Fast Blast Fes #11でワンマン・ライヴをやりましたよね。

「それは結成20周年記念で、やろうかということで。最初はEast West〜を使わないでずっとやっていこうかと思っていたんだけど、次にやった#12が、CAPITALIST CASUALTIESの来日で。そこでEast West〜って使おうってなったからワンマンもEast West〜でやっちゃおうかと、まぁ後付けで」

■2015年はEast West〜はお休みされて。

「もう不定期で。意外と面倒臭くて(笑)。前は10バンド出すと決めてやってたんだけど、今はもう何バンドでもいいやって、最後が、#10がワンマンで終わらせたので。それまでは毎年9月にやっていたのもなしにして、好きなときにやろうと」

■止めていたのは何か理由があったんですか?

「#10で区切りがいいし、出演バンドもなるべく被らないようにやっていたから、(誘える)バンド数も少なくなっちゃって」

■昨年には#13をされて、DESPISE YOUが出て。DESPISE YOUは誰が呼んでいたんでしたっけ?

「横浜のEl Puente(スペイン・バル/ライヴ・ハウス)のシゲルが。シギーでお馴染みのあのうさんくさい男が今の日本のパワーヴァイオレンスの肝ですからね(笑)。シゲルがいなければ(パワーヴァイオレンスの来日バンドを)何も見れない、みたいな。最初にうちらがCAPITALIST CASUALTIESを呼んだときも、シゲルのおかげでできた。SPAZZのツアーも通訳で一緒についてきてもらったり、今はシゲルが発信してやってくれているから、サポートしていければいいな、と。あいつとは20年来の付き合いで。スラスラがFiesta Grandeに初めて出たとき、あいつはアメリカに住んでて、家で寝泊りしたり。当時、ASSFORTとかGAIA、SMASH YOUR FACEとか同時期にアメリカに行っているバンドは、全部シゲルが世話をしてて。その恩を今は返している感じかなぁ。シゲルがやろうとしていることを手助けして。本当は俺らがやらなきゃいけないんだろうけど。適当なのにやるときはやる、なんであんなに適当で犬の匂いがする男がみんなに慕われているのかがわからない。家に泊まりに来たときも嫁に"シゲルさんお風呂入ってね"って言われて、"気を使わなくていいよ〜"って言ったら、"布団が臭くなるから入って"って(笑)」

■(笑)。そして来月にはINFESTが(4月9日に行なわれたEast West〜#14にも出演)。

「それもシゲルがやっているんですけど、水面下でシゲルとChris Dodgeがずっと連絡を取り合ってて。でも、それを知っていた人間からすると、意外と話しが早く決まったなって。もっと時間がかかるかと思っていたけど」

■#14の出演バンドが(スラスラとINFESTの他は)EXCLAIM、VIVISICK、CRUCIAL SECTION。

「それはもう、それしか考えられないという」

■悩むことなく?

「即決で」

■HPを見たらもう前売りがソールド・アウトみたいで。

「すごく早かったですね、さすがだなぁ、と」

■スラスラでツアーは久しくされてないですよね。国内も国外も。

「そうですね、ボクの家庭の事情もありまして…。あ、でも、ボクはアイドルなので、ちょっと、結婚してるとかそういう話しは(笑)」

■プライベートな話しはNGですね(笑)。

「去年だか一昨年のゴールデンウィークにヨーロッパ・ツアーの話しがあって、準備を進めていたんだけど、それも叶わずメンバーに迷惑かけてしまった」

■しかし今年で結成から22〜23年とは…。

「本当、なんて言うのかな、なんなんだろうね。こんなに長くやるつもりはなかったし、"短命なのがパワーヴァイオレンス"的なものもあったのに。止めるキッカケもなかったし、なんなんでしょうね。メンバー・チェンジしたら解散だなと俺は思っていたんだけど、あるスタジオの日にメールで(当時のギタリストから)"辞めるわ"ときて、スタジオで"どうしよう?"と話したら、みんなやる気で。"えー、そうなんだ?!"って(笑)。ライヴは決まっていたから、OPTRUMという蛍光灯でノイズを出しているバンドの伊東さんに頼んで。もうライヴまで2週間しかなかったから、曲を弾いてもらうのは無理なのでノイズで。そしたらライヴがメチャクチャ楽しくて、それで"やってみようかな"という気持ちになって。そのあとはMELT BANANAのAgataとSLIP HEAD BUTTのユミリンに頼んで、ちゃんと曲を覚えてもらってやったらその時もめちゃくちゃ面白くて、それで今に至る。あれがなかったら俺は辞めてたと思うなぁ、だから3人にはすごい感謝してる」

■メンバーさんは元々、出身はここら辺ですか?

「いや、バラバラ。ドラムは元々は国分寺で、ベースは村山、だから三多摩は三多摩なんだけど、みんな今は東京に行ってしまったので(笑)。ギターは元々は広島の人」

■新しいギターの方は?

「山形」

■なるほど。先ほどもちょっと触れられましたが、今、パワーヴァイオレンスが盛り上がっているって話しをよく聞きますよね。

「聞きますね。本当なのかな?最近のバンドは全く知らないから。日本のバンドは"格好良いのがいるよ"って教えてもらって、チェックはしているけど」

■日本のバンドというと、DREADEYEとか。

「COMPLETED EXPOSITIONとか。あと札幌のCOLOR ME BLOODRED、彼らが解散しちゃったのがすごく残念で。東京に絶対呼ぼうと思っていて。Less Than TVの企画では来ていたんだけど、East West〜で呼びたいなと思っていたけど、叶わなくなってしまって」

■ライヴをやってて、若いお客さんが増えたなぁ、とかは?

「全然ないですね。そもそも俺たちがパワーヴァイオレンスって名乗っていいのか?ってくらい邪道でしょ」

■他に日本のパワーヴァイオレンスっていますか?

「もっといるって話しは聞いているけど…。わからないです、すみません。最近、全然ライヴに行けてないので。だから自分のライヴが楽しくてしょうがない、対バンドを見るのが」

■パワーヴァイオレンスどうこうじゃなく、最近聴いている音楽は?

「何かしらは聴いているけど…、今はJAPANの「Quiet Life」以降と一風堂(笑)。あとはTHE BIRTHDAY PARTYとSODOMの「Breaking Glass」と「TV Murder」、菊の「Hyper Dream Collection」。最近のはあんまり率先して聴いてはないなぁ。今は何が流行っているのかな?」

■ハードコアをやっていた人たちがポスト・パンクをやったり…とかですかね?

「あぁ、BELGRADOだっけ?あれは気になってチェックしてみたら格好良かった。でもCDを出していないんだよね?」

■あそこら辺の人たちって、(アナログ派だから)CDは出さない、買わないっていう。

「そうなんだ、買わないんだ?レコードひっくりかえすの面倒くさいからCDしか買わないけどねぇ(笑)。BELGRADO、欲しいと思ったんだけどなぁ、彼らは日本に来ていたよね。ポスト・パンクもどこからどこまでを言うんだか」

■アナーコ・パンクとも繋がりますし。

「ニューウェーブともね」

■もう"JOY DIVISIONが好き=ポスト・パンク"でいいんじゃないかと。

「JOY DIVISION、モーリーくん(Overthrow Records)のインタヴュー(※vol.21に掲載)でも出ていたね」

■そうですね、あの人JOY DIVISION大好きですし。そう言えば、OCTOBER REVOLUTIONというバンドもやっているんですよね?

「やっていますね、と言うか、やっていましたね」

■何か音源は出していますか?

「音源はないですね。あれは即興で自由に…、ライヴを30分間やるんだけど、ヴォーカルだから何をやっていいのか分からなくて。客をいじったりしていたら、コミカルな部分が出てきてしまって、それがスラスラにも出だして…俺、スラスラはもっと硬派なバンドにしたかったんだけどね、まぁあれはあれで面白かったですけどね」

■あれは、…フリー・ジャズなんですか?

「らしいですね、そう言っていますね。ベースの人がジャズ畑の人で」

■そもそもどういう経緯で?

「元々はHikoさん(GAUZE)に誘われて。初ライヴで、ベースの望月さんとノイズの沫山さんに"はじめまして、よろしくお願いします"って。それで、(ライヴで)ワァァァ!!って。Hikoさん以外面識ない人たちと」

■ライヴはもうやってないんですか?

「4年くらいやってないですね、面白い話しがあって、OCTOBER REVOLUTIONのライヴの日に嫁が救急車で運ばれて、スラスラとは分けたかったから、変な格好、すごく派手なラッパ・ズボンをはいたまま救急車に乗って(笑)」

■この話しは掲載してもいいんですか?

「いいですけど、嫁がいるというのはアイドル的にどうなのかな(笑)?でもEL ZINEって政治的なことを言うバンドが多いじゃん?そういう話しはしなくてもいいんでしょ?」

■あ、僕は思想とかあまりないので…(笑)。

「いや、福生に住むのも横田基地があるからどうのこうのがあるのかなと思ってドキドキしていた(笑)」

■たまにあるんですよ、"アナーキストなんですよね?"とか言われて、"えっ?!"って(笑)。僕は音楽が好きなだけなので…。スラスラもメッセージ性はないですよね?

「ないですねぇ(笑)。俺個人的にですが」

■基本的に福生って横田基地のイメージですよね。もう、基地ありき、みたいな。

「それはあるかもしれないけどね。俺は基地うんぬんじゃなくて、福生にUzuってライヴ・ハウスがあるじゃん?昔STREET SLIDERSがよくやっていた。そういう、なんか気怠いロックンローラーが街を闊歩しているイメージがあって、福生が元々は嫌いで。STREET SLIDERSは大好きなんだよ。でも、ロックかぶれがいるイメージがあって嫌いだった(笑)。俺は昭島市生まれで、チャリンコですぐなんだけど、福生は敬遠していた」

■最寄駅は昭島駅だったんですか?

「いや、拝島駅。でも、(実家から)200メートルも行けばすぐ福生市で。ライヴ・ハウスも多いし、ロックなイメージでね。30年前とかはハードコアもやっていたんだよね。Club 49っていう、赤線の十字路を左に曲がってすぐの2階に、ライヴ・ハウスなのかクラブなのか飲み屋なのか分からないけど、そこでSiCとかROSE ROSEとかGILとかがやってて。「日本レントゲン」って、SiCのRogerが出していたビデオ・シリーズがあって、そこに収録されているGILの映像はClub 49でのライヴ、それ観に行ってたもん。上半身裸の外国人に後ろから背中をピチピチって叩いているのが、当時友達だった宮田(笑)、アメリカン・ラッシュで働いてた」

■クボタさんが何歳くらいのときですか?

「17歳か18歳」

■やっぱり当時はデンジャラスでしたか?

「デンジャラスですよ。コッチ系の人があの辺は多いから、SiCの人が"ヘイ、ヤ○ザ〜"ってケンカを売ったりして」

■未だに赤線ってすごいですよね。21世紀とは思えない(笑)。

「すごいよね(笑)。3年前くらいにオイスカ(Oi-SKALL MATES)が赤線にあるEddie'sってクラブに来て。5.6.7.8'sとSATURNSも出たのかな。今の自宅から歩いて3分くらいだし、オイスカ好きだから見に行ったね」

■kriegshög/UNARMのNenjiさんもこの辺の出身ですよね。学生時代に絡みはなかったですか?

「まだ彼は若いでしょ?SKUNKってバンドのベースの山田ってやつが近所に住んでて、そいつとNenjiが同い年で、同じ拝島高校だったのかな。でも5〜6歳くらい年下だから絡みはなかったねぇ。Nenjiは、UNARMで対バンしたときかな、"生まれが青梅なんですよ。山田くんと同級生で"って言われて、初めて知ったから」

■この辺で同世代のバンドの人っていないですか?

「どうなのかなぁ?いないと思うけど?あ、ヨシノモモコって知ってる?」

■ウーン、知らないですね。

「SUNNYCHARとか、AUTOMATICSっていうRON RON CLOUの人たちがバックで、モモコちゃんがヴォーカルのバンド、K.O.G.A





からリリースしてて」
■あぁ、それは分かります。
「そのヨシノモモコも昭島で。歳は俺の下だから同世代って言ったら失礼かもしれないけど(笑)。あとは同世代ではないけど(坂本)みつわさんて、高木完と一緒に東京ブラボーってバンドをやっていた人で、S-KENとかもやっていたって話しだけど。あとは「ロビンソンの庭」って映画に出ていたり。昔、DOLLに"Slap A HamのTシャツ売っています"って広告が出ていたのね。それで住所を見たら小作(※福生市に隣接する羽村市小作台のこと)で、"エーッ!!"ってすぐ買いに行ったら、みつわさんが店番をしてて。話したらハードコアの大御所の人たちを呼び捨てにしてて、東京ブラボーのこととか知らなかったから"なんなんだろうこの人は…"って。で、"Slap A HamのTシャツ欲しいんですけど"って言ったらもうなくて。"近所のおばちゃんが買ってっちゃったね〜"って(笑)」
■小作にSlap A HamのTシャツを着たおばちゃんが(笑)。
「小作じゃ誰も知らないでしょ、Slap A Hamなんて(笑)。そういう大御所の人が小作にいたっていう。あとは大御所といえばノブさん(Daddy O Nov/Radio Underground主宰者)も福生に住んでいるけど、あんまり絡みがないし。あとSATURNSも福生ってノブさんが言ってた、他にももっといるんだろうけど」
■学生時代は基本、一人でレコード屋とかライヴに行ったり?
「学生時代はレコード屋もライヴも高校の友達とかと。バンドやりだしてからはレコードを買いに行くのは一人で、まず(高円寺の)Boyに行って、当時はまだBaseがなかったから、(西新宿の)Natに行ってAllmanに行ってVinylに行って。で、座れるから西武線で帰って」
■中央線ではないんですね(笑)。
「そう、座れるからね、西武線は(笑)。買ったレコード・ジャケットを見てニヤニヤしながら。その頃にパワーヴァイオレンスも、友達がSlap A Hamにはまってるって聞いて、"なんだそれ?"って。当時はインターネットもなかったから、レコード・ジャケットの裏を見て、"Slap A Ham"って書いてあったら買って。その直後くらいにDOLLでChris DodgeやCAPITALIST CASUALTIESのMikeのインタヴュー、あとSlap A Hamのディスコグラフィーが載ってて、もうそういうバンドをやろうと思ってメンバー探してたから、"ヤバイヤバイ!早くやらなきゃ!"って。そしたらタイミングよくイサから"バンドやりましょう"って言われて、じゃあこんな感じのやろうと色々聴かせて。その頃は速いバンドばかりガンガン買ってた、月2ぐらいで東京行って買ってたなぁ。引っ越しで、そのとき買った物の半分以上は今はなき国立ディスクユニオンに売りに行ってしまったけど」
■なるほど〜。
「そうなんだよね。もっと福生の話しする?あまり詳しくないけど」
■そうですね(笑)。福生にはどれくらい住んでいるんですか?
「5、6年くらいかな」
■じゃあ僕と同じくらいですね。
「え、そうなの?!」
■今年でマンションの更新が3回目だから、6年目ですね。こんなに近くに住んでいるのに…。
「会わないよねー。俺が住んでいる理由は仕事場に近いっていうのと、あとは西友(※福生駅の目の前にありすごくデカい、そして24時間営業)があるからっていうだけ(笑)。横田基地どうこうの理由はなく、ただ西友があるってだけ(笑)。その前には立川に住んでいたけど、東京だね〜、立川は」
■すごいですよね、今、立川は。ららぽーともできたり、IKEAもあったり。
「なんかIKEAはなくなるらしいよ。でも、あのまま住んでいたら家賃も上がっていただろうし」
■最近、立川はヤマダ電機もできましたもんね。
「ローカルな話しだけどEL ZINE的に大丈夫(笑)?」
■はい(笑)。スラスラは福生でやったことはないんですか?
「ないですね。Uzuは高校生のときに、あぶらだこのコピー・バンドで出たことがあるから、スラスラでもやってみたいけど」
■やっても、来るお客さんも大変ですよね、(都心から)遠いから。
「昔、ブルースビンボーズとかがUzuに来たこともあった。あとはノブさん絡みで5.6.7.8'sとかJACKIE & THE CEDRICSとか」
■そうですね、やっぱりノブさんが企画していますね。
「ノブさんがRed Birdって店をやっていたときは、オイスカとかHAT TRICKERS、BATTLE OF NINJAMANZが来たりしてたけどね」
■カニ坂(※多摩川沿いのカニ坂公園で夏に毎年開催されている、福生カニ坂ロック・フェスティヴァル)は行ったことないんですよね?
「うん。でも、ヒカシューの巻上さんとかよく来ているんだよね?前にJohn ZornのMELT BANANA部隊でヴォーカルをやったとき、巻上さんと絡んだことあるから挨拶に行こうと思ったりもしたんだけど、暑いしめんどくさいからやめました」
■僕はちょいちょい、近所だし行くんですよね。
「そうなんだ。見るのもタダだもんね。(カニ坂に出演している)狂育委員会ってバンドも、昔からUzuでやってて、すごく古いバンドだよ、見たことないし面識ないけど」
■Uzuの周りとか、16号沿いも今は寂れていますけど、昔はどうだったんですか?
「あまり変わらないかなぁ?16号沿いではないけど昔、今俺が住んでる近くにカチャンってスケボー・ショップがあったなぁ、当時は珍しかったんじゃないかなぁ?」
■友好祭(※横田基地で開催される日米友好祭)は行かれますか?
「去年は行かなかったけど、よく行きますね。人がすごいよね。EARTH SHAKERとかも来るでしょ?ライヴ見て感動しちゃった。で、山路くんはどうして福生に引っ越して来たの?」
■…家賃が安いから(笑)。
「それが一番なんだ(笑)」
■高円寺に住んでいたときのワン・ルームと福生の3DKが家賃一緒ですからね。あと人

混みがイヤなんですよ。高円寺も、(実家のある)横浜もアホみたいに人がいるけど、福生は人が少ないから。

「じゃあ、檜原村(※離島を除けば東京都で唯一の村)まで行っちゃえば良かったんじゃ(笑)。それか五日市線」

■そこまで行くのはちょっと…。

「すごく不便だよね、終電が何時なんだろう?俺は青梅線は譲れないな。福生ってなんでも揃うもんね、意外に」

■便利ですよね。

「もちろん立川ほどじゃないけど、青梅線では一番便利。でも、東京に出るのがキツイよね」

■新宿に出るのも一苦労ですもんね。そういえば、羽村のリフレンズ(※メジャー・デビューしているパーティ・ロック・バンド)って知っていますか?

「知ってる!音は聴いたことないけど、チューリップ祭り(※羽村市で春に開催されるチューリップがとてもきれいなお祭り)ってあるでしょ(笑)、あれに行ったら今時の若い男が旗を持ってて、おばさんから若い女の子までの団体を引き連れてて、"なんだアレ?"って思っていたら、リフレンズっていって、(日比谷)野音でやるとかって」

■羽村市公認バンドなんですよね(※実際は公認ではなく、"自分たちが育った羽村を有名にするぜ"というスタンスで活動しているみたいでした)。だからスラスラも…。

「福生公認?昭島公認だったらいいかな(笑)。福生は他にあるでしょ〜、しかもスラスラで福生なの俺だけだし」

■八王子はニューロティカが顔じゃないですか。僕はリフレンズを見る度に、"スラスラが福生公認になればいいのに"と思ってて(笑)。リフレンズが筆頭で、音楽祭もやってますし(※羽村駅前で開催される羽村にぎわい音楽祭)。

「それはこの辺のバンドを集めて?」

■いや、泉谷しげるとか出ていましたよ。でも、そこに福生からの刺客としてスラスラが…。

「泉谷しげるが来るって話しは聞いたなぁ。山路くんはチューリップ祭りは行った?」

■毎年行ってますよ。桜祭りも(笑)。

「行くんだ(笑)」

■イヴェントが多いですよね。高円寺のある杉並区とかだと、もう町自体が大きいから、高円寺、阿佐ヶ谷、荻窪とかの町単位でイヴェントをやるじゃないですか、杉並区単位じゃなくて。福生市はコンパクトだから、市をあげてのイヴェントがたくさんあるのはいいな、と。

「七夕祭りとかあるしね」

■あと、福生生まれの人って、地元にプライドがある人もいるみたいで。引っ越して来たばかりの頃に飲み屋に行って、"最近引っ越して来たんですよ"って話しをしたら、"福生にはやっぱり憧れがあって来たの?"って言われて。"ヤバい、家賃が安いからなんて絶対に言えない…"って(笑)。

「それは面倒臭いなぁ(笑)。俺はやっぱり昭島だからね。あと行川さんとアジャコングとえびってバンドのヴォーカルの人も昭島なんだよ、元々一般死民ってバンド名でソノシート出してた。あとヨシノモモコね、昭島の代表ミュージシャン」

■アジャコングって昭島なんですか?

「隣の中学校で俺の一コ下だね。うちの会社のやつが、中学生の頃アジャコングにいじめられていたって」

■篠原ともえもこの辺ですよね。

「小作の寿司屋の娘だよね。あと工藤静香が羽村」

■そうなんですか(笑)。でも、福生より昭島の方が飛行機(米軍機)の騒音がひどくないですか?

「昭島はうるさい、ちょうど通り道だから。福生はそうでもないよね」

■意外とうるさくないですよね。昭島にはライヴ・ハウスってあるんですか?

「拝島には一軒あるみたいだけど。昭島にはないんじゃないかなぁ。立川からこっち側だと、やっぱり福生くらいじゃないのかなぁ。あと拝島か。知らないだけかもしれないけど。赤線には行ったりする?」

■ジョギングするときにたまに通りますね。朝5時くらいに。よく通りに人が転がっていますよね(笑)。

「異国の人も多いしね。CAPITALIST CASUALTIESとかASSHOLEPARADEが来日したときにウチに泊まって、ベジタリアンが多いから、ご飯に困ったりするけど、福生に来れば店の人みんな英語が喋れるしすごい楽」

■国際感がすごいですよね。米兵さんが歩いていたり。あと入れ墨率が高いですよね、人口に対してタトゥー・ショップの割合が多い。

「中学生だか高校生だか、制服着ている子が入れているからね。話しは変わるけど福生病院の前に美味しいお店…」

■マイクス(メキシコ料理屋)ですか?

「いや、その隣」

■トラネコ(アジア料理屋)?

「そうそう!あそこはすごく美味しいよ。俺、パクチーがダメなんだけど(笑)、パクチー料理以外は本当美味しい。そのトラネコの隣にラーメン屋(ラーメン一松)があるでしょ。あそこのオヤッサンも面白い人で、店はすっごい汚くて不衛生だけどまぁまぁ美味しい。なんだかんだ福生はいいとこだよね」

■ちょっと行けばきれいな多摩川も流れていますし。

「…でも、EL ZINE的に大丈夫なの?読者は誰も福生に興味がないでしょ(笑)。もっと音楽的な話しをします?って言っても、俺も困るけど(笑)」

■じゃあ、スラスラが目指す先には、何がありますか?

「羽村音楽祭かな(笑)」

■(笑)。もうそろそろ締めましょうか。読者さんに一言お願いします。

「ライヴに来てください。バンドやっている以上は観ていただいてナンボなんで、もう本当それだけですね」



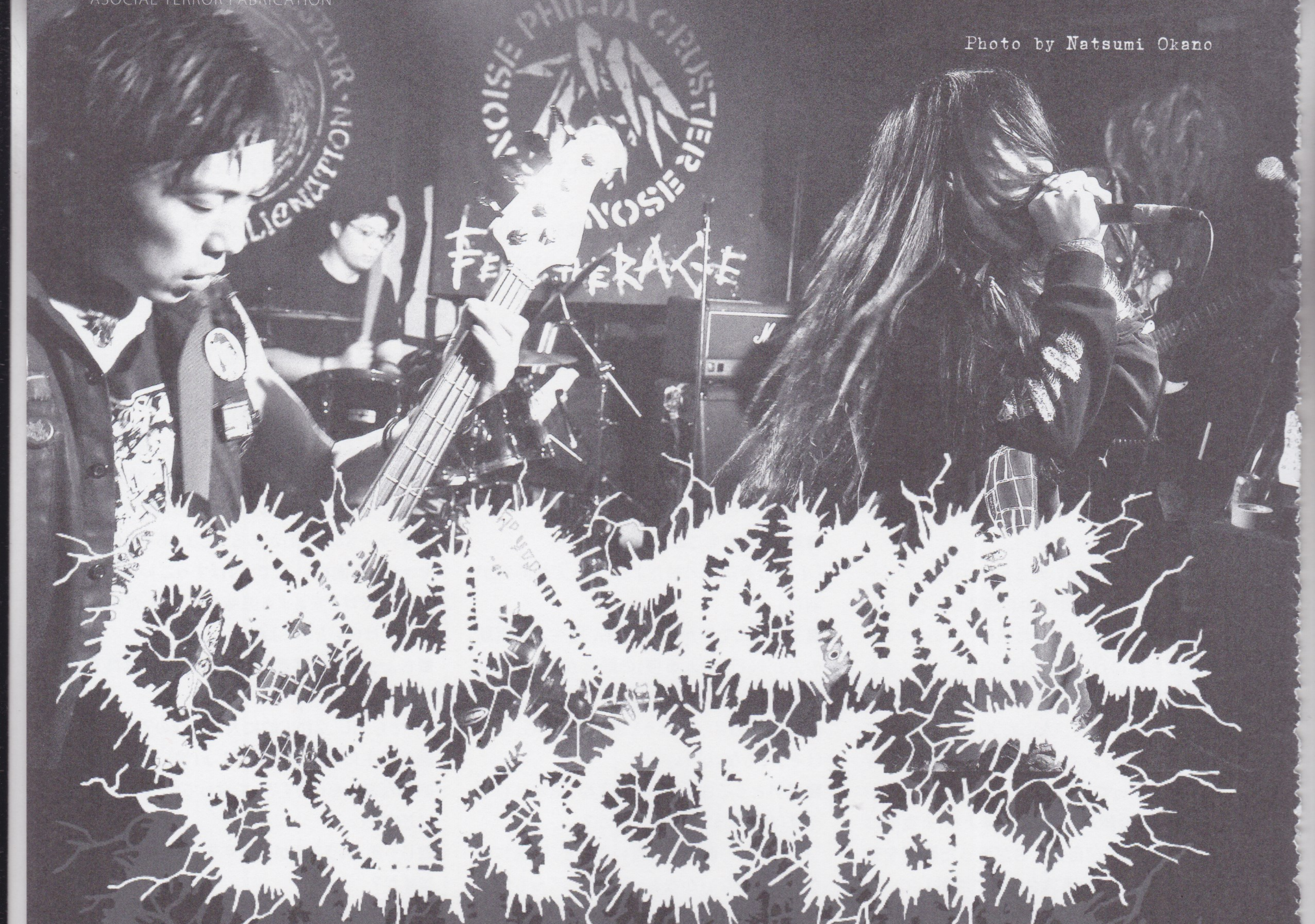


Photo by Natsumi Okano

不肖私のEL ZINE勝手インタヴュー・シリーズ、ここ2号はKAFKA、ブルチン(KALTBRUCHING ACIDEATH)とやりまして、今回ついに真打登場、東京の怒れるクラスティーズ、ASOCIAL TERROR FABRICATION(ATF)です。長い活動歴の割には音源も少なく、また現在ではAUTOPSYもびっくりのデスメタル・サウンドを鳴らしながら、パンク/メタル・シーンを彷徨漂流。いろんな意味で存在感は十二分の彼等ですが、今回は前述2バンドをそれぞれ掛け持ちのメンバー:Shacho(Ba.)、Terminator(Dr.)以外の2人、Corpse_Shit(Vo.以下R)、FleshCrawl(Gu./Vo.以下Y)に、「2017年、Crustとは何か?!」という雲をつかむような話を中心に、現在のシーンのことなども含めてじっくり話を聞きました。加えて、韓国の愉快な仲間たち:SCUMRAIDのジュヨンも途中参加、韓国とのつながりについても聞いています。　　　　インタヴュー、構成:鈴木智士(焔と煙霧:http://tower.void-server.net/)　[2月19日　新大久保とんならにて]

■この前のCØNDITIØNとのライヴ(2月5日@Earthdom)のときだけど、今度はバンド内で何をもめたの?

Y「え、その話から(笑)?あれは、うちらの出番になって、転換時間5分しかないのに、その5分が過ぎてもメンバーが誰も来なくて、EarthdomのPAの人にメンバー探してきてと言われて、外行ったら案の定3人ともコンビニの前で飲んだくれてて…(笑)。そのせいもあってか、ライヴも全然よくなくて。で翌日みんなにLINEしたんだけど、反応したのがRだけで。後の2名はスルー。既読スルーと未読スルー…(笑)」

R「(未読スルーの方は)インフルエンザだったらしいけどね」

■いつもこんな感じだっけ?

Y「いつもはこんなひどくないよ。さすがにセッティング時点では居るよ。DISORDERみたいなレイジーさがかっこいいと思ってんのかもしれないけど、そうじゃないでしょと」

R「さすがにこの前のあれはマズかったしレイジー過ぎた。反省の念しかない」

■それ以降は仲直りしたの?

Y「いや、未だ冷戦状態で…」(※インタヴュー当時。現在は解決済み)

R「同じ事を繰り返さないよう話し合いの場を設けようかと。そういえばバンドの事で話し合いって初めてかも。やっぱコミュニケーションは取らないとね」

「Crustは死んだ」

■さて、「バンドの結成の…」、みたいな野暮なことはもう聞きません。ATFはもう10年くらいはやってると思うけど、この間ひとつのバンドをやってて、シーンについて、何か変化したところや、個人の意識の変化みたいなのはある?まあみんなそうだけど、311は大きかったと思うけど。

Y「良い方向の変化も勿論あるけど、厳しく言うと、後退の一途だと思う」

■UNARMだ。

Y「自分たちで作り上げて自分たちでそれを管理しよう、というのが東京では稀薄かな。もちろんそれは自分に対する戒めも込みだし、自分らが、「シーン」とかそこに根を張ってる他者に向けて特に還元してこなかったのが要因の一つだとは思うけど。少なくとも東京に限って言えば「Crustは死んだ」と言える状況なんじゃないかな。例えば自分が東京でライヴ行き出したりバンドを始めた2000年代初

めの頃なんかは、まだ経験や蓄積のないバンドをこそ、例えサウンド的に「未熟」だとしても、企画に積極的に呼ぶみたいなのはあったんだよね。それがあったからこそ、自分たちも10代終わりで右も左もよくわかんねーって時にバンドの醍醐味みたいなのも味わう事ができたし、そういう中で繋がりも出来ていったと思ってて。僕らは皆考えも異なる個人の集まりに過ぎないし、単純にバンドとしてカッコいいと自分たちが思うのを企画に呼ぶってのは、それ自体は批判される事じゃないけども、それがいわゆる「万人に対する万人の闘争」みたいなのとか、能力主義／実力主義だったり競争原理的な考えとかに基づいてるんだったら嫌だし、そういうのをパンクの中に持ち込みたくはないな。最近はそういう事を実際にネットとかで発言する人も居るしね…」

■そういう「競争」とは離れたところにいたいからこういう音楽やってるのに、いつまでもそれがついて回ってるってのはあるよね。Rは何かある?

R「311後っていうところだと、今はYも歌詞を書くんだけど、当時プレイしてた曲は俺が歌詞を書いてて、311の影響は歌詞に反映されてる。主に原発事故に付随したシンプルな内容でね。今もライヴでやってるけど。まあ「Crustは死んだ」ってことだと、じゃあ我々は生きた化石かなと(笑)」

■あるいは絶滅危惧種か(笑)。そういう「状況」への埋め合わせというか、何とかしなくちゃいけないなっていうのは思う?

Y「ある程度のことは。ディストロとか同じようなことをやり出した人もいるし、そういう人と連携して基盤を再び築いてくしかないのかなと」

■よく話題に出る話だと思うけど、新しい人は?

R「残念ながら入ってこないね。新しいバンドは増えるけど、やっぱそこに新しい人はいないよ」

Y「そういう意味でも、「Crustは死んだ」って言えるのかもね。Crustって広義の「Punk」の中でも、とりわけ金もなけりゃ楽器もろくに弾けない、教養もへったくれもないような奴らが選択したスタイルだと思ってて。要するに文化資本的にも経済的にも底辺の人間(笑)。「これなら自分でもできる!」ってのは感じた人も居ると思うし、ハードコア・パンク自体がとりわけパンクの中でもそういうものでしょ?でも、今の若い人からしたらHip hopとかの方がよっぽどとっつきやすいかもね。こんな大恐慌の世の中で楽器揃えて、レコード聴く環境も揃えてっていうのは敷居が高いし文化としてとっつきにくいのかも、とは感じる時がある」

R「文化としてとっつきにくいってのには同意だね。曲も動画も簡単に聴けるし見れるし、全ての事に関して言えるかもしれないけど、掘り下げる事への渇望が薄いよ。ジャケ買いとか絶対しない印象があるし(笑)」

■もうハードコア・パンク自体に魅力がないってことなのかな。

R「ハードコアのオブスキュアな部分がなくなったというのは言えるよね。その文化のバックグラウンドも無視というか、その裏にあるストーリーを理解しない人っていうのは多いのかなと。例えば、80sのUKのあのバンドの奴と、このバンドの奴は付き合ってたとか、そんなゴシップでですら高揚したし(笑)。そんでもってジャケやインナースリーブに載ってる写真、アートワーク等の数少ない情報源からシーンの背景をなんとか汲み取ろうと舐めるくらいの勢いで1日中食い入って見てたりね。てか今もちょいちょいやってるわ(笑)」

「Crust」の再定義

■さっきの「Crustは死んだ」もそうだし、あとATFは、音も見た目も頭の中も「Crust」というタームにすごいこだわりがあるバンドだと思ってるけど、ただ今「Crust」って言っても、それが一体何を意味するのか、特に若い人たちはいまいちピンとこないんじゃないのかなと思って。

R「それはめちゃめちゃ感じる。こだわりという点ではその通りで、俺とYは「Crust」へのこだわりが人一倍強い。個人レベルでの観点で異なる部分はあるにせよ。我々をご覧なさい、このボロい格好を。ほらMA-1が被っているではないか(笑)!」

■MA-1は最近世間の流行りなんでしょ(笑)?で、だからここらで、もちろん自分らが思うことでいいんだけど、「再定義」した方がいいんじゃないかと思って。ATFとしてのCrustの再定義というか。

Y「再定義やっちゃう(笑)?学問とかじゃないから厳密な定義とか枠にはめるみたいな方向のそれは控えたいけど…」

■ATFとしてでいいよ。「やりたいようにやる」というパンクの不文律に従って…。

Y「じゃあえーと…、歴史的なところで言うと、例えばAMEBIXはCrustのルーツにあたるバンドで、DISORDERと一緒にスクワットに住んで、アナキズムの理念に基づいて、それをサウンドや表現手法まで含めた諸々の活動の中に体現しようとしてたわけで。皆大好きDEVIATED INSTINCTでさえ、"Tip of the Iceberg"はいわゆるStudent Power臭漂う典型的なアナーコ・パンクだし、それ以降の音源でCELTIC FROSTとかHELLHAMMER、VENOMやBATHORYなんかの影響であああいう感じになったけど。普遍的に言ってCrustはアナーコ・パンクの延長線上にあると思う」

R「そう、あくまで延長線上にあるスタイル。個人的に納得が全くいかないというか理解できない部分は、ルーツとされるアナーコ・パンクが何故かクラストにカテゴライズされてるシチュエーションが多い事。そんなザックリした括りでいいの!?みたいな(笑)。ルーツはルーツとしてハッキリさせた方がCrustの背景が汲み取りやすいよね」

■なるほど、あくまでアナーコ・パンクがあって、その延長線上にCrustがあると。一般に「Crust」と言うと、音のことだけが取り上げられがちで…。

Y「もちろんそれも大事。じゃなきゃATFはこうなってないし」

R「個人的には、80年代後期のUKのハードコア・パンクがCrustだと思ってて、その中でも"Crust Core"だの"Stench Core"だのという言葉が生まれてきて、HELLBASTARDの"Ripper Crust"という言葉も出てきて、っていうのは周知の事実だけど。僕が意識してるのは、Crustっていうよりもステンチ・コアだね」

Y「バンドのモチーフやイメージと、サウンドとしてのこだわりはそうだね」

■EL ZINE前号のインタヴューで、ブルチン(KALTBRUCHING ACIDEATH)は自分たちはステンチ・コアだと言ってた。

Y「俺からすると、彼等はステンチ・コアじゃないね(笑)」

■なんで?

Y「音で言ったらあくまでクラスティー・グラインドかな。やってる奴は間違いなくCrustの奴らで、そういうものを俺らと同様に愛してる奴らだと思うけど、ステンチ・コアというにはやや「ヌエ的」な存在で、もっと現行のいろんな潮流の影響も柔軟に咀嚼して産まれたような感じ。これは別にdisってる訳じゃないよ(笑)」

■あの世代はそういうところが敏感なのかもね。

R「まあパワーヴァイオレンスとかが流行ってるってのもあるかも。そういうところから影響されてるというか。パワーヴァイオレンスは俺は普通に好きだけど」

■「スタイリッシュ」にそういうことをやってしまえる若さみたいなのはあるのかも。

R「逆に怖いもの知らずでいいんじゃない?そういうの面白いと思う」

Y「個人的にはブルチンは、テライ(Gt.)のノイズ/アバンギャルド趣味なんかを意識した、音への飽くなき貪欲さみたいのに感心するね。ZENOCIDEなんかに近い感覚というか。勿論バンドとして凄くいいし好きなんだけど」



■テライは知らない音楽を色々教えてくれるし、ありがたい存在でもあるよね。さて、じゃあ「Crustは死んだ」と言うときに、Crustを再定義するにあたって、どうしていけばいいか、みたいなことは?

R「どうするもこうするも、Crustとしての自覚があるATFみたいなバンドがやり続けなくちゃいけないのかなと。こっちが求めても、「目覚める」人なんてまずいないから、だから、いいものをやり続けなくちゃいけない」

■若い人が入ってこない、ってのはもう大体みんなわかってるとは思うけど、バンドをやるモチベーションとして、自分がやりたいことをやるってだけなのかと思うけど、そのへんはやってて辛いと思うことは?

R「俺はそういうのは感じないです」

Y「俺も特に辛さとかはないけど、例えば今新しくCrustに興味持ってる人がいて、色々知ろうと思って音源だけディグってわかるものでもないし、そのバンドとか周辺だけじゃなくて、背景の文化とか、「1980年代」って何だったのかとか、そういう情報にアクセスしやすくするようなインフラっつーか、アーカイブはあってもいいかなとは考えてる。ヨーロッパのシーンにはそういうのがあるよね」

R「それこそさっき言ったストーリーの話だよね」

Y「イギリスにはスクワット文化があるじゃん。当時のバンドの人たちはほとんどスクワットに住んでたと思うんだけど」

R「DOOMとかもそうだよね」

Y「ここで社会運動って言葉は出したくないけど…」

■でもその辺は切っても切れない話だよね。スクワットの話が出たけど、今若い子がCrustとか聴きだして、「スクワットって何だろう」って思って、でも聞いて答えてくれる人がまわりにいるのかもわからんし、ネットで調べても、日本語で一から全部説明してあるサイトとかが出てくるとも思えないし。そういえばこの前来てたBELGRADOは、EL ZINEのインタヴュー(vol.21参照)読んだらスクワッターだと書いてあったけど、日本をまわって、日本の人たちからそういう話は出たのかな。

Y「どうだろう。彼らをサポートしたex-Isterismoのショウゴなんかは、その辺の背景なんかも、決して多くはないinfoに盛り込んだりしてていいなと思ったけど」

R「そういうコンタクトはなかったんじゃないかな」

Y「俺らの世代だと、スクワットまではいかないけどシェアハウスは結構みんなやってたね。それは政治的な立場を意識してとかイデオロギーではなくて、なし崩し的に、金がないからだけど。イギリスのクラスティーズがみんなやってたからとかでもなくて、自然発生的な(笑)」

■イギリスのクラスティーズも、自然発生的な部分はあったんじゃない?そこに行けばとりあえず住むところがあるっていうか。そういうコミュニティとして機能してたというか。

Y「そうだね。しかしほんと金ないやつ多かったからな」

■それっていわゆる「WATTS(※西荻窪にあったライヴハウス。2005年末に閉店)時代」?

Y「そうそう。仕事しないで、家でひたすら発泡酒飲んでうつむいてるだけみたいな(笑)。で、コンビニでおにぎり万引きして、店員に馬乗りになられるとか(笑)。昔の話をすればそんなエピソードは一杯あるよ」

R「今や立派に仕事してるやつもいるし」

Y「セルアウトした人もいるし(笑)」

■今ってそういう、パンクスみんなでシェアハウスしてます、っているのかな?

Y「ここ最近、少なくとも東京じゃ聞かないね」

R「俺の知る限りではいないな」

Y「何年か前に、クラスティーズじゃないけど、高円寺まわりのパンクスで住んでた、ってのはあったよ。俺もたまに、別に何をするでもないけど行って、みんなで集まって飲んだり、ライヴとか飲んだ後に、家まで帰るのめんどくせーからそこに寝に行ったりとか(笑)」

R「スクワット自体が日本にはまあないから、関係ない話だと思ってるのかもね」

Y「ピンとこないだろうね。金がないから誰かと住まざるをえないって、自然に起こっていることではあるんだろうけど」

R「でもクラスト・パンクのカルチャーを知るには、そういう部分にも興味を持たないと、始まらないのかもね」

■Crustってそういう部分と密接につながってて、なんであんな汚い格好してるかっていうと、スクワットに住んでて…。

Y「服買えないからね(笑)」

■それを単なるファッションと思う人もいるわけでしょ。

Y「当時のクラスティーズは、こっちでいう生活保護受けてたっていうね」

R「これはとある人から何年も前に聞いた話だけど、スクワット時代にDOOMのPeteが朝起きた瞬間ポストに走って、届いてる生活保護の金の封筒にキスしてて可愛かったって」

■いい話だ(笑)。まあそれでこそパンクだったわけだし。

Y「例えばHip hopのファッションがいわゆる「オーヴァー・サイズ」なのは、スラムやゲットーに住んでるアフロ・アメリカンの子供が、大人になってからも着れるように親がわざと大きなサイズの服を買い与えてた、なんて説があるっしょ?つまり貧困層出身が多いわけだけど、クラスト・パンツも元々は今みたいに最初から作りこんだりするんじゃなくて、破れてったブラックスリムを少しずつ継ぎはぎで直してった結果、ああなったみたいな。パンクの場合は必ずしも労働者階級出身って事はなくて、特にUK Crustの場合はミドル・クラス出身で大学院まで出てて…みたいな奴も確かに居るけど、でも出自がどうであれ、そうした個人が置かれてる経済状況とかと、その文化の表現としての在り方って無関係じゃないと思うのね。当時のイギリスは大学の学費値上げ反対闘争とかも激しくて、パンクスもアナキストなんかに混じってデモやら街頭での権力との衝突の中に加わっていたり、いまもやってるってのは英語圏では周知の事実だろうし。ファッションもそういう意味では自分の立ち位置を知る一つの指標にはなるし、無意味ではないと思うよ」

「パンク・シーンは自分自身でいられる場所であるべき」

■なるほどね。ああいう格好するには、それなりのこだわりというか、覚悟がいるということだ。それで今の東京のシーンについてだけど、ライヴの場とかシーン自体に、いろいろしんどいこととか、労働や日常からのアジール的な側面は確かにあると思うけど、例えば月曜から金曜まで働いて、たまったストレスをそこで解放して、また次の一週間がんばります、みたいなとらえ方が多いのかな。

R「今はそういう風かもね。若い子もいないし、家庭持ってる人もいるし。仕事との両立というか。いいか悪いかわかんないけど、そういう意味では現実的になったんだろうね」

■現状享楽ってことなのかなあ。何かもう少し計画が必要なことというか、例えば海外からバンドを呼ぶとか、そういうことをやろうとすると、サポートする余裕がない、用意がないというか。

Y「俺はあんまり良くない傾向だと思う。うちらは頭デッカチな「活動家」の集まりじゃない

し、皆が政治的な意見を明確に持ってたり行動に表してるわけじゃないから、一つの目指すべき何かに向かって…と簡単にはいかないのは百も承知だけど、例えばなるべく賃労働しなくてもなんとか生活していける、みたいな方向にもってきたいよね。パンクを食い扶持にしたいわけじゃないし、「結婚」とかして家庭をもつ人たちを批判するつもりは勿論ないけど、結婚はパンクスにとって必須じゃないわけだし、例え生涯ひとり者でも、ろくに働かずにフラフラしてる奴でもここでは何も問われない、不当に抑圧されない、何かを強いられず「ただ自分自身でいられる」って場所であるべき。ただバンドだけやって、普通のマジョリティから見たら惨めで寂しい一生を終えるだけだとしても、それがそいつ自身の望む生き方なら、それはパンクの中では絶対に擁護されるべき。またAMEBIXの話だけど、"Arise!" LPってそれはもう強烈な家父長制批判がテーマの一つになってるんだよね」

■そうなんだ、それはぜひ詳しく教えて。

Y「直接的に「Patriarchy（家父長制）」という単語は出てこないけど、例えば「Largactyl」なんかは、「快適な生活」や「自家用車や妻」を求める世のマジョリティ男の願望みたいなのを、「そりゃ酷い猥褻だな!」って皮肉るのみならず、そうした枠組みにはまることこそが従属に他ならないんだ、みたいな事を言ってるんだよね。「Fear of God」をはじめとして、このLPは宗教批判も強いけど、敬虔で保守的な、西洋社会でありがちな「父親」然とした人間や社会はここでは執拗に弾劾されているし、その「男性優位主義」的なありかたと、「神」そのものを同一視しているようにも取れる。このLPは、AMEBIXが露骨にメタルっぽくなった音源として広く認識されているけど、メタルみたいに宗教を題材に取り扱っても、本家本元のメタルにありがちな保守性とは一線を画すし、ブラックメタルなんかの宗教批判ともまた異なるってことは、歌詞一つとってみるだけでもこれだけわかるっていう」

■なるほどね。アナーコ・パンクやCrustに限ったことじゃないけど、そういう歌詞の読み込みはやっぱり必要だよね。それでまた興味も増すというか。で、さっきのパンク・シーンの話に戻すと、まあコミューンとまではいかなくても、それに近いというか、たとえばシーン内で「仕事を作る」みたいなことができるといいよね。

Y「バンドやってなくても、アートワークをやる人がいたり、ツアー・バンドの運転手をやるとかね」

■それで少しでも日当が出るくらいのね。

R「そういうことをやるにしても、かなり頭を使わないといけない現状だよね。どうやったら生活していけるかとか考えないといけないし」

■相対的に金がないから、景気も関係するのか。

R「それが悪いとは思わないけどね。生活しないといけないわけだし」

Y「いや、うーん…、俺はそれが悪いって意味で話したんだけど。「生活保守」なんて言葉があるじゃん。例えば「結婚」も別に必ずしも異性愛主義みたいな考えからされてるわけじゃなくて、連れ合ってる人らが、控除とか法的な利益を受ける為に消極的に取る選択って一面もあるけど…。さっきの話と被るけど、「異性愛」じゃない人だってパンクの中では当たり前に存在が認められて、他と同等に扱われるべきだと俺は思ってるけど、「結婚して男は家計を支える為に仕事に出て、女は家事に専念」みたいのがパンクの中で主流になって、そうであるべきみたいになってしまうのだとしたら、



それはもう別にパンクじゃなくていーんじゃねっていう。思想とか政治的立ち位置云々以前に、まず美意識として、そういう規範意識とか俗情に対する反発はないの?っていう」

■ああ、パンク・シーンだからって別に世間一般と変わらなくて、逆にその世間の縮図になっちゃってる部分は既にあるよね。まあ個々の意識の問題なのかもしれんけど、一連のそういうのに対して、自分がどう関わっていくかってのは何かある?

Y「最初の話に戻るけど、面倒でも基盤を作っていくことしかないんじゃないかな。音源の流通とかも含めて。広い意味でのハードコア・パンクの垣根を取り払う、ってのも大切かもしれんが、Crustとかアナーコ・パンクの自立精神を、ひとりひとりが共有できていけるようなね。でも啓蒙って言葉は使いたくないし」

■啓蒙だとすぐ上下関係につながっちゃうしね。でもそのへんを個々の自発性に求めちゃうと、今みたいになるのか。

Y「そう、それを自発性に委ね過ぎた結果が今なのかもね。具体的なことで言うと、これは勿論頑張ってる友だち個々人へのdisとかじゃないけど…。今海外からのツアー・バンドが毎年いっぱい来てるけど、それが必ずしもいい事だけをもたらしてるとは思わなくて。東京以外のバンドの話聞くと、ツアーの対応でいっぱいいっぱいになっちゃってて、他のことができないとかの話も聞く。いざ企画やってもそれが海外のバンドのライヴとかぶって、人が入らずに大赤字になるとかもあるらしいし。海外から気軽に来て、それを気軽に楽しめるってのは喜ばしい傾向だとは勿論思うけど、その過程で特定の人に負担が偏ったりとか、一方で観る人や来るバンドがそれを単に消費するだけとか、そういう事は極力減らしたいよね。取り払われるべき垣根って、むしろそういうバンド／客、的な役割や立ち位置の固定化なんじゃないのかな?向き不向きって少なからずあるから強要はできないけど」

■東京のバンドや、ツアー・バンドもそうかもしれないけど、他県でライヴを企画してもらったり、もてなしてもらうことが、どれくらい大変なのかわかってないのかもね。

Y「わかってない人多いかもね。特に東京の人は」

R「逆に他県からバンドが来た時に、東京のバンドは恩を仇で返してる部分があるよね。自分らが受けるようなもてなしをしないっていうか。薄情だよね。みんながみんなそういうわけじゃないけど」

Y「まず他県のバンドを積極的に呼ぼうって傾向が最近の東京は弱いかも。だから最近は自分たちの企画は、なるべく他県からバンドを呼ぶことにしてる」

■結局「東京のカルチャー」みたいなのはずっとあるのかもね。

Y「「シーンの垣根がなくなった」って言っても、所詮は東京の話だし。まわりを見てない。今起こってることは「多様性の広がり」じゃなくて、ノーマライズなんじゃないかな。均一化なんだよ。広がってるとは思わない」

R「俺も広がってるとは思わない。広がってるのは自分自身の中だけで」

Y「それはある。広がってるんじゃなくて、ならしてるだけ。それぞれの歴史や起源も、立ち位置も差異もこだわりもかなぐり捨てて、みんな仲良くしようぜ、みたいな。それでヨイショヨイショしても、俺みたいに違和感を感じて憤る奴も居るし、黙ってても腹の中に抱えてる奴だって少なからずいる。そういう小異を捨てて…みたいのには共感できないし、そうやって物議を醸して反感を買うような苦言を呈して



まで変化を促そうって人は、昔ほどは居ないような気が。揉めりゃいいってわけじゃないけど、皆リアルでもSNSでも人の顔色窺ったような無難な事しか言わないよね」

韓国とのつながり

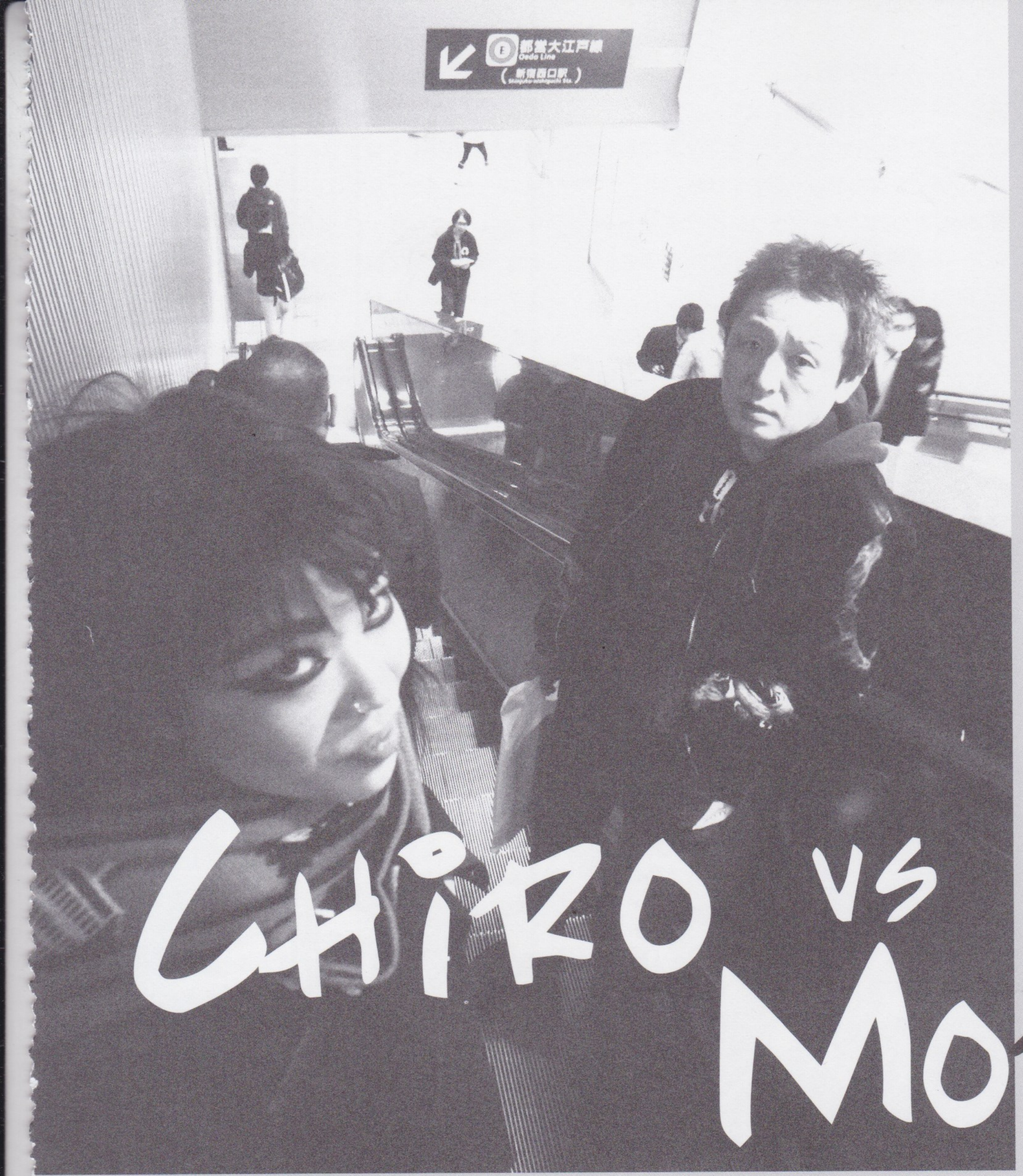
(ここでSCUMRAIDのジュヨンがやって来る)
■久し振り!ジュヨンは今東京で何やってるの?
ジュヨン(以下J)「ライヴ見に来たらこっちの会社に入っちゃって、仕事してます。帰らないかも(笑)」
■どういう流れだ…。さて、ジュヨンも来たのでここで韓国の話を。ATFが韓国に行ったのはいつだっけ?
R「2015年の10月」
■どうやって実現した?
R「Yがコンタクトしてたんだよね」
Y「ジュヨンとはFacebookで知り合って、メッセージでやり取りしてて」
■最初に会ったのは?
Y「2015年のKAPPUNKのときかな、SCUMRAIDが日本に来たときだよね」
R「俺はその後だったかな。SCUMRAIDのジファン(Gt./Vo.)が、ATFが好きだって言ってるのを聞いて、Pitbarで会って仲良くなった」
J「私はそのときはATFはまだ知らなくて、ジファンが「このバンドすごいよ」って教えてくれて、そのときに、あ、かっこいいなと思った。それで、KAPPUNKのときに、Yが毎日遊んでくれて、そこで仲良くなって。そのあと一人で日本に来たときにATFのライヴを見て、かっこいいなと思って」
■ATFかっこよかった?
J「遅い音楽あまり知らなかったし、かっこよかったよ」
R「ちょうど曲調がスローダウンした頃だ。コロコロ変わってたよね(笑)」
J「ATFをきっかけにそういうのも聴き始めた」
■そういうつながりができて、韓国にライヴに行ったと。韓国はどうだった?
Y「最高だったよ。自分のルーツのこともあるけど、俺にとっては一つの故郷でもある土地に行って、パンクのDIYのつながりでライヴができたのは、すごい実りのある経験だった」
R「俺は向こうにどういうバンドがいるかとか、そういう事情もまったく知らなかったから、ワクワクしてた。泊めてくれた人が、CHRISTFUCKってバンドのヴォーカルのジンヨンで、最初は、マジかよ、超イカツイよ、って思ってたんだけど、すごくいい人で」
■ツアーで韓国の他のバンドとのつながりもできたよね。
R「すごいできた。一緒にはやってないけど、THE KITCHESとか」
Y「FIND THE SPOTはそうだね。こっちでもやったし、来たら観に行くし、夜中に泥酔して電話かかってくるし(笑)。ギターだったジフンが夜中に電話かけてくるんだよ。昨日も(笑)」
R「あとはユイン(SALSA、LxPxPのドラム、GONGURIのベースで、ソウルでライヴハウスGBNを運営)とか」
J「GONGURIはまたやり出すみたい。BUTCHER ABCの人(Obliteration Recordsのナルトシさん)が音源出すんだって」
Y「バンド単位や個人のつながりで一緒に遊んだりとかはするんだけど、俺たちの力不足…東京のシーンの力不足って言葉を使っていいと思うけど、なかなか韓国から呼べてない」
R「呼ぶのは毎回CRUCIAL SECTIONだよね。でも韓国でライヴやったことで、バンド単位でも個人単位でも絆は深まったし、得たものは大きかった。いろいろ知れて自分らのためになったし」
■同じような音楽やっててつながれるわけだしね。
Y「俺は今みたいにつながりが出来る以前から、韓国のシーンについて一人で黙々と調べてたんだけど、ジュヨンたちより前の世代のバンド、EXPLODEとか、そこのヴォーカルが後にやったDOKKAEBI ASSAULTとかその周辺のバンドを知って。そのヴォーカルの奴は、昔韓国にとある目的で行った時に実際に会って、色々世話してくれて。今は欧州に移住しちゃったけど、今でもたまに連絡は取り合ってるよ!」

ATF

■あと何かある?
Y「kriegshögがむかつく(笑)。ちょい前に再結成したんだけど、惰性とかじゃなくて現在進行形でガチでやってるのが友達ながらカッコいいと思ったから、この前のATFの企画(12月10日@Pitbar)に呼んだのに、内々の私的な弄りネタに過ぎなかった"ATF=Anal The Fucker"を活字で全世界に晒しやがった(EL ZINE vol.23のkriegshögのインタヴュー参照)のは、ゆるし難い暴挙(笑)」
R「ATF結成してライヴやり始めて3か月くらいのときに、マサキ(kriegshögのVo.)が「ATFって"Anal The Fucker"でしょ?」って」
■そんな前から言ってたんだ(笑)。
Y「そう。でも内輪でとどまってた概念を世界に拡散したっていう、この罪深さ」
R「と言いながらも、結構気に入ってるんだけどね」
Y「まあそうなんだけど(笑)」
■愛憎入り混じるってやつか。
R&Y「奴ら(kriegshög)を吊るせ!」
■今後の予定は?
Y「ドイツのINSTINCT OF SURVIVALとSplitを、ペジャのところ(Doomed To Extinction)から出す予定。あと5/6(土)にPitbarで企画をやる予定」
■じゃあお決まりの、最後に一言。
R「その傲慢な鼻をへし折ってお前のケツの穴にぶち込んでやる。ってこれじゃAnal The Fuckerからの一言だな(笑)」
Y「メンバーとかに腹立つ事もパンクだから当然あると思うけど、優しく、愛をもっていきましょう、自戒を込めて(笑)。Punk Is Love!! (by PISSCHRIST)」



Photo by Natsumi Okano



CHIRO vs MORLEY

[3月27日　新宿ベルク]

毎度お馴染みOverthrow Recordsの森下さんから先だって、「So(Hardcore Survives)の女性版みたいな、すごくアクティヴに活動しているChiroって子がいるんだよ。彼女に一回、話しを聞いてみたら面白いんじゃないのかな」という提案を頂いたのです。
僕は内心、「Soくんの女性版?どんなだ??」と思っていたのですが、例えば昨年来日を果たしたRAKTAのディスコグラフィーCD、そのブックレットのデザインをしたのがChiroさんであったり、また、前号に掲載したMateus Mondiniへのインタヴューでも、「日本を旅したときには、2人の素晴らしい日本人写真家と出会った。ChiroとKenta Nakanoのことさ」と言及されていたりと、俄然気になる存在になったのです。
そんなわけで今回は、DJやフォトグラファー、アーティスト、そしてファンジンの発行に音源のリリース、海外バンドの招聘やライヴの企画もといった具合に、一人で何役もこなしているChiroこと吉河千尋さんと、齢50を過ぎてようやく僕に対するアタリが(若干)優しくなってきた、Morleyこと森下篤さんによる対談をお送りしたいと思います。吉河千尋さんの撮影された写真と共に、どうぞお楽しみください!

■まずは2人の馴れ初めから(笑)。

M「原宿のBig Loveさんでレコードを買っていたときにChiroが入って来てね。あ、彼女のこと知っている、と思って。ライヴで会っていたんだよね。会っていたというか、一方的に俺が彼女のことを見かけていてさ。それで(Big Loveの)スタッフのマルくんに紹介してもらって」

■何のライヴだったんですか?

M「それが覚えていないんだよなぁ」

C「それまで話したこともなかったですね」

■ChiroさんはOverthrow Recordsのことは知っていたんですか?

C「ISTERISMOの7インチを出していたので知っていました」

M「俺が初めてBig Loveさんに行ったときに、ISTERISMOのLPがあってびっくりしたんだよ。そういうレコードもあるとは思っていなかったから。あのとき、俺はRAT COLUMNSのLPを買いに行ったんだよね。それからちょいちょい買いに行くようになって」

■Chiroさんは元々ワープ・マガジンで働いていたんですよね。

C「21歳くらいのときから、2年くらい働いていましたね」

M「ワープって、DBXの大野さんが編集長だったよね?」

C「そうですね。でも私が入ったのは大野さんのあとなんです(※大野氏は2006年まで編集長を務めていた)」

■それでBig Love Recordsのチャート記事の担当だったんですよね?

C「最初に受け持った個人の編集ページが、エレクトロニカやインディを紹介する音楽ページで、その中の一つの企画でした。そのときはまだBig LoveはEscalator Recordsという名前で。担当になってから、お店にも出入りするようになりましたね」

M「Chiroはある意味Big Loveの準スタッフみたいなものじゃない?イヴェントやライヴがあると物販を手伝ったり。かなり頼りにされている存在だから」

■それまでパンクのレコード屋とかには行っていたんですか?

C「そんなには行っていなかったです。私は最初Riot Grrrlから入ったので。BIKINI KILLとかFRUMPIES、Kill Rock Starsのリリースが好きで。カルチャーも全部含めて好きなんです」

■それは10代のときに?

C「10代の後半くらいですね。あとスケートボードも好きで」

M「乗っていたの?」

C「昔、クルーズくらいで、ちょっとだけ乗っていました」

■森下さんもスケボーは(笑)?

M「俺がやったらコケて頭打っておしまいだな(笑)。でも、俺はパンク/ハードコアでずっときていたじゃない。この5、6年くらいでニューウェイヴ的なものに興味を持つようになって。Chiroと俺とでは、音楽の入り方とかは違うわけだけどさ。俺はほら、最初はアナーキーとかだったから。アナーキーって知らないでしょ?日本のバンドだけど」

C「知らないです(笑)」

■Chiroさんはフェミニズムにも興味があるんですか?

C「そうですね」

M「80年代のポスト・パンクはあとから追いかけて聴いていった感じだよね?」

C「はい、やっぱり最初は90年代前半のRiot Grrrlのシーンがすごく好きで、フェミニズムと言うよりも、何か、力をもらった感じで。その時代って、レイプとかもあるから女の子はあまりライヴも安易に行けない。でもそんな中、BIKINI KILLたちが女の子の表現など、自由を求めて動き出して、自分たちで何かやっていこうってことに共感して。だから男がダメだとかは全然ないです」

■フェミニズムでも極端な、男は敵だ!みたいなのもありますけど。

C「そう、そういうのではなくて」

M「女性の視点を大事にして作られているSHEamlessっていうファンジンもあるよね」

■Chiroさんは元々アメリカに住んでいたんですか?

C「ニューヨークに一年間住んでいて、帰って来てからワープで働いて」

■ニューヨークには何をしに?

C「あ、語学留学です(笑)。でもあまり学校には行かなくて遊んでいたんですけど」

■アメリカのアンダーグラウンド・カルチャーやアートも好きって聞いたんですが、どこいら辺になるんですか?

C「20代前半はニューヨークのロウアー・イースト・サイドのカルチャーが好きでした。Supreme周辺やA-Ron周辺や、IRAKとか…」

■(サッパリ分からない…)森下さん、分かりますか?

M「分からん」

C「音楽で言うとGANG GANG DANCEとかですね」

M「分からないな。勉強不足だな(笑)。女性のポスト・パンクだと、俺は後追いで聴いたけど、KLEENEXとか、あとはメンバー全員が女性ではないけどDELTA 5とか、格好良いなと思ってね。探すと色々いるんだよね。そこら辺を、俺みたいな世代が今になって掘り起こすのは遅いのかもしれないけど、楽しいよね」

■2人が共通して好きなのは、その辺ですか?

M「そうだろうね、彼女はBig Loveさんに出入りしているのもあって、現行のバンドに詳しいよね。俺なんかは現行のバンド、…バンドってかアーティストだけど、DRAB MAJESTYとかを聴くと、80年代だなぁって。やっぱり80年代というのが俺には重要なキーワードになっていて、ノスタルジアを感じるというか」

■Chiroさんも80年代にノスタルジアを…。

C「(笑)」

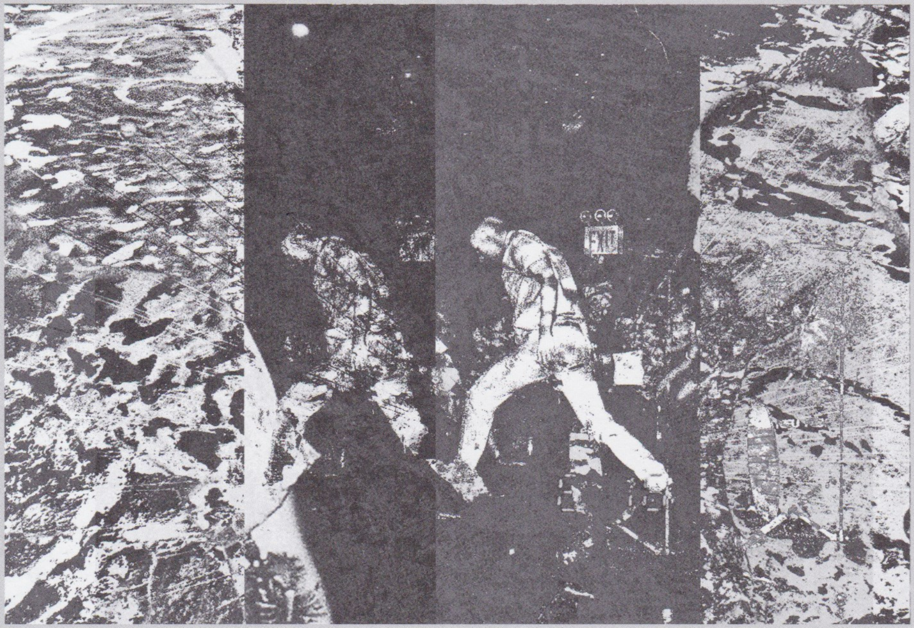
M「それはないだろ(笑)。俺とChiroは誕生日が同じなんだけどさ、誕生日のことってよく覚えているじゃない?何歳の誕生日はこんなことがあったとかさ。彼女が生まれた日、86年の誕生日に俺が何をしていたか思い出したら、その前の日に大学の前期試験が終わってみんなでパーティしてて、先輩の家に泊めてもらってさ。その翌日の誕生日当日は、帰り道に



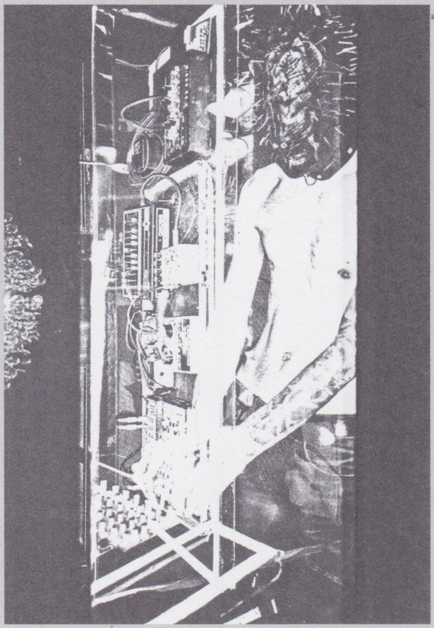
Carla from RAKTA



ESPACIE FALLIDA

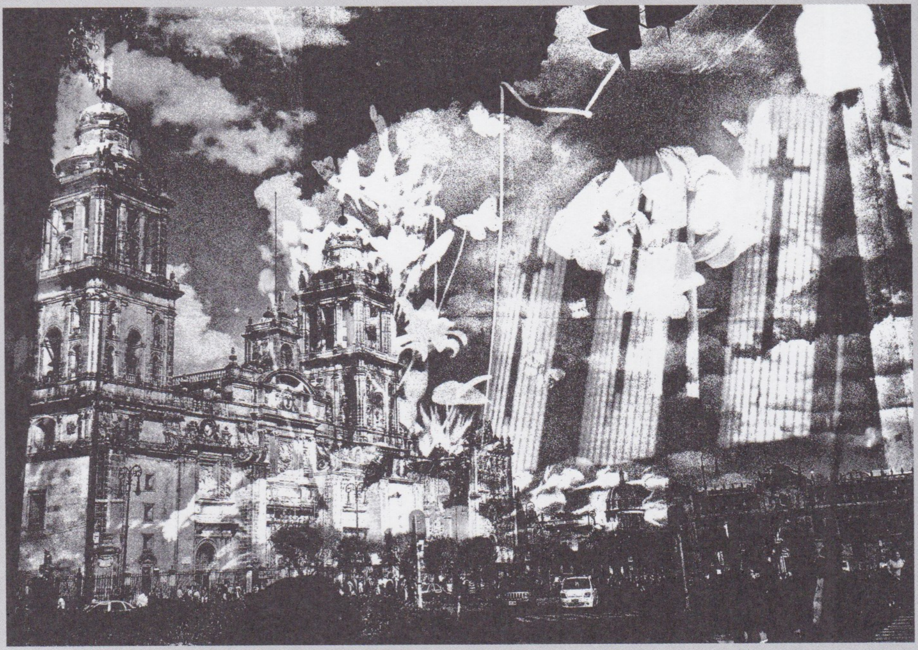


HOAX

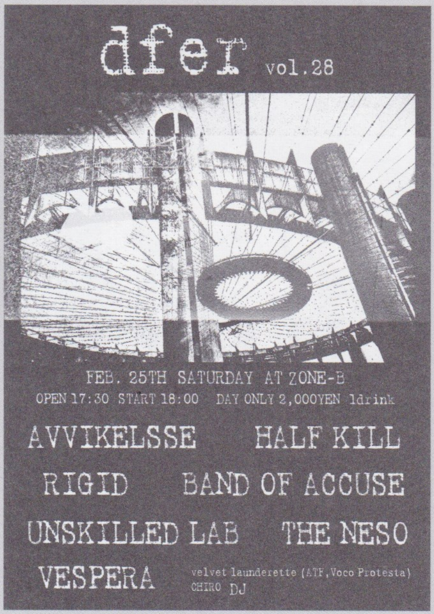


PIGS

SelfishからリリースされたばっかりのEXECUTEのEPを買ったのを覚えているね(笑)」
■え、なんで誕生日が一緒だってことを知っているんですか??
M「Facebookに載っているからね」
■あー、今の時代はそういうのがあるんですね。
C「BELGRADOのAntiknockのライヴのときに、モーリーさんに誕生日が同じだと言われたんですよ(笑)」
M「BELGRADOはライヴ良かったね〜」
■ChiroさんはDJもされていますが、いつから、どんなキッカケでやっているんですか?
C「21歳くらいから、アメリカから帰って来てからやるようになって。Big Love周りの人たちがDJパーティをやっていて、そこで自分もやり始めて。それから今も続けているFishというパーティもマルくんたちと一緒に始めました。なのでDJだけだと10年くらいやっていますね。今はいろんな場所でもやらせてもらって」
■この間もDJされていましたよね(※3月22日に東京・二万電圧でVÅNNA INGET、ANDY THE BAND、QUESTION、LIFE、UNARMが出演したライヴのこと)。
C「パンクのライヴなどでDJをやるようになったのは、ENCROACHEDのノブサカさんがキッカケで、Pit BarでDJをやらせてもらって。そのときにUNARMのヤギさんとかSoさん(Hardcore Survives)、MOONSCAPEのヘイトさんもいて」
■かけるレコードのチョイスはどんな感じで?
「Fishでかけるときは全部ミックスして。よくかけるパンク・バンドを2つくらい挙げるとLEBENDEN TOTENやLAS OTRAS。女性ヴォーカルが多めです。ポスト・パンクだとRAKTAとかSECT、BELGRADO。あとはSTRAWBERRY SWITCHBLADEみたいなニューウェイヴや、PUCE MARYやCADENAとかのパワー・エレクトロニックやインダストリアル。FULL OF HELL x MERZBOW、LIEBESTOD、GRIM、HUNTING LODGEなどのノイズ・エクスペリメンタル、たまにHUMAN PARTICLEやTRACI LORDSの「Control」とか、テクノみたいなダンスものもかけたり。そのときにテーマがあって。最近はDepth Of Decayというレーベルからミックス・テープを出させてもらったんですけど、それがキッカケでアンビエント系のイヴェントでもDJさせてもらったりして。そういうときは自分でフィールド・レコーディングしたものも一緒に流したり。あとは、13th MOONのナオヒロさんも毎回出演しているSodomというイヴェントではMINISTRYや、Sacred Bonesから出ている「KILLED BY DEATH ROCK」に入っているようなダークウェイヴを多めの感じでDJさせてもらったり」
M「この前、初めてナオヒロのDJを見たけど格好良かったね〜」
C「SELOFANのライヴのときですよね、格好良かったです」
M「DJでかけるレコードはどこで仕入れているの?Big Loveさん?」
C「Big Loveとパンデス(Punk And Destroy)もよく。あとBaseとか、海外旅行に行ったときに買ってきたり」
M「中古盤を漁ったりはしないの?」
C「そんなにたくさん漁るわけじゃないです。たまにユニオンで買ったりとか」
M「この前ユニオンに行ったらさ、女性でレコードをすごく買い込んでいる人がいてね。女性でそんなに買い込む人ってあまり見たことがなかったから、なんとなくいいなってか嬉しかったね」
■一瞬、森下さんは女性のことしか見てないんじゃないかと思ってしまいました(笑)。
M「そういう話しじゃないだろ〜(笑)」
■ライヴ・ハウスに女性がいたからって覚えています?Chiroさんのことにしても。
M「覚えているよ〜」
C「覚えやすい顔、メイク(笑)」
■へー(笑)。フォトグラファーとしても活動されていますが、学校に通っていたんですか?
C「いえ、もう独学で。ファンジン持ってきたんですよ、こっちがフライヤー集で(All Shows These Flyers)、最初に言ってたFishや、dferのフライヤーなどを作らせてもらってて」
■(フライヤー集を見ながら)アナログ感を出したい、みたいなのはあるんですか?
C「そうですね。使っている写真もフィルムで撮ったものなので。最初にイラストレーターで作ってプリントして、それを切り貼りして、スキャンして、とか」
■製本は?
C「製本も自分でやっています。あと前はインタヴューのジン(Wallnuts)も作ってて」
M「自分の好きなバンドの人に、好きなレコードのトップ10を書いてもらったりしていたよね」
C「今よく聴いているレコードと、ずっと聴いているレコードとか、映画とか、自分の好きなレストランだったりスポットだったり、その人のパーソナルなことを。同じバンドのメンバーでも全然違うので、一番興味があって」
■そういうのを出しているのが(Chiroが主宰しているジン・レーベルの)I Hate Miss.Crybaby?
C「あ、それはもう終わりました(笑)。ジン・レーベルだったのですが、今はPain Chrisantemoっていうレーベルで。ジンと、あとRAKTAのベースのCarlaの別プロジェクトのFRONTE VIOLETAのカセットを出したり」
M「あぁ、あのユニットは良いよね。俺も大好き」
C「今はアメリカでだけ出しているんですけど、今度日本でも出します。あれは自分がやった写真展のために作ってもらって。映像も作ったのでそれのサントラとしても使いました」
M「FRONTE VIOLETAはパンデスで買ったけど、すごく良かったね」
■そうやって、自分でなんでもやる!っていうのは、Riot Grrrlからの影響が?
C「そうですね。ジンに関してはM'lady'sというレーベルから出ていたジンで、全部まとめられたのを買ったんですけど、それから影響を受けたり」
M「『girls ZINE 女子のためのジン案内』って本もあるんだよね。女性が作っているジンのことや、海外でジンを始めた人の歴史が書



dfer 2017 Feb



いてある本があって、欲しいなと思ってて。Chiroはレコードは作らないの?前に日本に呼んだHOAXのときは…」

C「HOAXのときはFlexiをツアー限定で作って。一緒にツアーをやったDREADEYEのケミーさんとUNARMのヤギさんとの3人で作ったんですけど、そのFlexiの権利はケミーさんにあるので(笑)、そのあと7インチになるかならないかの話しはあったんですけどね。Flexiはすぐ完売してしまったので、7インチ出て欲しいなと(笑)」

M「HOAXは分かる?」

■いつも血を流しているバンドですよね?

M「そうそう(笑)」

■来日バンドのサポートもされているんですよね?

C「HOAXはツアーで、あとは来日バンドの企画もたまにしたり。YOUTH CODEやRAKTA、コペンハーゲンのICEAGEやLUST FOR YOUTH周りのメンバーが来たときに企画させてもらったり、手伝ったり」

M「Big Loveさんの周りだと、Chiroもそうだけど、元気ある女の子が多いよね」

■色んなバンドのアートワークもされてて。

C「一番最近は、今度発売されるRAKTAですね。あとはLOWERの(レコードで使用された)写真、ポートレートを撮ったり。それとESPACIE FALLIDAやMOONSCAPEだったり」

■基本的にバンドから頼まれるんですか?

C「そうですね。友達繋がりでお願いされたり」

■Chiroさんはもう、一人で何役もしていますね。DJ、フォトグラファー、ファンジン作ってレーベルやって、バンドのアートワークもやって、来日企画やサポートもして。

M「それが、俺が言った女性版Soってこと」

■一方、森下さんは…。

M「俺はもうノンビリしているなぁ(笑)。まぁ、頑張りますけどね。でも彼女が出しているもの、やっていることをすごく良いなと思うし、刺激にもなるよね」

■森下さんや僕なんかはオールドスクールというか、何をするにしても古臭いやり方だと思うんですよ。でも、Chiroさんのアプローチの仕方はやっぱり新しいというか、面白いですね。そこに絡みにいっている森下さんも面白いですが(笑)。

M「今、起きている新しいことを知りたいって気持ちが絶えずあるから。でも、あまりにも分からないこともあるよね、所詮は古いヤツほど新しいモノを欲しがるっていう(苦笑)」

C「モーリーさんは、当時聴かなかった曲とかを今、聴くようになって新鮮で良いなって…」

M「うん、それはすごく思う。結局、俺の80年代はパンク/ハードコア・オンリーだったけど、今になって、当時はスルーしていた音楽を聴いて懐かしさを感じるっていうことは、なんとなく聴こえていたからなのかなって思う」

C「(La Vida Es Un Musの)Pacoも当時(若い頃)はBELGRADOとか好きではなくて、80年代のニューウェイヴとかを聴いても、何だこれ?って思ったんじゃないかなって話しをしたことがあって」

M「そうだね、でもPacoは俺よりもうんと若くても、俺よりも色んないい音楽を知っている人だろうし」

C「うちは古いのをそんなに知っているわけじゃないので、リイシューで聴いて逆に新鮮に感じたり」

M「今、一番好きなアーティストは?」

C「RAKTAは新しいものも含めてずっと好きです。最初に出会ったとき、パンデスでレコードをオーダーしたんですけど、聴いてもう脳をヤラれました(笑)。射殺された感じで(笑)」

M「RAKTAは俺も大好き。俺はなんだろうな、現行のバンドだとポートランドのSOFT KILLかな」

C「ASYLUM PARTYは?」

M「ASYLUM PARTYは古いバンドだけどね、なかなか音源が手に入らなかったよね。やっと再発されたけど、ほとんど日本に入ってこなかったし」

C「この間、アメリカに行ったときはS-21がすごく好きでした。あとはToxic State Recordsから出しているHARAMとか」

M「Toxic State周辺は好きだよね?」

C「すごく好きですね。実現はしなかったんですけど、3年くらい前、私がニューヨークにいたときにWallnutsでToxic Stateにインタヴューをしたんです。SAD BOYSとかPERDITIONとかみんな集めてインタヴューしようとしていて。結局予定が合わずにできなかったんですけど、ちょうどそのときにCONTRAST ATTITUDEがニューヨークに来ていたので、見に行って写真を撮ったりして。HOAX(の来日ツアー)のときにそんな話しを(CONTRAST ATTITUDEのメンバーに)して、驚かれました」

■今のニューヨーク・シーンも旧態に囚われていない、新しい感じがしますよね。ANASAZIのメンバーにはNAUSEAのメンバーの息子がいるんでしたっけ?

M「ギターか。OUT OF TOUCHのリーダーから聞いたんだけど、NAUSEAのベースのJohnの息子だって。EL ZINEの表紙になった写真で、4人のうち一番普通のというか。背の高いのがドラムでベースの女性がAlexander Heir(L.O.T.I.O.N. etc)の彼女でしょ」

■Chiroさんはこの間もアメリカに行ったみたいですが、それは?

C「写真の展示で行きました。写真展とグループ展があって、LAとオクラホマで」

■それはパンクのフェスの一環で?

C「そうです、Everything Is Not OKっていう今年で3回目のフェスで。4日間のフェスだったんですけど、女性だけを集めたグループ展「Collective Delusion//Mass Hysteria」があって。3年くらい前からその展示は始まったんですけど、ニューヨークのNY's AlrightとかトロントのNot Dead Yetなど、色んな場所を移動する展示ですね。初回から参加していて、これまでは作品だけ送っていたんですけど、今回初めて自分も行きました」

■Everything Is Not OKの音楽的な方向性はどんなのでしたか?

C「ちょっとガレージっぽいのと、90年代のRiot Grrrl的なバンドも多くて。あとはハードコアとかユースクルー、エレクトロニックが入ったスタイルもいたり。面白かったですけど、展示の方にいたので毎日大変でしたね。それと若かったです、みんな若い子たちがガンガン出てきてて」

■客層が?

C「客層もやっている人たちも20代前半とかで。KALEIDOSCOPEとかQってバンド」

■日本だとどうしても若い人が少ないから、それは羨ましいですね。でも、Big Love周りの人たちって若いんですよね?

C「"Big Love"とは言い切れないですけど多いですね。この前もCØNDITIØNのツアーのときに出ていたKLONNSってバンドも若い子がやってて、格好良いですよ。カセットも出してて」

M「新しいことが起きているんだよな」

■そうですね、僕が分かってないだけで。

M「俺はやっぱり面白いことをドンドン見つけていきたいってのがあるからね。年齢的には若い人が多いから、気後れすることがなくも

ないんだけど(苦笑)」

■Chiroさんから見て、森下さんはどうなんですか?

C「モーリーさん、面白いです(笑)」

■たしかに面白いですね(笑)。

C「ちゃんと話したことがそんなにはないので、もっと色々聞きたいです。でも口下手なので(笑)」

M「50年以上も生きていると色々ありますからね(笑)」

■逆にChiroさんよりも若くて、バンドや企画をしている人とかも結構出てきているんですか?

C「さっきのKLONNSの人たちだったり、DEVIATIØNとか。パンクのライヴでも会うし、エクスペリメンタルなどのライヴなどでも会うので、垣根がない感じで。パワー・エレクトロニカとかノイズも好きなんですよ」

M「俺もインダストリアルを10代の頃に聴いてみようと頑張ったけど、なかなかのめり込めなかったな。俺が10代の終わりの頃って、SPKがユーロビート…とは言わんか…ハイパーにエレポップ化して、それまで聴いてたファンが困惑した『Metal Dance』とかの頃だったから。一番地下臭が漂って激しい時代の音源は、もう手に入らなくなっていたしね」

C「SPKのアルバム「Zamia Lehmanni - Songs Of Byzantine Flowers」をもらったんですけど、宗教がかったダーク・アンビエントな感じのアルバム。めっちゃ好きですね」

■活動も多岐に渡るし、音楽的嗜好も幅広いですね。

C「でも自分の好きなやつだけチェックしている感じです。自分たちで何かを生み出したり、やろうという人たち、DIYだったり、パンクの精神を持った人たちが好きです」

M「そういう話しを聞くと、俺もまだまだ凝り固まっているなと思うね。Chiroは色々聴いているけど、俺は自分の好きな出音っていうのを最優先しているからさ。まだまだこの先も大海原が広がっているんだなと思うね」

■ちょっと話しを戻しちゃいますけど、Trashion Magazineというのも作られていましたが、あれは最近ですか?

C「あれは2、3年くらい前です。ゴミと一緒の写真を撮って。私たちの生活はゴミのようだけど、それが一番美しいって意味ですね(笑)」

■世界各地の女の子が、ゴミと一緒に写真を撮ってて。面白いことを考えるなぁ、と。

C「男子もいるんですけど、ベースは女子で。どちらかというと、アートをやっている子たちが多かったんです。バンドだとPHARMAKON、TROPICAL SKIN BIRD、FORPLAYとかが関わっていて。PHARMAKONのメンバーは今、CHEENAってバンドをやっていて」

■全然バンド名が分からない…。

C「CHEENAはCRAZY SPIRITとかHANK WOOD AND THE HAMMERHEADSやANASAZIのメンバーが入っている、ニューヨークのバンドで。Dripper World周辺のバンドです」

■なるほど。

M「Chiroは年に何回くらい海外に行っているの?」

C「去年は全然行ってないです。普段は年に2回くらい」

M「フットワークが軽くて良いよなぁ。俺なんかは海外だとポートランドに一回行ったことがあるだけで。あとは仕事もあるから、東京と大阪の間を行き来しているだけでさ。大阪より先の津山とか広島とかも行ってみたいけど、行ったことないんだよな」

C「津山もツアーのときなどにくっついて行ったり」

M「あぁ、行ったことあるんだ。津山はやっぱりSKIZOPHRENIAがいるから強いよね。あとTHE RUSTEDもね」

■津山って山の中に位置しているんですか?

C「そうですね、(ライヴ・ハウスの)K2も学校の間にあったりして。K2はヒップホップのイヴェントも多いらしいですね。ライヴに出れない若い子がイヴェント終了後に、ステージでフリー・スタイルでやっていたりするみたいです」

■ヒップホップはどうなんですか?

C「2000年代前半のDIPSETとかはよく聴いていました(笑)。Juelz SantanaとかCam'ronがいた(ヒップホップ・ユニットで)」

M「知らなすぎて困ったな(笑)」

■今後、何か予定していることは?

C「今後はブラジルに行きます。今年、6月末に」

M「八面六臂だねぇ」

■ブラジルはMateus(Nada Nada Discos)のところにも行くんですか?

C「MateusとかRAKTAのメンバーの子たちの協力で、ブラジルで展示もやる予定です」

M「Chiroの今後の活躍をね、俺は遠い目で見ているよ(笑)」

■いやらしい目で見るわけですね(笑)。

M「なんでだよバカ野郎(笑)。まぁ、俺は細々とね」

■森下さんはLEBENDEN TOTENのリリースのあとは?

M「そのあとは、本来であればすでに出ていなければおかしいんだけど、テキサスのCRIATURASのEP。それと、年内にレコーディングが始まるか分からないけど、津山のTHE RUSTEDのEPも」

■じゃあ、Chiroさんの方から最後に、森下さんに一言お願いします。

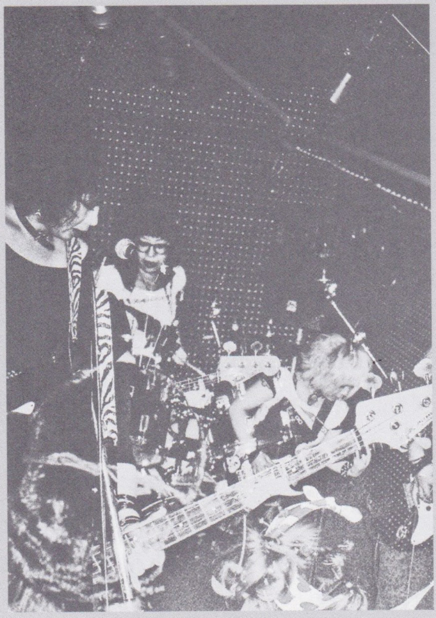
C「いやらしい目で見ないでください(笑)」

■この発言を削除したら言論弾圧ですからね(笑)。

M「やめてくれよそれは〜。結局こういうオチかよ(笑)」



UNARM



UNSKILLED LAB



MOONSCAPE



UNFADED

奈良県発のネオ・クラスト・バンド、UNFADEDが初音源となる「漆黒」EP(3曲入りCD)を自主でリリースしています。
僕は予備知識なく、なんとはなしにレコード屋さんで購入し聴いてみたのですが、パワフルなジャパニーズ・ハードコアと悲哀の旋律が交差する叙情性に充ち満ちた楽曲、そして、「戦争の愚かさ」を切々と訴えかけてくるその真摯なヴォーカル・スタイルに、大変胸を打たれたのでした。本インタヴューでも、"「ネオ・クラスト」をやりたいと思ったんじゃなくて、自分達がやろうとしていた音楽が「ネオ・クラスト」というカテゴライズで腑に落ちた"と語られているように、特定のスタイルをなぞるのではなく、必然的に行き着いたサウンドだからこその説得力と誠実さが、この作品からは滲み出ているように感じられるのです。
…というわけで、メールでインタヴューのオファーを出してみたところ、ギター・ヴォーカルの鈴木さんが丁寧な回答を寄せてくれました！UNFADED、今後も要注目のバンドです！

■結成は2007年のようですが、結成に至るまでの経緯やキッカケ、あと、もしUNFADED以前にもバンドをされていたら、そのバンドについても聞かせてください。

「UNFADEDの前は、1997年に今のドラムと九七式重戦車というCORRUPTEDやNOOTHGRUSHみたいなスラッジ・バンドをやっていました。そのバンドが1999年に解散して、しばらくバンド活動からも離れていました。スラッジは好きなんですけど、個人的にはNEUROSISみたいな荘厳なヘヴィー・ロックであったり、もっとエモやオルタナのような叙情的なロックがやりたくて、悶々としていました。そんな時に今のドラムとエモ・バンドをやり始めたんですけど、ベースが辞めてすぐに解散したんですね。それが2005年ぐらいだと思います。そこから今のベースの藤川くんと出会うんですけど、彼は生粋のパンクスで、ハードコア・パンクやクラストも大好きで、意気投合して一緒に新しいバンドをやろうってことになったんです。はじめはハードコアというより前のバンドのエモ色を引きずったバンドだったんですけど、徐々にハードコア・パンクに振り切れていきます。変化の理由はまず、当時まだ歌っていたんですけど(笑)、自分で気持ち悪くなって歌うのを止めたんです。その時、やっぱり自分はグロウルしか無理やな、ハードコアしかないなと気付きました。ベースの藤川くんの影響も大きいです。当時、よくジャパニーズ・ハードコア・パンクの話で意気投合していて、特にPAINTBOXや鉄アレイ、TRAGEDYなど3人ともめっちゃ影響されてましたから。だから藤川くんとの出会いが結構大きかったと思います」

■HPを拝見すると、「2011年以降、サウンド・スタイルがより自由に、オルタナティヴに、そしてエモーティヴなものへと変化していった」ということが英語で書かれていますが、2011年から現在のネオ・クラスト的なサウンドになったということでしょうか?それまでは全く異なるサウンドだったのですか?

「そうですね。2011年頃から今みたいなスタイルに変わりました。元々サウンドはエモ色の強いオルタナ・ヘヴィー・ロックみたいな音から始まって、そこから加速してジャパニーズ・ハードコア・パンクに振り切れていきます。それが2011年頃です。で、ふと我に返って、僕はゴリゴリのハードコア・パンクがめっちゃ好きなんですけど、オルタナやエモの影響を隠したくなかったんですね。なんか自分に嘘ついてるみたいで嫌だったんです。だからその辺で、ジャパニーズ・ハードコアやクラストにどうオルタナやエモや激情ハードコアなどの要素を融合するのかというところで悩んでいました。そんな時に3LAから出たSL'S3の復刻版を聴いたんです。すごく励まされました。なんかジャパニーズ・ハードコア・パンクもクラストも、エモも、激情も、オルタナも自分の思うままにやったらいいんやって気付かされたんです。ありのままでいいって気持ちが楽になりました。それまで実はネオ・クラスト・シーンも知らなかったんです。EKKAIAもICTUSも。改めて、「あっ、自分らのやりたいのはこれやな」って思いました。不思議なんですけど、「ネオ・クラスト」をやりたいと思ったんじゃなくて、自分達がやろうとしていた音楽が「ネオ・クラスト」というカテゴライズで腑に落ちたという感じです。そこからはネオ・クラストという文脈も取り入れながら、更に自由な新しいハードコア・パンクという、目指す音も明確になってきました」

■ネオ・クラストをやろうとしたのではなく、

やろうとしていた音楽がネオ・クラストだった、というのは面白いですね。「オルタナやエモの影響を隠したくなかった」と仰っていますが、鈴木さんのバックグラウンドにあるオルタナやエモというのはどういったバンドになりますか?ENVYからの影響もあるのかな?と思ったのですが…。

「ENVYの影響はかなりあると思います。BLIND JUSTICEから名前が変わった初期から中期まではかなり聴いてましたから。オルタナの影響は特にこれというバンドを挙げるのは難しいですが、SMILEってアメリカのグランジ・バンドやWIPERS、それこそNIRVANAやSONIC YOUTHとかですね。高校時代からもろにオルタナの洗礼を受けてるので挙げたらきりないですね(笑)。高校時代から、オルタナの「弱さ」「脆さ」に惹かれてて、同時にハードコアの「強さ」にも惹かれていました」

■ネオ・クラストというと、日本の場合は無我とかがいて、その後にENSLAVEやREALIZEDが出てきて、現在はsekien〜KUGURIDO、VERTRAFT、そしてUNFADEDがいるというのが、大雑把な流れかな?と個人的には思っているのですが、上記のバンドを聴いていたり、刺激を受けたりといったことはありますか?

「うちのベースは、無我を昔から聴いてましたが、僕は最近になるまで国内のネオ・クラスト・バンドはほとんど知りませんでした。sekienだけは2013年のデモを出したときから知ってて、「似たようなことを考えているバンドがいる」と常に気になっていました。先ほどの話とかぶりますが、僕らは「ネオ・クラスト」という言葉すら2014年まで知らなくて、SL'S3の復刻版が出たとき初めてネオ・クラストという言葉を知り、ネオ・クラスト・シーンを知ったんです。SL'S3のサウンドには、長年悩んでいたことの解答が在りました。だから物凄くリスペクトしていますが、実のところあまり国内のネオ・クラスト・バンドには影響はされていないと思います。どちらかと言うと、国内のジャパニーズ・ハードコア・パンクやTRAGEDYとかの影響が強いかもです」

■もちろんジャパニーズ・ハードコア・パンク・バンドからの影響も強いかと思いますが、国内外問わず、「このバンドのこんなところに影響を受けた」というのを挙げて頂けますか?

「ジャパニーズ・ハードコア・パンクの影響はめちゃ大きいです。ネオ・クラストよりそっちの影響の方が大やと思います。まずPAINTBOXとDEATHSIDEとCRUDEですね。ハードコア・パンクの可能性を広げたという意味で僕の中でネオ・クラストと同一線上にあります。PAINTBOXのどこかのインタヴューで書いてあったと思うんですけど、周りがハードコア・パンクはもうこれ以上進化しないみたいな風潮の中で、いやまだまだハードコア・パンクには進化する可能性があるって言っていて、ほんまその通りやと思いました。ミクスチャーではない異ジャンルとの融合であったり、ハードコア・パンクの激しさはそのままにどこまで繊細な叙情性を入れるかであったり、プログレ的な構成であったり。それと、鉄アレイですね。鉄アレイはとにかく歌詞です。歌詞が心に刺さったとき、曲調がどうでもよくなるというか、ロックに対して思っていた「娯楽性」が吹き飛んで、これは人生そのものなんだと気付かされました。そのくらい歌詞の力に圧倒されたんです。これがハードコアだと思いました。海外では、NEUROSISが大好きです。彼らの民族音楽や環境音楽のような非ロックにまでジャンルの壁を越えた壮大なエクストリーム・ミュージックは自分はできへんなと圧倒されつつもかなり影響されている気がします。TRAGEDY、FROM ASHES RISEは純粋に格好いいから好きです。あとWIPERSの内省的な暗く沈んでいくようなパンク・サウンドも影響されてます。それと、元々スラッシュやデスメタルも大好きなんですが、特にDISSECTIONにインスパイアされたところもあります。曲の中に過密に旋律を織り込んでいく表現にとても神秘性や永遠性を感じるところがあって多少曲作りに影響されてると思います」

■影響源としてHIS HERO IS GONEの名前は挙がってくるかな?と勝手に推測していたのですが、HHIGについてはいかがですか?「そんなには…」という感じでしょうか?

「HHIGめっちゃ好きです。当時「Monument To Thieves」をめっちゃ聴いてたし、来日も見に行きましたし。最近はあまり聴いてないですけど、体に染み付いていると思います。ただ、TRAGEDYの「Vengeance」の方が影響は大きいかもしれません。その時、日本ツアー記念盤に歌詞の対訳がついていてちょうど9.11の翌年だったのもあって、歌詞がとても印象に残っているからです」

■歌詞についてもお聞きしたいのですが、ブログに書かれていた、「いつの頃か自分のことを歌うのをやめようと思って"ある人々の歴史"を歌うようになりました。でも、よく考えるとそれも自分の事を歌っているのと同じだなと気付きました」という文章がとても印象深くて心に響いてきました。「漆黒」EPに収録されている同タイトル曲は沖縄戦をテーマに、「TSUBASA」は神風特攻隊だった方の著作から影響を受けているようですね。ここで改めて、「漆黒」に収録されている3曲について、歌詞やその背景を聞かせてもらえますか?

「ありがとうございます。「漆黒」は元ひめゆり学徒隊の宮城喜久子さんのインタヴューにあった「ガマの中は漆黒の闇でした」という言葉からそのタイトルをつけました。戦場で多くの同級生の死を見てきた宮城さんの「生き延



びてしまった後悔」と語り部としての使命感を歌にしています。「TSUBASA」は元神風特攻隊の角田和男さんの「修羅の翼」を読んで作ったんですけど、先ほどの宮城さんと同じように、戦争を生き延びた方々は、自分だけ生き延びてしまったという自責の念を抱きながら、残りの人生を遺族のため、平和のため、慰霊のために捧げられました。大切な人の死に立ち会い、なぜ自分は生き延びたのか?何のために生き延びたのか?そのような心の境地にとても感じるものがあって、単なる「反戦」ではなくてそっちの方が自分にとってはリアリティがあって、生き延びた人々の使命について歌にしました。僕らは、曲を通して「戦争の愚かさ」を伝えたいと思っています。そして、実際に戦争を知る方々が亡くなられている現実があって、過去を風化させないために、戦争を知る方々の話をできるだけ多くの人々に知ってほしいという想いがあって、この曲を聴いて少しでも彼らの物語に興味をもってほしいと願っています。最後の「The same scars」はめっちゃ古い曲で、プライベートな曲です。ただ、「漆黒」と「TSUBASA」と底に流れるものは似ていて、身近な人を失い残された者が、亡くなった人を想い、その意志を継ぐことを歌い、その魂に向けてのメッセージを歌っています。そして、「人間の可能性」「人間の使命」についても歌っています。人はどんなに苦しい現実にあっても乗り越えていけるというメッセージと、なぜこんな今にも消えそうな世界で人は争いを繰り返すのかという疑問を歌にしています。自分のそのような想いと「ある人々の歴史」を語ることは全部繋がっていると、後からですが分かりました」

■アナーコ/ポリティカル系のハードコア・バンドとUNFADEDのメッセージが一線を画しているのは、前者が思想としての「反戦」を歌うのに対して、UNFADEDは事実としての「戦争の愚かさ」を歌っているからかな、とも感じました(もちろん、どちらが良いとか悪いとかではないのですが)。「漆黒」に収録されている3曲についてお答え頂きましたが、それ以外のUNFADEDの曲の歌詞というのは、どんなことを歌われているのでしょうか?

「なるほど。山路さんの仰る通りかもしれません。どちらが良いとか悪いとかではないですよね。僕にとっては、直感的に、「戦争」は俯瞰して語ることはできないと思いました。じゃあどうするかって考えたとき、戦争を体験された人々の事実としての主観をそのまま歌にしようと思いました。意図的にそうしたという訳でもなく、自分にとってはその方が自然だったという感じです。最近作った曲は全て「ある人々の自伝」をモチーフに歌っています。元海兵隊ユージン・スレッジ氏の「ペリリュー・沖縄戦記」や、原民喜氏の「夏の花」を題材にしたもの、ニューギニア戦線を体験された飯田進さんの著作から影響を受けて書いた曲などです。それぞれに共通しているのは、「漆黒」「TSUBASA」と同様に、「事実としての戦争を生き延びた人々の後悔と使命感」について歌っています。もっと古い曲は、個人的な想いを綴った抽象的なものが多いですね。例えば、誰かの意志を継ぐことを歌った曲や、どんなに孤独な道を選んでも己の道を進んでいく、未知なる旅を続けていくという歌などがあります」

■ブログを拝見すると、歴史や戦争についてとても造詣が深いように感じたのですが、元々興味があったのですか?それとも、パンクやハードコアを聴くようになってから、興味を抱くようになったのでしょうか?

「改めてそう尋ねられて気が付きましたが、ハードコアに影響されたことがきっかけになっているかもしれません。最初のバンドをやったときに、思想的な部分を凄く考えたからです。ハードコア・パンクは単なる娯楽としての音楽ではない、それは人生そのものだったり、社会へのメッセージ性が強い政治的な要素があります。若い頃、それについて考え続けた時代がありました。そこから来ているかもしれません。それと、仕事柄、子どもと関わることが多いんですけど、子どもたちに戦争がどういうものか伝えたいという気持ちがあります。それはUNFADEDを始動させてから強く思うようになりました」

■ちなみに、「漆黒」がUNFADEDの初音源になりますか?また、「漆黒」のジャケットに使われているのは何の写真でしょうか?「塹壕跡の中から外を撮影した写真かな?」とも思ったのですが…。

「「漆黒」が初音源です。ずっと作ろう作ろうと思いながら作れませんでした。あの写真は、実はドラムが撮ってくれた廃トンネルなんです。ジャケットのイメージを洞窟の中から外の入り口を見た絵か写真にしたいと伝えたら撮ってきてくれました」

■「ずっと作ろう作ろうと思いながら作れませんでした」というのは、音源として納得できる楽曲になるまで時間がかかった、ということですか?それとも、お仕事などが忙しくて制作時間がとれなかったからでしょうか?

「両方ですね(笑)。仕事がみんな忙しいのもあってなかなかレコーディングができなかったんですけど、同時に「漆黒」EPに至るまで、まだ自分達の音に確信が持てなかったところもありました。やっとできたという感覚はあるのですが、このタイミングがベストだったと思います。あと、エンジニアのフクダスタジオの間所さんとの出会いもめちゃくちゃ大きいです。間所さんにほぼミックスは自由にお任せしたんですが、僕らのイメージ以上のものになりました」

■初音源を出したばかりなので気が早いかもしれませんが、新しい音源の予定や、何かバンドとして計画していることはありますか?

「今まで作った曲をきちんと音源にしたいので、今年中に次の音源を出したいです。できれば5曲入りミニ・アルバムがいいですね。あとは無理せずマイペースに地道に活動できたらいいですね。そして、一人でも多くの人に曲を届けて、一人でも多くの人に「これは何の歌なんだろう?」と興味を持ってもらえると嬉しいです」

■UNFADEDとサウンドの方向性は異なりますが、奈良のハードコアというと今でもTHE BLASTの印象が個人的には強いです。バンド活動をする上で、影響を受けたりはしましたか?

「THE BLASTは、大好きなバンドです。残念ながら今活動を休止しているんですけど、4年前からイヴェントに参加させてもらったり、凄くお世話になっていて、サウンドもめっちゃ好きなんですが、特に「言いたいことは言う」「真っ直ぐに生きていく」というアティチュードの面でリスペクトしています」

■現在の奈良にはハードコアやパンク・バンドは結構いるのでしょうか?どんなバンドと共演することが多いですか?

「THE BLASTが少し前に活動を休止し、パンク・バンドのピストルシャウツ、メタル・コアのSPIRITUAL GARDENなど奈良を代表するバンドが次々に活動を止めてしまい、奈良のシーンを牽引するバンドがほとんどいなくなっているのが現状だと思います。奈良のパンク・バンドやハードコア・バンドはほとんどが大阪に出て行く現実があって、パンクやハードコアをやるバンド自体も少ないです。僕らもあまり精力的に活動できていないので偉そうに奈良のハードコア・シーンのことを語れないですが、それでもわりと一緒にやらしてもらっているバンドでデマンダがいます。スターリン meets GODFLESHみたいな曲をやってて衝撃を受けた面白いバンドです。日本の80sパンクの匂いが物凄いする稀有なバンドでリスペクトしてます」

■それでは最後に、UNFADEDというバンド名に込めた想いを聞かせてください。

「今まで幾つかバンドをやってきましたが、初めてバンド名に希望を託そうという想いから「不滅」「消えることのない」という意味でUNFADEDにしました。大切な誰かの意志を受け継ぐことであったり、この音楽が永遠に消えることなく心に残るものであってほしいという希望を託しています」

LASHING SPEED DEMONS VOL.26

BLACK SABBATH

本誌前号ではAMEBIXを取り上げて、BLACK SABBATHからの影響についても考察しましたが、そこから続く形で今度はBLACK SABBATH本体に行ってみましょう。BLACK SABBATHについては以前DOLLでも取り上げているが、それも10年以上前の話。今のEL ZINEで改めて取り上げることは、それなりに(というかそれなり以上に)意義があるのではと思う。前号と多少重複するところもあるかも知れませんが、今回もよろしくお付き合いください。

TEXT:大越よしはる

イングランドのバーミンガムでBLACK SABBATHの前身バンド・EARTHが結成されたのは、1968年のことだった。メンバーは"オジー・オズボーン"(ヴォーカル)ことジョン・マイケル・オズボーン、トニー・アイオミ(ギター)、"ギーザー・バトラー"(ベース)ことテレンス・マイケル・ジョセフ・バトラー、"ビル・ワード"(ドラム)ことウィリアム・トーマス・ワードの4人。バンドはその後ホラー映画のタイトルからいただいたBLACK SABBATHという名に改める。

BLACK SABBATHのサウンドを考察する上で、彼らの出身地が工業都市バーミンガムだったことはかなり大きいと思う。工場労働者がひしめく街で鬱屈する若い連中がヘヴィなサウンドを奏で始める…というのは、他の工業都市でも見られたことだ。アメリカでデトロイトからTHE STOOGESやMC5が登場したのも、クリーヴランドからPERE UBU周辺のバンド群(DEAD BOYS含む)が登場したのも然り。バーミンガムからは、BLACK SABBATHと並んでヘヴィ・メタルの祖となったJUDAS PRIESTも生まれている。

BLACK SABBATHのルーツにはR&Rとブルーズがあったが、一方でジャズのエッセンスも少なからずあった。そしてサイケデリックの尻尾も引きずりながら、バンドは独自のグルーヴを追及して行くのだった。更にイメージ戦略として、悪魔主義的なおどろおどろしさも前面に押し出されることになる。

同時期のイギリスにはBLACK WIDOW、BLACK CAT BONESと、"BLACKなんとか"というバンドが他にもいて、BLACK SABBATHを含めて"三大黒魔術バンド"的に言われることもあったが、悪魔崇拝的なステージを見せる一方で音楽的にはフォーキーな部分もあったBLACK WIDOW、音楽性自体はオーソドックスなブルーズ・ロックに近くアルバム・ジャケット以外には怪奇的な部分は薄かったBLACK CAT BONES(初期はFREEのポール・コゾフが参加していた)に対して、BLACK SABBATHが追及して行ったのはサウンドそのものの暗黒性とヘヴィネスだった。

そう、黒魔術的なイメージの強かったBLACK SABBATHだが、それはあくまで雰囲気づくりに過ぎず、実際には歌詞を見ても悪魔崇拝っぽい要素はほぼ皆無だった(代表曲のひとつ「Black Sabbath」の歌詞を見ても、"Please God help me!"と神に救いを求めている)。もっとも彼らのイメージ戦略は大当たりで、結果的にその後多くの誤解も生んで行くのだが。

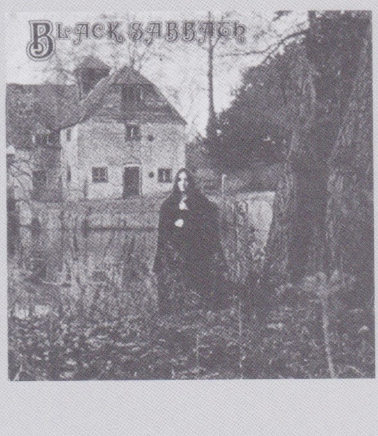
ともあれバンドはフィリップス・レコーズとの契約を得て、1970年2月13日(13日の金曜日だった!)に1stアルバム『BLACK SABBATH』(黒い安息日)をリリースする。そこで聴けるタイトル曲の、当時としては極端なまでの遅さと重さ…それはまさに"ドゥーム・ロック"誕生の瞬間だった(もちろん当時そんなジャンル分けは存在しなかったが)。

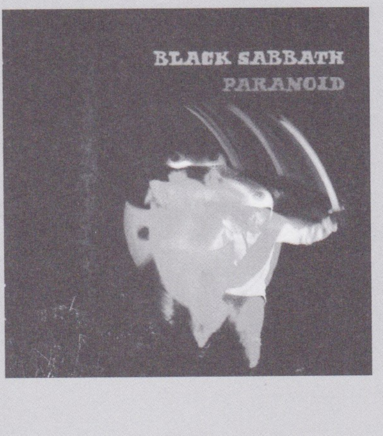
特異なヴィブラートのかかったヘヴィなリフと神経に触るソロで迫りくるトニー・アイオミのギター、何かにとり憑かれたような病的なアクションで低音弦を震わせまくるギーザー・バトラーのベース、独特のタイム感で重々しく打ち込まれるビル・ワードのドラム、そして一度聴いたら忘れられない奇妙な声質で暗黒の詠唱を聴かせるオジー・オズボーンのヴォーカル。この時点ではブルーズやジャズの根っこをそのままに見せる部分もあったりカヴァー曲も収録されていたりと、いまだ未成熟な部分も見え隠れしているが、それでもそのサウンドのオリジナリティは際立っていた。

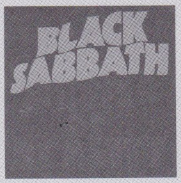
そのダークでヘヴィな音楽性にも関わらず、BLACK SABBATHは人気を得た。『BLACK SABBATH』は全英チャートで9位を記録し、バンドは間髪入れず2ndアルバムのレコーディングに入る。

BLACK SABBATHの2ndアルバム『PARANOID』は、デビュー・アルバムから半年余りという短いスパンで、1970年9月にリリースされた。元々はA面1曲目の「War Pigs」がアルバム・タイトルに予定されていたが変更となり、アルバム・タイトルとジャケットのデザインはややちぐはぐな感じとなったが、結果オーライというか…シングル「Paranoid」が全英チャート5位の大ヒットとなったばかりか、アルバムは全英チャート1位、全米チャート10位となり、BLACK SABBATHは陰鬱なサウンドを聴かせながらも大人気となったのだった。

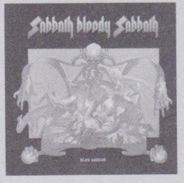
そして『PARANOID』のヒットで、バンドはアメリカをツアーする機会を得る。本国イギリスではTV番組「Top Of The Pops」に出演してお茶の間にも露出し、バンドの人気は更に高まって行くことに。

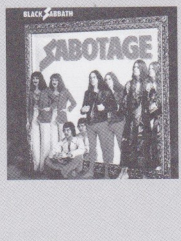


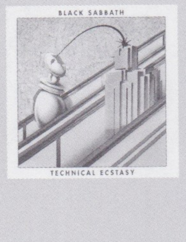














1970年、サイケデリックの時代は既に終わっていた(HAWKWINDのような例外もあったものの)。音楽シーンの中核はハード・ロックとプログレッシヴ・ロックに移りつつあった。新たに勃興したハード・ロックの旗頭のひとつだったBLACK SABBATHだったが、一方でBLACK SABBATHはDEEP PURPLEともLED ZEPPELINともURIAH HEEPとも明らかに違っていた。

BLACK SABBATHを模範のひとつとしてアメリカでヘヴィ・メタル・サウンドを築き上げたBLUE ÖYSTER CULT…のマネージャー/プロデューサーだった故サンディ・パールマン(THE CLASHの2ndアルバムもプロデュースしている)は、かつて"ヘヴィ・メタル"を"精神の歪みの部分を表現した音"と定義したが、そんな音は音楽産業がどんどん肥大しつつあったこの時代に、シーンの何処かで確実に求められていたのだ。ハード・ロックの多くは暴力的なヴォリュームと激しいサウンドで聴き手の衝動に訴えたが、BLACK SABBATHが持っていた一種病的とも言える感覚は、また格別のモノがあった。

そしてBLACK SABBATHは1971年7月、再び前作から1年未満のペースで3rdアルバム『MASTER OF REALITY』をリリースする。「Sweet Leaf」「Children Of The Grave」といった代表曲を含み、全英5位、全米8位のヒットとなった。デビュー当時からヨーロッパでも人気の高かったBLACK SABBATHだったが、このアルバム以降はヨーロッパでヘッドライナーとしてライヴを行なうようになる。

このアルバムから、トニー・アイオミはギターのチューニングを1音半下げるようになっている。元々は、事故のために右手の中指と薬指の先端が欠損していたトニーが弦を押さえやすくするための工夫のひとつだったらしいが、結果としてBLACK SABBATHのリフは更に引きずりまくるヘヴィネスを増して行った。『BLACK SABBATH』で産声を上げた元祖ドゥーム・ロック的なサウンドは、『MASTER OF REALITY』の時点で完成を見たと言っていいと思う。このアルバムをBLACK SABBATHの最高傑作とする声も多い。

1972年9月、バンドは4thアルバム『VOL.4』をリリース。それまでにもバラード風(?)の曲を演ってきたBLACK SABBATHだったが、このアルバムではピアノとメロトロンをフィーチュアしていかにもバラード然とした「Changes」が収録され、バンドが音楽性の幅を広げつつあることを感じさせる。一方で「Wheels Of Confusion」や「Supernaut」をはじめとしてヘヴィネスや尖ったリフもたんまりと。全英8位、全米13位と、このアルバムもヒットした。

半面、バンド内部にはドラッグが蔓延しつつあった。『MASTER OF REALITY』冒頭を飾る「Sweet Leaf」は明らかにマリワナを賛美したモノだったが、『VOL.4』収録の「Snowblind」はコカインのことを歌っている。成功を満喫していた当時のBLACK SABBATHだったが、そのR&Rライフは綱渡り状態だったとも言える。

1973年12月には5thアルバム『SABBATH BLOODY SABBATH』(血まみれの安息日)がリリースされる。当時YESのメンバーだったリック・ウェイクマンがキーボードでゲスト参加した他、バンドのメンバーたちもそれぞれキーボードを弾き、曲によってはストリングスもフィーチュアし、トニー・アイオミのアコースティック・ギターによる美しいインストゥルメンタル「Fluff」も収録され…といった具合で、音楽性の幅は更に広がっている。一方、タイトル曲や「Killing Yourself To Live」など従来路線の名曲も含みつつ、ヘヴィネスはやや減退した感がある。それでも全英4位、全米11位と、バンドは安定した人気を保っていた。

しかしこの頃、ドラッグとアルコールはメンバーを更に蝕み、更にバンド内の人間関係も悪化してきていた。『SABBATH BLOODY SABBATH』タイトル曲には当時制作されたプロモーション・フィルムが存在するが、そこで見られるメンバーたちの目つきはかなり怪しげだ。

そして前作から2年近く空いた1975年9月、バンドは6thアルバム『SABOTAGE』をリリース。キーボーディストのジェラルド・ウッドラフが録音に参加し、スタジオで時間をかけた緻密な音作りの結果として、全体に音が丸くなったなどと言われることもあるアルバムだが、個人的にはあまりそうとも思わない。狂騒的な「Hole In The Sky」、バンド史上でも屈指のスピード・ナンバー「Symptom Of The Universe」をはじめとして、とげとげしいリフで押すハードな曲も多く収録されている。

一方で『SABOTAGE』は全英チャートでは7位だったものの全米チャートでは28位と、バンドの人気には陰りが見え始めていた。75年…SEX PISTOLSが結成された年だ。若い野郎どもの衝動に訴え続けてきたハード・ロック勢も今やエスタブリッシュメントの位置に近付きつつあり、世代交代の足音が聞こえ始めていた。

1976年10月には再びジェラルド・ウッドラフが参加した7thアルバム『TECHNICAL ECSTACY』をリリースする。プロデュースはバンド名義となっているが、実質的にはトニー・アイオミによるモノだった。アメリカナイズされた楽曲があるかと思えばドラマティックな大曲もありと多彩な一方で、従来のBLACK SABBATHらしさが明らかに後退した1枚となっていた。全英13位、全米51位と、チャートでもこれまでになく順位を落とすこととなる。一方でイギリスではパンクが勃興し、シーンは変容しつつあった。

『SABBATH BLOODY SABBATH』以降のBLACK SABBATHが創造性の面で苦しみ始めていたことは『SABOTAGE』リリースまでに間隔が開いたことでも明らかだったが、バンド内の人間関係も限界に達しつつあった。結局77年11月、メンバーの中でもアルコール依存がひどいことになっていたオジー・オズボーンが解雇される。

BLACK SABBATHは新しいヴォーカリストとしてデイヴ・ウォーカー(元SAVOY BROWN)を迎えるが上手く行かず、早くも1978年1月にはオジー・オズボーンを復帰させ、78年10月に8thアルバム『NEVER SAY DIE』をリリースする。ここではCOLOSSEUM IIのドン・エイリーがキーボードを弾いている。バンド復活を宣言するようなタイトルのアルバムだったが出来は今ひとつで、全英12位、全米チャートでは更に順位を落として69位に終わっている。

『NEVER SAY DIE』リリース後、バンドはツアーに出るが、結局オジーは再び脱退し、ソロ活動に入る。そしてオジーがBLACK SABBATHに復帰するのは20年近く後のことだった。

ここからは駆け足になるが、以後のBLACK SABBATHはメンバーを入れ替えながらトニー・アイオミが牽引して行くことになる。オジー・オズボーンの後任には元RAINBOWの故ロニー・ジェイムズ・ディオが参加し、アルバム『HEAVEN AND HELL』(1980年)をリリース。ロニーが持ち込んだ一種の"様式美"でバンドは新生面を見せ、New Wave Of British Heavy Metalの盛り上がりも追い風となって全英9位、全米28位と勢いを取り戻す。その後ビル・ワードが脱退すると、新ドラマーにヴィニー・アピスを迎えて『MOB RULES』(81年:悪魔の掟、全英12位・全米29位)、ライヴ盤『LIVE EVIL』(82年:全英13位、全米37位)をリリースする。

82年にはロニーとヴィニーが脱退してDIOを結成。バンドはビル・ワードを復帰させると共に元DEEP PURPLE～GILLANのイアン・ギ

ラン(ヴォーカル)を迎えるという驚異の(?)メンバー補充で83年にアルバム『BORN　AGAIN』(悪魔の落とし子:全英4位・全米39位)をリリースする。オジー・オズボーン在籍時に揺り戻したようなおどろおどろしいサウンドにイアンの超絶シャウトは予想外にマッチしていたが、このラインナップは長続きしなかった。

その後ビル・ワードもイアン・ギラン(DEEP PURPLEを再結成)もギーザー・バトラーも相次いでバンドを離れ、BLACK　SABBATHは一時期解散に近い状態となる。しかしレコード会社にとってBLACK SABBATHという名前はまだまだ"金の成る木"で、トニー・アイオミがグレン・ヒューズ(ヴォーカル:元DEEP　PURPLE)を迎えて制作したソロ・アルバムは1986年に"BLACK SABBATH featuring TONY IOMMI"名義で『SEVENTH STAR』としてリリースされる。

87年にトニー・マーティン(ヴォーカル)を迎え、とりあえずバンドとして再興したBLACK　SABBATHは、チャート・アクションとは無縁ながらも地道に活動していた。一時期は元RAINBOW〜THE MICHAEL SCHENKER GROUP他のコージー・パウエル(ドラム)や元WHITESNAKE他のニール・マーレイ(ベース)といった名のあるプレイヤーも在籍し、バンドはとりあえず健在ぶりをアピールし続けていた。

トニー・マーティンは、いわゆるシンガーとして見ればオジー・オズボーンよりも圧倒的に高い歌唱力を持っていたし、当時のバンド自体もロニー・ジェイムズ・ディオ在籍時を引き継ぐようなかなりクォリティの高いヘヴィ・メタルを演ってはいた。しかし残念ながらトニーには、オジーやロニーのようなカリスマ性は欠けていた。名手をそろえながらも、ファンがBLACK　SABBATHに求めていた、技術を超越するような何か…がこの頃のバンドには希薄だったと言える。

一方で80年代以降、かつては基本的にハード・ロック/ヘヴィ・メタルのサークル内だけで評価されていたオジー・オズボーン在籍時のBLACK　SABBATHに、新たな側面から光が当てられるようになる。前号で紹介したAMEBIXはもちろんのこと、BLACK　FLAGなど一部のハードコア勢がBLACK　SABBATHからの影響を前面に押し出すようになるのだった。AMEBIXのサウンドは、前号でも書いたとおり"必ずしもスピードに走らない"という印象が強かったが、BLACK　FLAGがアルバム『MY WAR』(1983年)のB面で聴かせたサウンドははっきり"遅い"と言い切れるもので、当時多くのファンに(良くも悪くも)衝撃を与えた(個人的にも80年代にはちょっと理解出来なかったが、後にBLACK SABBATHの影響云々というのを聞いて初めて納得出来たモノだった)。

80年代半ばにはDOCTOR & THE MEDICS(THE DAMNEDとも付き合いがあった)やTHE　UNDERNEATH(ダニエル・ダックスとLEMON　KITTENSをやっていたカール・ブレイクのユニット)など、パンク/ニュー・ウェイヴに端を発してネオ・サイケにアプローチしていたバンドたちが直接BLACK　SABBATHをカヴァーするようになった。そしてDISCHARGEやENGLISH　DOGSといったハードコア・バンドによる大胆なハード・ロック/ヘヴィ・メタル的アプローチ。ハードコアというエクストリームな音楽を演る上で、彼らの音楽的嗜好の根っこに実はBLACK　SABBATHやJUDAS　PRIESTといったヘヴィ・メタルのオリジネイターの存在があったことが明らかになって行く(もちろんすべてのハードコア・バンドがそうだったワケではないにしろ)。

何より決定的だったのは、NAPALM DEATHでグラインド・コアを演っていたリー・ドリアンが1989年にCATHEDRALを結成したことだろう。CATHEDRALのサウンドはNAPALM　DEATHとは似ても似つかない、超絶に重くてとんでもなく遅いモノで、ここに至ってジャンルとしての"ドゥーム・ロック"が確立すると共に、ラウドでエクストリームな音楽のルーツとしてのBLACK SABBATHの存在が再認識されたのだった。

アメリカでもシアトルのCOFFIN BREAKが「Hole In The Sky」をカヴァーするなど、グランジ/オルターナティヴ系のバンド群へのBLACK SABBATHの影響は目に見えやすいモノとなっていた。NIRVANAの故カート・コベインがBLACK　SABBATHへのリスペクトを表明していたことも大きかったと思う。以後、オルターナティヴ系のバンド群によるBLACK　SABBATHのトリビュート・アルバムがリリースされるようになったりもする。

そんな状況を知ってか知らずか…本家BLACK　SABBATHの方はグランジ全盛の時期にわざわざロニー・ジェイムズ・ディオを復活させてみたり、トニー・マーティンを呼び戻して制作したアルバムにラッパーのアイス・Tを参加させて評判を下げてみたりと、煮え切らない状況が続いていた。しかし1997年、遂にオジー・オズボーンとビル・ワードを含むオリジナル・メンバーでの再編が実現。この時点でBLACK　SABBATH＝エクストリーム・ロックの元祖という認知はあまねく確立していて、バンドは新旧のファンから大歓迎で受け入れられることになる。

しかし復活したBLACK SABBATHはライヴこそこなしていたものの新作を作ることもなく、結局2006年に活動を停止。トニー・アイオミとギーザー・バトラーは再びロニーとヴィニー・アピスを呼び戻し、HEAVEN　AND　HELL名義でロニーが亡くなる10年まで活動を続ける(97年にオリジナル編成が復活した時点で、オジー以外が歌う編成ではBLACK SABBATHを名乗らないことになっていた)。

ロニー・ジェイムズ・ディオの死後、2011年に改めてオリジナルBLACK　SABBATHの再始動が発表される。しかしビル・ワードはすぐに離脱し、オジー・オズボーンのバンドで叩いていたトミー・クルフェトスがライヴでのサポートを務めることになる。

そしてバンドはブラッド・ウィルク(ドラム)を迎えてスタジオ入りし、13年には『NEVER　SAY　DIE』以来実に45年ぶりとなるオジー入りBLACK SABBATH(残念ながらオリジナル編成ではなかったものの)としてのアルバム『13』をリリース。このアルバムはBLACK　SABBATHにとって初めて全米1位を獲得したアルバムとなった(全英チャートでも1位)。

しかし16年、BLACK　SABBATHは最後のツアーを行なうことを発表。17年2月にバンドの出身地であるバーミンガムで最後のライヴを行ない、3月8日には解散を表明している。

ハードコアからドゥーム/ストーナー・ロックに舵を切ったバンドやミュージシャンは、GORILLA　ANGREB他のメンバーがやっていたMOONLESSをはじめ、EL　ZINE誌上でも幾つも紹介されてきた。そしてその流れは今でもよく見られることだ。最近の例では、かつて名古屋で速くて短いハードコアをやっていた響のメンバーが、今ではnibsで完全にBLACK SABBATHの影響下にあるドゥーム・ロックを追求しているということに驚かされた(彼らは奇しくもBLACK　SABBATHが解散を表明した3月8日に1stアルバムをリリースしている)。

時代毎のバンドの状況がどうあれ、BLACK SABBATHはそうしてヘヴィ・メタルからハードコアに至る様々なロックに影響を与え続けて来たし、それは今でも続いている。新譜と再発盤がフラットに聴かれる現在ではなおさらだ。今のドゥーム・ロック勢の多くはただBLACK SABBATHが好きでそのような音を出しているのではなく、パンクやハードコアを通過した上で敢えてのアプローチとしてBLACK　SABBATH的な音を出している。そこに、ある意味異端のまま普遍となったBLACK　SABBATHの偉大さを見る思いがする。

ES GIBT KEIN WERT

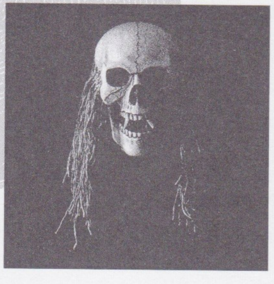
ハイ、ここ数年のうちにリリースされたパンク/ハードコア・バンドの音楽作品をディスク・レヴューさせて頂くコーナーです。紹介させて頂きたい音源のストックはまだまだあるので、今号で掲載できなかったブツは次号で取り上げさせて頂きます。
ハイ、もう他に書くことがありません(汗)。でもスペースが空いていると気持ち悪いので、何か書きますね。えーと、僕は早寝早起きなので21時に寝て3時に起きています。なので将来は豆腐屋になろうと思います。って、いい歳して将来も糞もないですね。Fuck The Future!

SEX VIRGIN KILLER/Vazinism



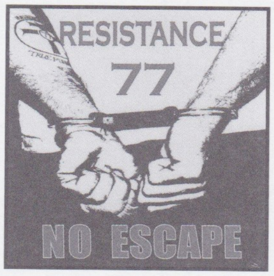
下北沢シェルターでのライヴで火を吹いていた勇姿を未だに覚えていますが(10年くらい前だったかな)、どこまでも甘美で退廃的、それでいて暴力性に充ちたこのサウンドは、ハードコアの出自だからこそなせる業(ワザ)か、それともこのバンドが背負いし業(カルマ)のせいか…。鋭利なナイフで愛撫するかのヴィジュアル・ショッキング・メタル・パンクに犯される、インモラルにして至高の1stアルバム!
(lilii sound loom　lilii-002)CD

WARTHOG/ST



kriegshögもロンドンで共演していた(前号のツアレポを参照してね)、現行NYのロウ・ハードコア・パンク筆頭:WARTHOGの3rdシングル!日本昭和のハードコアもどこか想起させる、不穏な空気に包まれた、タチの悪そうな音塊がたまらない!動きまくるベース・ラインにも痺れるぜ!アートワークはもちろんAlexander Heirが担当しているし、今のNYを追いかけている人にはマストな作品です!
(Beach Impediment Records　BIR024)7"

RESISTANCE 77/No Escape



前号でインタヴューさせてもらった大英帝国が誇るOi!パンク・バンド:R 77の最新アルバムを改めてご紹介。何はなくとも初期から不変の、Oddyのこの甲高いヴォーカル・スタイル!R 77の魅力の大半がココに詰まっていると言っても過言ではありません!そしてシンガロング・パートたっぷりのメロディアスな曲調も健在!金太郎飴状態だけどソレがイイ!ギネス片手に歌い倒したくなる一枚です。
(R27 Records　No Number)CD

MERCY KILLINGS/ST



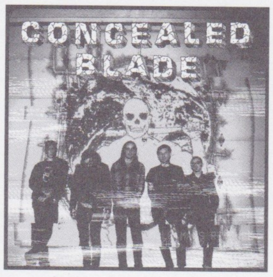
ex DIRECT CONTROL、WASTED TIMEのメンバーらによるリッチモンド産バンドの、2013年デビューEP。"これぞアメリカン・ハードコア!!"な、ハード・ヒッティングで熱気ムンムンの男汁が飛び散るスラッシュ・サウンドが暑苦しくてしょうがない(褒めています)。ガツンとしたのを喰らいたいときは、コイツを注入しておきましょう!ちょっと変わった厚紙に、モンスターが描かれたジャケットもクール!
(Beach Impediment Records　BIR009)7"

SPLIT/WARWOUND+WAR//PLAGUE



以前にデモ音源集がリリースされていたWARWOUNDが、VoにVARUKERSのRatを迎え新体制で復活(Baは「Burning Britain」などの著作で知られているIan Glasper)!これが地に足の着いたオールドスクールなDisコアで燻し銀の格好良さ!対するWAR//PLAGUEは90年代ミネアポリスの感覚を活かしたメタル・クラストでコチラも激渋!ベテランならではの味わい深き好スプリット!
(MCR Company　MCR287)CD

CONCEALED BLADE/ST



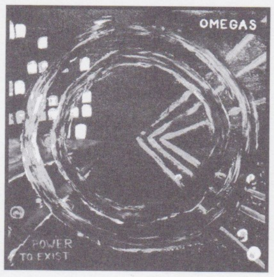
前述のMERCY KILLINGSとも通じるところがある、ピッツバーグの"タフガイ・サウンド"なハードコア・バンドの、今年リリースされた1stアルバム。メンバーは全然タフな感じじゃなくて優男なルックスなんですが、そんな見た目を見事に裏切るノン・ストップ&フル・スロットルの直下型ピュア・アングリー・ハードコア。イギリスのARMS RACEも頭を若干よぎったり。
(Beach Impediment Records　BIR025)LP

VIVISEKTIO/Mausoleumi



フィンランド最果ての地:アカスロンポロにて結成された80'sハードコア・バンド、VIVISEKTIO(vol.18～19にインタヴューを掲載)。2008年に再結成を果たした彼らですが、その2014年作がコチラ!スピードに頼らない、腰の据わったミドル・テンポのハード・パンクな楽曲(ちょっとダーク・ゴシックなテイストも)を2曲収録。男女ツインVoのバンドなんだけど、本作ではほぼ男性Voがメインなので、そこが若干残念であります。
(Kämäset Levyt Records　UKK069)7"

OMEGAS/Power To Exist



モントリオール発のバンドの2ndアルバム。伝統的なゴリゴリのNYHCがスノッティーに発狂したような…、自分でも何を言っているんだかサッパリ分からないほどに捻じれ曲がったユニークなHC。実写化した白人版ジャイアンみたいなVoも見た目は怖いくせに、声が妙に細くてツボに入りました。あちらのパンク・フェスには軒並み参加しているから、当地ではかなり人気があるバンドなのかもしれません。
(Beach Impediment Records　BIR020)LP

VIVISEKTIO/Ydintalvi



そしてコチラが2016年の暮れにリリースされた5曲入りの最新音盤。もう断然コッチのほうが格好良い!タガの外れた暴発レイジングFinnishハードコア・パンクで男女ツイン・ヴォーカルも強烈。やっぱりこのバンドは速いほうがイイね!メンバー曰く、タイトル曲のみポスト・パンク～アナーコ・パンクに感化されたようですが、昨今のバンド勢のようなスマートさが全然なくて、その野暮ったさもステキ。
(Kämäset Levyt/Papagájův Hlasatel/Hohnie/Roku etc)7"

VA/The New Wave Of The Grave New Beat Volume II



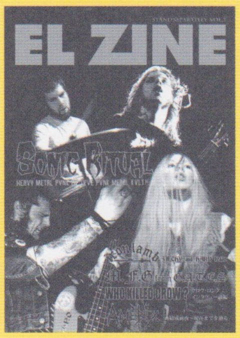
DISCHARGE影響下にあるバンドを集めたコンピ第2弾!やっぱりTHISCLOSE発信なだけあって、いわゆる"D-Beat"一辺倒ではないところが面白い。Wall Of NoiseなLIFELOCKに怪電波系ノイズのFINAL FUKKER、マンゲル・ノイズ・スラッシュで圧倒するLIFEに、MPDSを掲げるスピード・メタルなENTER OBSCURITY、そしてイーヴィルなメタル・パンクのINDIAN NIGHTMAREなどなど、17バンド24曲収録!
(Our Future Records　OF010)CD



VOL.0 : UTOPIA SOLD OUT!!



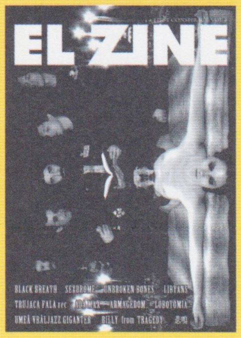
VOL.1 : MOONLESS SOLD OUT!!



VOL.2 : SONIC RITUAL SOLD OUT!!



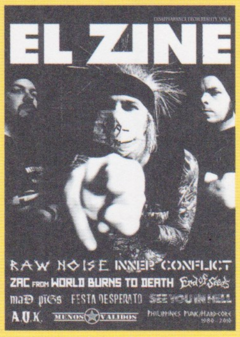
VOL.3 : KALASHNIKOV SOLD OUT!!



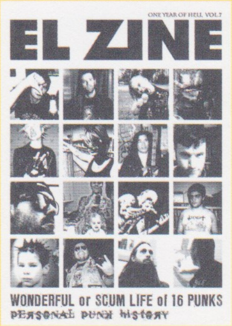
VOL.4 : BLACK BREATH



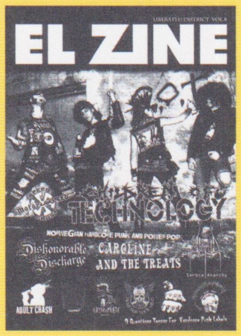
VOL.5 : RUIDOSA INMUNDICIA



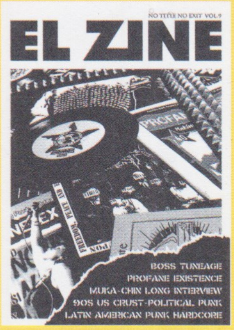
VOL.6 : RAW NOISE



VOL.7 : 16 PUNKS



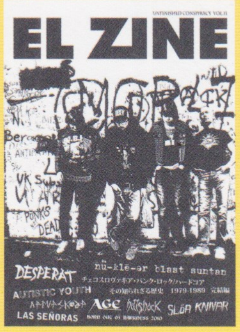
VOL.8 : CHILDREN OF TECHNOLOGY



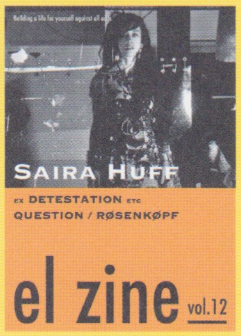
VOL.9 : 90S US CRUST



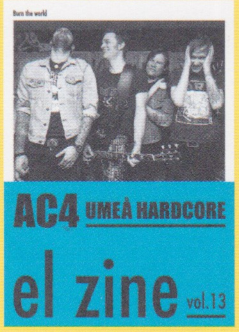
VOL.10 : KASKA DOGSTAILART



VOL.11 : DESPERAT



VOL.12 : SAIRA HUFF



VOL.13 : AC4 SOLD OUT!!



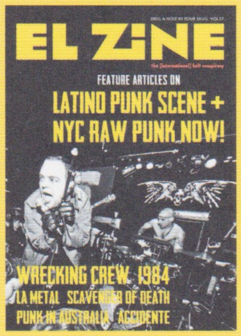
VOL.14 : STEVEN RUUD



VOL.15 : 1981



VOL.16 : TOM AND BOOT BOYS



VOL.17 : LATINO AND NYC PUNK



VOL.18 : ANASAZI



VOL.19 : METAL PUNK



VOL.20 : YOUNG PUNKS SOLD OUT!!



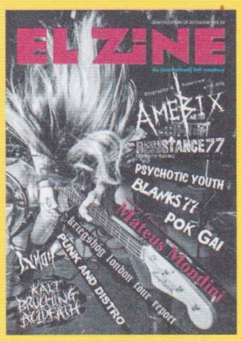
VOL.21 : BELGRADO



VOL.22 : POISON IDEA



VOL.23 : GORILLA ANGREB



VOL.24 : MATEUS MONDINI

THANKS FOR READING! FOR PUNKS! BY PUNKS!

editor's notes

バック・ナンバーの数が増えるに従い、この「編集後記」のスペースがドンドン狭くなっているという驚愕の事実!!表紙画像を小さくすればいいんですけどね、なんか、チョット面倒臭いから、このままでいいか…と放置していたらこの狭さですよ!でも次号はどうしようかな?そうだ、次号は7月末くらいの発行予定です。暫し休憩するぜ!Enjoy Vacation!

※インタヴュアー及び執筆者名の記載のない原稿は全て山路健二が記した　※EL ZINE vol.25　2017年4月28日発行　E-MAIL　unno13@gmail.com
※バック・ナンバーはパンク/ハードコア取扱店　又はhttp://www.juzasha.comにてお求めになれます

TROUBLEMAKERS Photo by Roine



EL ZiNE VOL.25 600 YEN



the [international] kvlt conspiracy EL ZINE CONTROL THROUGH TRAUMA VOL.25

EL Z



Göteborg Punk &

ANTI CIA

Roine from PSYCHO
Johan from PROTES
Sebastian Todor & Sce

LEBENDEN TOT

CHIRO vs
MORLEY